く含む。

甕

51は残存高7.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミは持たないが、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。内外面は劣化のため調整等不明である。52は残存高5.7cmを測る逆「L」字状口縁のものであるが、口縁端部を欠損し、詳細は不明である。口縁部直下には8条のヘラ描き沈線を施す。外面縦方向のハケ調整を行うが、内面は劣化のため調整等不明である。胎土はいずれも橙褐色を呈し5mm程度の長石粒を多く含む。

石器（Fig.119～120）

黒色粘土出土石器（Fig.119）

石鏃（55・56）、石鏃未製品（57）、磨製石包丁（58）、打製石包丁（59）が出土した。

石鏃

石材はすべてサヌカイトである。55は平基式の石鏃である。両面を調整し、一方に逆刺を作り出すが非常に薄い。切先を折損し、最大長（1.4cm）、最大幅1.4cm、最大厚0.5cm、重量（0.7g）を測る。56は凹基式の石鏃である。両面を調整し、切先を折損し、逆刺を欠損する。最大長（2.1cm）、最大幅1.5cm、最大厚0.4cm、重量（0.9g）である。

石鏃未製品

57は側縁全体に調整を施すが、切先から側縁にかけて折損している。最大長2.9cm、最大幅2.5cm、最大厚0.8cm、重量3.8gで、石材はサヌカイトである。

磨製石包丁

58は背部と刃部が湾曲する杏仁形の磨製石包丁である。両刃であるが、特に表面の刃部を明瞭に作り出し、横方向の擦痕が確認できる。紐部で欠損しており、最大長（11.4cm）、最大幅5.5cm、最大厚0.6cm、重量（54.0g）を測る。石材は流紋岩である。

打製石包丁

59は抉りをもつ打製石包丁である。背部には自然面と刃潰し加工が施され、刃部は簡単な両面調整によって作り

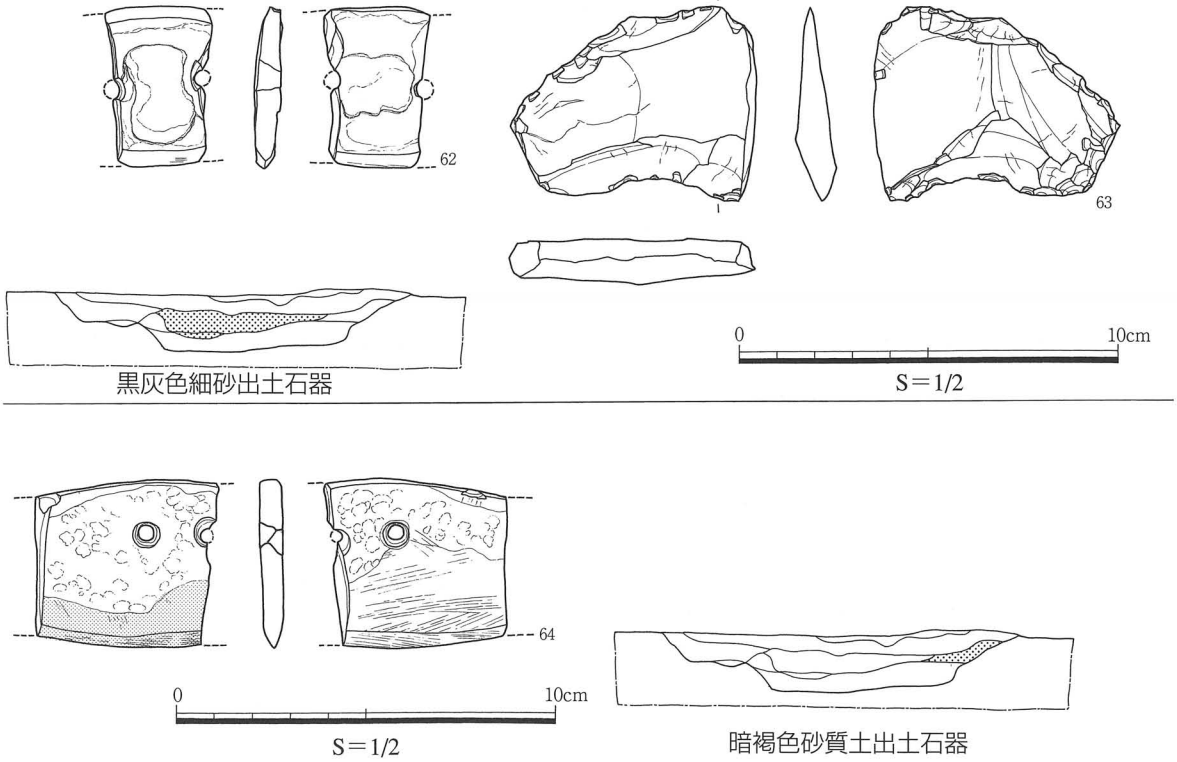


Fig.120　SD134出土石器（2）

出されている。折損しており、最大長（6.0cm）、最大幅5.4cm、最大厚（8.5cm）、重量（27.8g）を測る。石材はサヌカイトである。

暗褐色細砂出土石器（Fig.119）

敲き石（60）、砥石（61）が出土した。

敲き石

60は側面の一部と両面の体部に敲打面を有する。最大長6.7cm、最大幅6.9cm、最大厚5.2cm、重量315.0gで、石材は軟質の砂岩である。

砥石

61は砥石である。砥面に斜め方向の擦痕を残す。両端部を欠損し、最大長（9.4cm）、最大幅（8.1cm）、最大厚4.2cm、重量（430.0g）を測る。石材は流紋岩あるいは安山岩である。

黒灰色細砂出土石器（Fig.120）

磨製石包丁（62）、スクレイパー（63）が出土した。

磨製石包丁

62は両紐部で欠損しており、全体の形態はわからない。最大長（2.8cm）、最大幅4.3cm、最大厚（0.7cm）、重量（13.1g）を測る。石材は、緑白色の結晶片岩である。

スクレイパー

63は全体にローリングを受けており、稜線は不明瞭である。刃部は明瞭に作り出されていない。完形で、最大長5.2cm、最大幅6.5cm、最大厚1.2cm、重量36.7gを測る。石材はサヌカイトである。

暗褐色砂質土出土石器（Fig.120）

磨製石包丁（64）が出土した。

64の刃部は両刃で明瞭に作り出しており、斜め横方向の擦痕が確認できる。表面の刃部付近と背部に光沢面がみられる。紐部で欠損しており、最大長（4.9cm）、最大幅4.5cm、最大厚0.6cm、重量（24.7g）、石材は安山岩である。

SD167出土遺物

土器（Fig.121～126）

黒褐色粘質土出土土器（Fig.121～124）

壷（1～18）、甕（19～33・36～45）、鉢（34・35）、ミニュチュア土器（46～48）、高坏（49）、甕蓋（50）、土製円板（51～53）が出土した。

壷

1は復元口径16.0cm、残存高4.5cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には3条のヘラ描き沈線を施す。沈線は周辺を掻き取る事により削り出し突帯状に成形する。2は復元口径15.8cm、残存高6.3cmを測る。口縁部は比較的緩やかに開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には4条のヘラ描き沈線を施す。3は復元口径15.5cm、残存高8.5cmを測る。頸部は直線的に傾斜し、口縁部付近で短く開く。口縁端部は丸く納める。内外面横方向の密なヘラミガキを行う。4は復元口径21.0cm、残存高10.6cmを測る。口縁部は直線的に開いた後口縁部付近で急に開き、端部に面を持つ。口唇部には斜格子状のキザミを有する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。5は復元口径22.0cm、残存高8.2cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には4条のヘラ描き沈線を施す。6は復元口径16.6cm、残存高8.0cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部に面を持つ。口唇部は上方へ僅かにつまみ上げる。表面の劣化が著しいが、外面には横方向のヘラミガキを施す。7は復元口径17.0cm、残存高9.0cmを測る。頸部から緩やかに湾曲して広く開く口縁部を有し、口縁端部は丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部外面には縦方向のヘラミガキが残る。頸部には断面三角形の貼り付け突帯を一条施す。8は復元口径18.7cm、残存高9.0cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には4条のヘラ描き沈線を施す。9は復元口径19.0cm、残存高6.1cmを測る。直線的に開き口縁部上端で強く開く口縁部を有し、口縁部内面には一条の貼り付け突帯を持つ。表面の劣化が著し

く調整等は不明である。10は復元口径27.8cm、残存高7.5cmを測る。口縁部は「く」字状に比較的強く開き、端部に面を持つ。内外面横方向のヘラミガキを施す。11は復元口径39.3cm、残存高9.9cmを測る。口縁部は比較的緩やかに開き、端部肥厚して丸く納める。表面の劣化が著しいが、口縁部内面には横方向のヘラミガキが残る。頸部には1条の削り出し突帯が存在する。12は残存高3.9cmを測る。口縁部は比較的緩やかに開き、端部を丸く納める。内面ナデ調整、外面口縁端部に横方向のヘラミガキ、端部以下に縦方向のヘラミガキを施す。口縁部直下には削り出しによる段を有する。13は残存高6.1cmを測る。口縁部は長く緩やかに湾曲して開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には7条以上のヘラ描き沈線を施す。14は残存高6.5cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部をわずかにつまみ上げる。内外面横方向のヘラミガキを施す。15は底径6.1cm、残存高7.6cmを測り、緩やかに湾曲して開く体部を有する。内面板状工具によるナデを、外面底部付近を横方向・体部付近を縦方向のヘラミガキを施す。16は底径9.0cm、残存高13.3cmを測り、緩やかに湾曲して開く体部を有する。外面表面劣化が著しく調整等は不明であるが、内面ナデ調整を施す。17は復元底径3.2cm、残存高2.3cmを測る小型壷である。緩やかに開く体部を有し、底部外面はわずかに窪む。内外面ナデ調整を行う。18は底径5.1cm、残存高5.2cmを測り、球胴形を呈する。表面劣化が著しく調整等は不明である。いずれも胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、10・15はやや粒子が小さく、14は含有量も少ない。14は淡褐色を呈する。5・8・9・13は赤色酸化土粒を多く含む。

甕

19は復元口径19.0cm、残存高7.4cmを測る如意状口縁のもので、短く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。口唇部のキザミは見られず、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。外面板状工具によるナデ調整を、内面ナデ調整を行う。20は復元口径19.3cm、残存高7.1cmを測る如意状口縁のもので、やや長く緩やかに外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には2条1単位のヘラ描き沈線に区画された竹管文を2列施文する。表面劣化のため調整等不明である。21は残存高7.6cmを測る如意状口縁のもので、弱く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。口唇部のキザミや、口縁部直下の沈線は見られない。内外面ナデ調整を施す。胎土は灰白色で精良なもので、搬入品の可能性がある。22は残存高7.0cmを測る如意状口縁のもので、弱く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。全体的に薄手で口唇部のキザミは見られず、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。外面縦方向のハケ調整を施すが、内面は表面劣化のため調整等不明である。23は残存高5.3cmを測る如意状口縁のもので、強く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。口唇部のキザミや、口縁部直下の沈線は見られない。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面にはハケをナデ消した痕跡が残る。24は残存高4.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部は玉縁状に肥厚する。口唇部のキザミは見られず、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。25は残存高5.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、上面を傾斜させるやや長い口縁部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には竹管文と刺突文を沈線で区画した文様を刻む。内外面ナデ調整を施す。26は復元口径22.3cm、残存高8.2cmを測るもので、短く強く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。如意状口縁と逆「L」字状口縁の中間的な形態を呈する。口唇部のキザミは見られず、口縁部直下には9条のヘラ描き沈線を施す。外面ランダムなハケ調整を施し、内面は表面劣化のため調整等不明である。27は復元口径22.2cm、残存高11.2cmを測る薄手の如意状口縁のもので、弱く外反する口縁部と「S」字状を呈する体部を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下に2条を1単位とした半裁竹管文による沈線を3単位巡らし、間に竹管文を配する。表面劣化のため調整等不明である。28は復元口径25.5cm、残存高8.4cmを測る如意状口縁のもので、「く」字状に強く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には11条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。29は復元口径26.9cm、残存高6.3cmを測る如意状口縁のもので、「く」字状に外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。外面板状工具によるナデを、内面ナデ調整を行う。30は復元口径19.0cm、残存高9.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部を水平に長くのばす断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミは見られないが、口縁部直下には8条以上のヘラ描き沈線を施す。劣化のため調整等は不明である。31は復元口径20.8cm残存高6.8cmを測る逆「L」字状口縁のもので、長くのばす断面三角形の口縁を貼り付ける。口唇部にはキザミを、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。内面表面劣化のため調整等

は不明、外面縦方向の板状工具によるナデ調整を行う。32は復元口径23.6cm残存高9.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、断面四角形の肉厚の口縁部を貼り付ける。口唇部には幅広のキザミを有し、口縁部直下に9条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整を行うが、外面表面劣化のため調整等は不明である。33は復元口径24.5cm、残存高7.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部を水平に長くのばす断面四角形の口縁を貼り付ける。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には9条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。36は復元口径25.2cm、残存高16.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部が短い断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には7条のヘラ描き沈線を有す。内面体部は縦方向、口縁付近は横方向の板状工具によるナデ調整、外面縦方向のハケ調整を施す。37は残存高4.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、短い断面三角形の口縁を貼り付ける。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。38は残存高3.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の口縁を貼り付ける。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には2条以上の沈線が存在する。劣化のため調整等は不明である。39は残存高1.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部をやや長く水平に引き出す断面三角形の口縁を有する。口唇部にはキザミを有し、口縁部直下には沈線を施す。また、口縁部上面には竹管文を施す。内外面ナデ調整を施す。40は残存高2.9cmを測る。直立する口縁部を有し、口縁部直下には一条の貼り付け突帯を有する。口唇部にはキザミを有し、突帯直下には沈線を施す。41は残存高4.6cmを測る。直立する口縁部を有し、口縁部直下には一条の貼り付け突帯を有する。口唇部は波状口縁を呈し、突帯直下には沈線を持たない。42は体部の破片である。残存高5.5cmを測る。口縁部直下のものと思われ、4条1単位の櫛描文を3単位以上と、山形の刺突文を施す。43は底径7.1cm、残存高6.4cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内外面劣化のため調整等は不明である。底部には径0.7cm程度の焼成後穿孔が存在する。44は底径6.5cm、残存高7.8cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は不明瞭である。内面劣化のため調整等は不明であるが、外面にはわずかに縦方向のハケ調整の痕跡が残る。底部には径1.2cm程度の焼成後穿孔が存在する。45は底径7.1cm、残存高9.9cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内外面ナデ調整を施す。底部には径0.9cm程度の焼成後穿孔が存在する。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、25・29・31はやや粒子が小さく、29・31は含有量も少ない。18・25・28・29・31・37は暗褐色を、24・41は淡褐色を呈する。22・27・32は赤色酸化土粒を多く含む。21は先述の通り精良な胎土で搬入品の可能性がある。

鉢

34は復元口径23.8cm、残存高8.7cmを測り、やや湾曲する体部とわずかに外側に引き出す口縁部を有する。あるいは無頸壷である可能性もある。キザミや沈線は持たない。表面劣化のため調整等不明である。35は復元口径25.7cm、器高13.7cm、底径7.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、短い断面三角形の貼り付け口縁を有する。キザミ及び沈線を持たない。表面劣化のため調整等不明である。胎土は共に径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものである。

ミニチュア土器

46は底径2.6cm、残存高2.7cmを測り、強くすぼまる底部を有する。てづくね成形である。47は底径3.2cm、残存高4.0cmを測り、直線的な体部を有する。内外面ナデ調整を行う。48は底径4.5cm、残存高4.3cmを測り、歪みが著しい。てづくね成形である。胎土は共に径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものである。

甕蓋

50は天井部復元径7.0cm、残存高6.6cmを測り、天井部外面は広く窪む。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈する。内面はナデ、外面はミガキを施す。

高坏

49は脚部底径7.3cm、坏部残存高5.2cm、脚部残存高3.0cmを測る。表面劣化が著しく調整等は不明である。胎土は3mm程度の長石粒を多く含み、橙褐色を呈する。

土製円板

51は径4.6cm、厚さ2.5cmで楕円形を呈し、重量44.2gを測る。専用品である。側縁部にはキザミを、中央部には径3mmの焼成前穿孔が存在する。内外面表面劣化のため調整不明である。52は直径3.7cmの円形を呈し、重量10.5gを

測る。土器転用のものである。周囲を打ち欠き後研磨等は行わない。外面ヘラミガキの痕跡が見られるが、内面は表面劣化のため調整不明である。53は直径4.6cmの円形を呈し、重量14.1gを測る。土器転用のものである。周囲を打ち欠き後研磨等は行わない。内外面表面劣化のため調整不明である。胎土はいずれも3mm程度の長石粒を多く含み、橙褐色を呈するものであるが、51は化粧土を塗布する。

暗灰色砂質土出土土器（Fig.124）

壷（54・57）、甕（56・59～60）、鉢（55・58）が出土した。

壷

54は復元口径17.2cm、残存高6.2cmを測り、口縁部はラッパ状に広く開く。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を施す。57は胴部の破片である。残存高6.0cmを測る。胴部中央付近に4条のヘラ描き沈線と2条の貼り付け突帯を有する。突帯には幅広のキザミを施す。内面ユビオサエが傑出し、外面調整は表面劣化のため不明である。胎土はいずれも3mm程度の長石粒を多く含み、54は橙褐色、57は淡褐色を呈する。

甕

56は残存高5.5cmを測る如意状口縁のもので、やや強く外反する口縁部と張り気味の体部を有する。劣化が著しくキザミの有無については不明であるが、口縁部直下には2条1単位のヘラ描き沈線と竹管文を施す。胎土・形態・施文などから黒褐色粘質土出土のもの（20）と同一個体である可能性がある。59は復元口径17.3cm、残存高6.6cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を行う。60は残存高4.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。外面は劣化のため調整等不明であるが、内面にはナデの痕跡を有する。胎土は58・59・60が褐色で砂粒が少ないのに対し、56は橙褐色を呈し赤色酸化土粒を多く含む。

鉢

55は残存高3.2cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。内外面ナデ調整を、頸部には2条以上の沈線を施す。胎土は橙褐色を呈しやや砂粒が少ない。58は残存高5.7cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。キザミ及び沈線を持たない。表面劣化のため調整等不明である。

暗灰色粘土出土土器（Fig.124～126）

壷（61～68）、甕（69～81）、甕蓋（82・83）、土製円板（84）が出土した。

壷

61は復元口径13.8cm、残存高7.6cmを測る。口縁部は比較的直線的に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には削り出し突帯を有する。62は復元口径18.0cm、残存高7.8cmを測る。口縁部はやや強く屈曲して開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には4条のヘラ描き沈線を施し、沈線の周辺を掻き取り、削り出し突帯状に成形する。63は底径4.4cm、残存高4.1cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、外底面はやや上げ底になる。劣化が著しく、調整等は不明である。64は底径6.0cm、残存高5.9cmを測り、直線的に立ち上がった後緩やかに湾曲して開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。外面劣化が著しく、調整等不明であるが、内面には密なヘラミガキが残る。65は復元底径7.5cm、残存高5.3cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は不明瞭で、外底面はやや上げ底になる。外面ナデ調整、内面ユビオサエを施す。66は残存高3.1cmを測る。口縁部は屈曲して開き、端部わずかに面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、口縁部には焼成前に穿たれた円孔を有する。67は残存高4.7cmを測る。口縁部は湾曲して広く開き、端部に面を持つ。口唇部と口縁部内面にヘラ描き沈線を施す。表面の劣化が著しく調整等は不明である。68は復元口径36.3cm、残存高17.3cmを測る。口縁部は比較的強く開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、口縁部外面には横方向のヘラミガキが残る。頸部には3条のヘラ描き沈線を施し、沈線付近を掻き取ることによって削り出し突帯状に成形する。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、64は暗褐色を、65・66は淡褐色を呈する。

甕

69は口径29.2cm、器高34.4cm、底径8.8cmを測る如意状口縁のもので、やや強く外反する口縁部と緩やかに湾曲す

る体部を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下に4条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化が著しいが、体部外面には縦方向のハケ調整が見られる。70は残存高6.9cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部と、屈曲して強く張る体部を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。71は残存高4.0cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部と直線的な体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を施す。内面板状工具によるナデ調整を、外面ナデ調整を施す。72は残存高4.8cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線と沈線間に刺突文を施す。表面劣化のため調整等不明である。73は残存高6.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、上端を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁部と、直線的な体部を有する。口唇部のキザミはみられないが、口縁部直下に5条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。74は残存高6.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、薄手である。水平にやや長くのばす口縁部を貼り付け、直線的な体部を有する。口唇部のキザミはみられず表面劣化のため沈線も不明瞭で、調整等も不明である。75は残存高11.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、水平に伸びる貼り付け口縁部と、緩やかに湾曲する体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条を1単位とする沈線に画される2条1単位のヘラ描きによる山形文を有する。内外面ナデ調整を施す。76は残存高7.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、断面三角形の小さい口縁部と、強く張る体部を有する。口唇部のキザミはみられず口縁部直下には8条のヘラ描き沈線を施す。内面劣化のため調整不明であるが、外面はナデ調整を施す。77は残存高5.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、上端を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁部と、直線的な体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には8条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。78は残存高5.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、玉縁状の口縁部と、直線的な体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を行う。79は残存高5.3cmを測る。直線状の口縁を有し、口縁部直下に1条の貼り付け突帯を有す。突帯はキザミを有し、突帯直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を行う。80は復元口径22.2cm、残存高7.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、上端を水平にする断面三角形の貼り付け口縁部と、直線的な体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には2条1単位のヘラ描き沈線とそれに画される山形文を施す。内面板状工具によるナデ調整を、外面下半には粗いヘラミガキを施す。81は残存高5. 4 cmを測り、直線的な口縁部と1条の貼り付け突帯を有する。口縁部は波状を呈し、キザミや沈線は見られない。表面劣化のため調整等不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、71・72・78・79は暗褐色を、73・81は淡褐色を呈する。71は砂粒の含有が少なく、70は赤色酸化土粒を多く含む。

甕蓋

82は天井径5.8cm、残存高5.4cmを測り、天井部外面は広く窪む。表面劣化のため外面調整等は不明であるが、内面にはヘラミガキの痕跡が残る。83は天井部径7.0cm、残存高5.8cmを測り、天井部外面は広く窪む。表面劣化のため内外面調整等は不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈する。

土製円板

84は土器転用の円板である。直径3.2cm、厚さ1.2cm、重量14.0gを測り、周囲を打ち欠きで仕上げる。胎土は径5mmの長石粒を少量含み、暗褐色を呈する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。

暗灰褐色砂質土出土土器（Fig.126）

壷（85・94）、甕（86～92）、高坏（93）が出土した。

壷

85は肩部の破片である。残存高4.6cmを測る。幅広の削り出し突帯を成形した後、ヘラ描きによる斜格子状のキザミを施す。表面劣化のため調整は不明である。94は底径8.9cm、残存高5.7cmを測り、直立気味に立ち上がった後直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。劣化が著しく調整等は不明である。胎土は共に径5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈する。

甕

86は残存高3.6cmを測る如意状口縁を有し、口唇部には竹管文を施す。口縁部直下には6条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等は不明である。87は復元口径24.4cm、残存高5.3cmを測る逆「L」字状口縁のも

ので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条1単位の沈線に画された2条1単位の山形文を施す。表面劣化のため内外面調整等不明である。88は残存高8.0cmを測る如意状口縁のもので、強く短く屈曲させる口縁部を有する。口唇部のキザミは見られず、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施すと思われるが、表面の劣化が著しく詳細は不明である。89は復元口径15.0cm、残存高5.3cmを測る直立する口縁を有するもので、口縁部直下には1条の貼り付け突帯を有す。突帯端部にはキザミを有し、直下には11条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化のため調整等不明である。90は復元口径19.4cm、残存高6.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや口縁部直下の沈線は見られない。内外面劣化のため調整等は不明である。91は残存高7.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、玉縁状の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化のため調整等は不明である。92は残存高5.3cmを測る直立する口縁を有するもので、口縁部直下には1条の貼り付け突帯を有す。突帯端部にはキザミを有し、突帯直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化のため調整等不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、89はやや粒子が小さく、89は含有量も少ない。88は暗赤褐色を、89は暗褐色を、90・92は淡褐色を呈する。

高坏

93は残存高6.6cmを測る。内外面ユビオサエとナデで調整する。胎土は3mm程度の長石粒を多く含み、暗褐色を呈する。

黒色粘土出土土器（Fig.126）

壷（95～98）、甕（99・100）が出土した。

壷

95は復元口径16.9cm、残存高7.7cmを測る。頸部はやや直立し、口縁部は比較的急に開いた後丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明瞭であるが外面には横方向のヘラミガキが残る。頸部には5条のヘラ描き沈線を施した後沈線周辺を掻き取り、削り出し突帯状に仕上げる。96は復元口径19.9cm、残存高6.4cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部に面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、内面僅かに横方向のヘラミガキが残る。97は復元底径6.6cm、残存高3.3cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部は円板状を呈し、底部と体部の境界にはヘラ状工具により沈線が施される。内外面ナデ調整を施す。98は復元底径7.8cm、残存高3.2cmを測り、広く開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、外底面は広く窪む。内面は表面の劣化が著しく、調整等は不明であるが、外面横方向のヘラミガキを施す。体部下端にヘラ状工具による2条の沈線を施す。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、97・98は暗褐色を呈する。

甕

99は残存高4.2cmを測る如意状口縁のもので、短く外反する口縁部と直線的な体部を有する。キザミ及び沈線を持たない。表面劣化のため調整等不明である。100は残存高3.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、玉縁状の口縁部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を行う。暗灰色粘土出土のもの（78）と同一個体である可能性がある。胎土は99が径3mm程度の長石粒を多く含み黒褐色を、100は砂粒が少なく淡褐色を呈する。

灰白色地山ブロック土出土土器（Fig.126）

甕（101）が出土した。

101は残存高4.3cmを測る如意状口縁を呈するものである。弱く外反する口縁部を有し、口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には7条のヘラ描き沈線を施す。胎土は径5mm前後の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。表面劣化のため調整は不明である。

石器（Fig.127～130）

黒褐色粘質土出土石器（Fig.127～129）

石鏃（102～107・109・110）、石鏃未製品（108）、石錐（111・112）、石匙（113）、スクレイパー（114）、磨製石包丁（115）、打製石包丁（116～119）、楔形石器（120）、柱状片刃石斧（121）、敲き石（122）、石皿（123）が出土

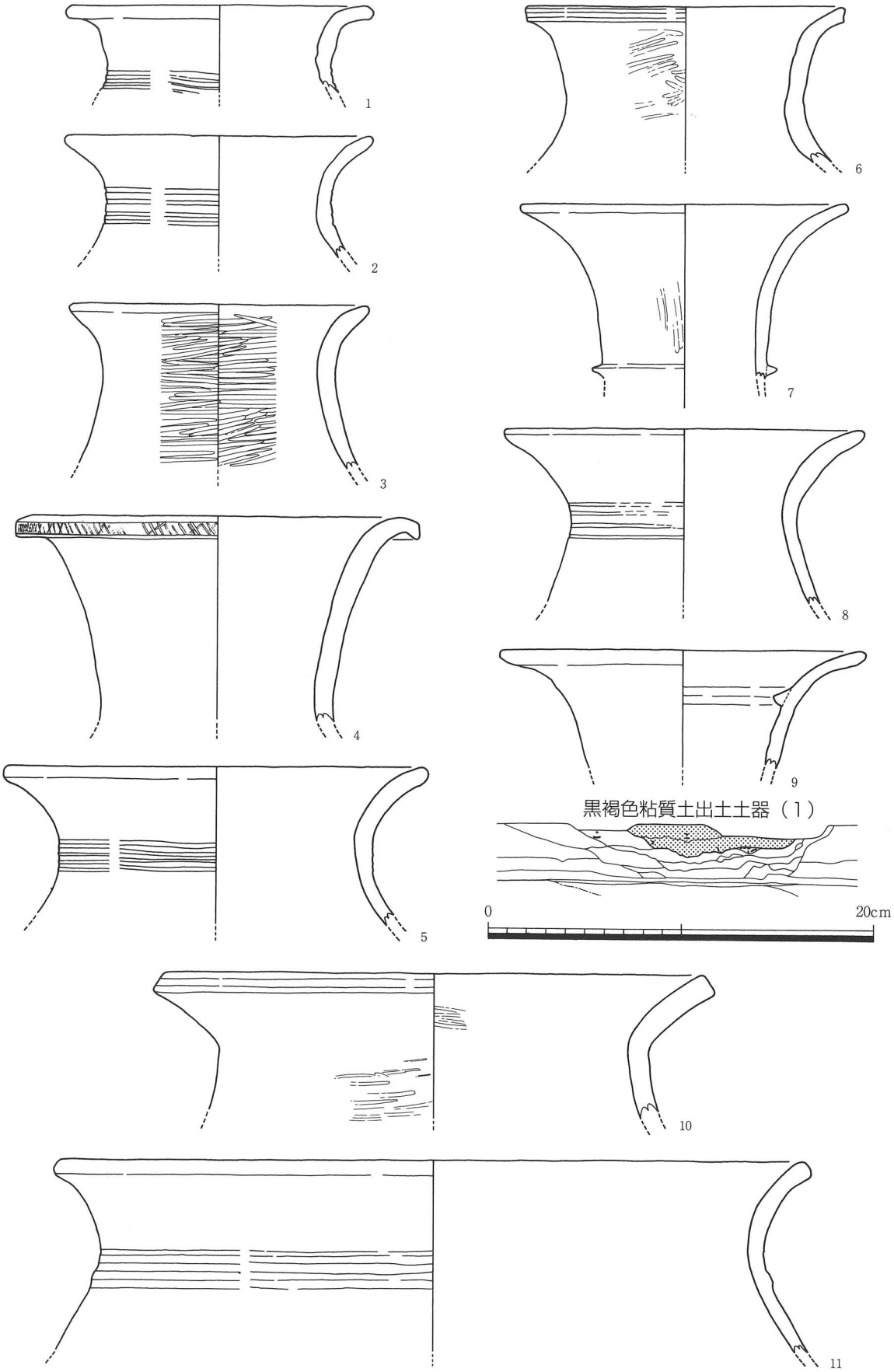
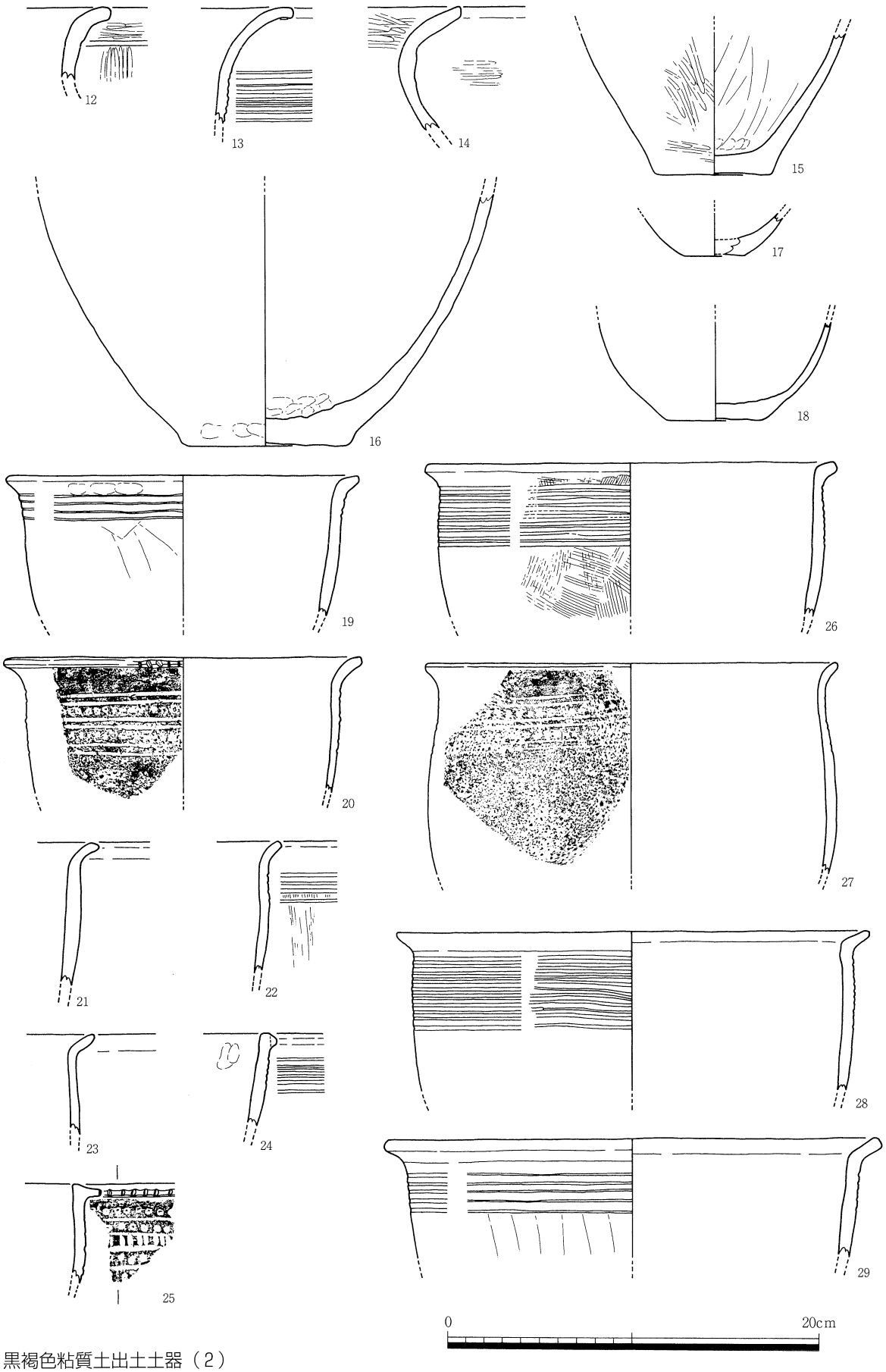


Fig.121　SD167出土土器（1）　（S＝1/3）



黒褐色粘質土出土土器（2）

Fig.122　SD167出土土器（2）　（S＝1/3）

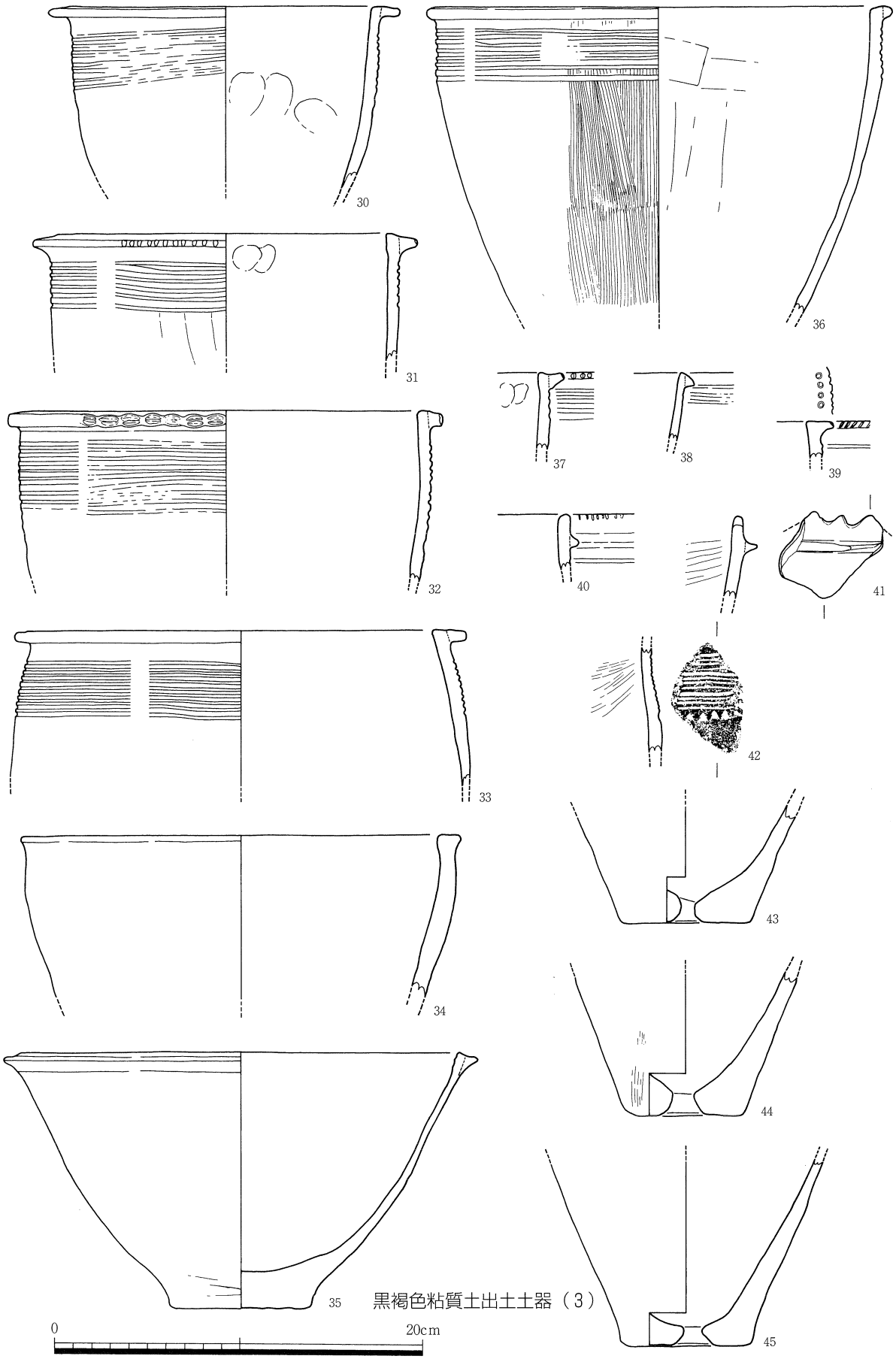


Fig.123　SD167出土土器（3）　（S＝1/3）

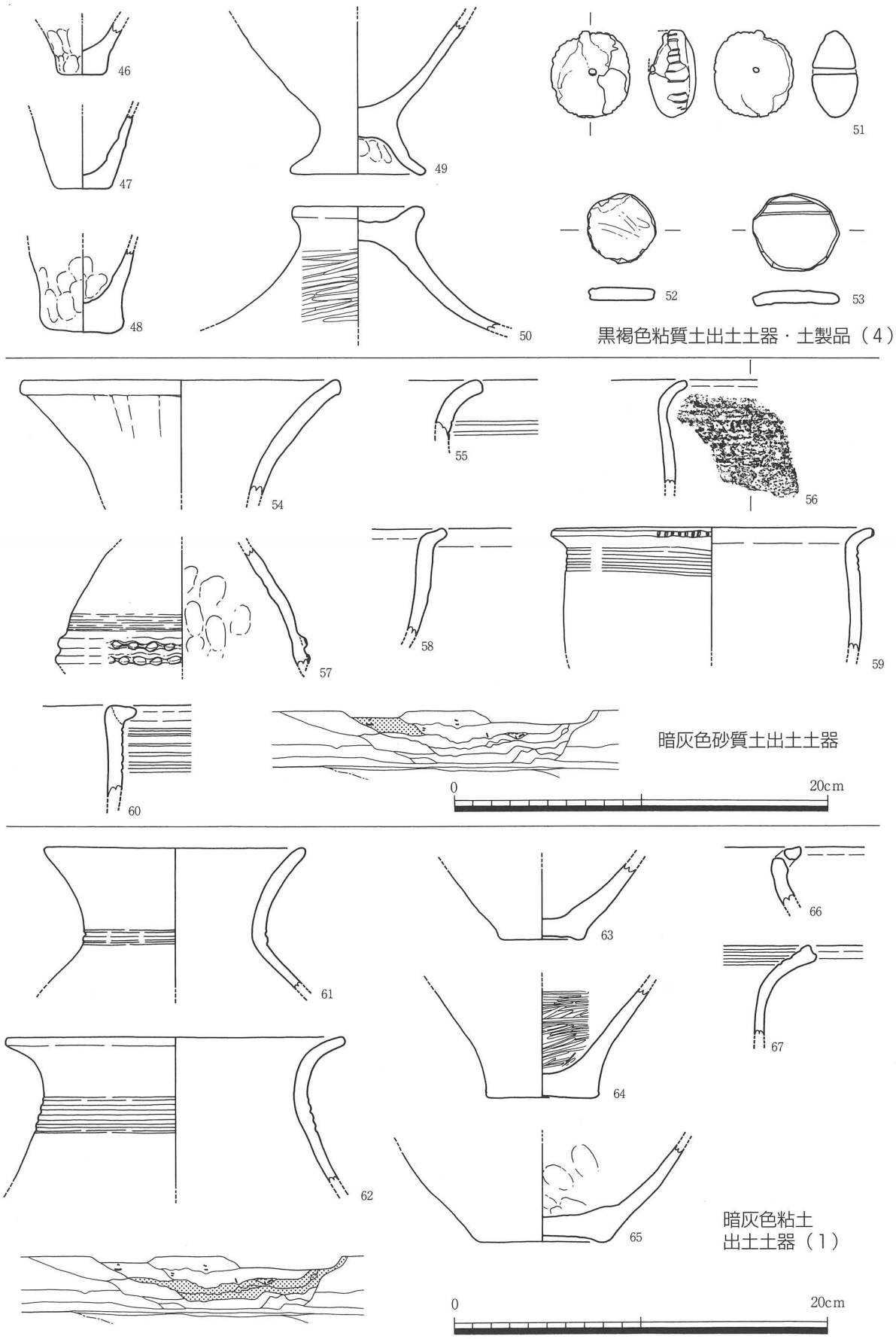


Fig.124　SD167出土土器・土製品（4）　（S＝1/3）

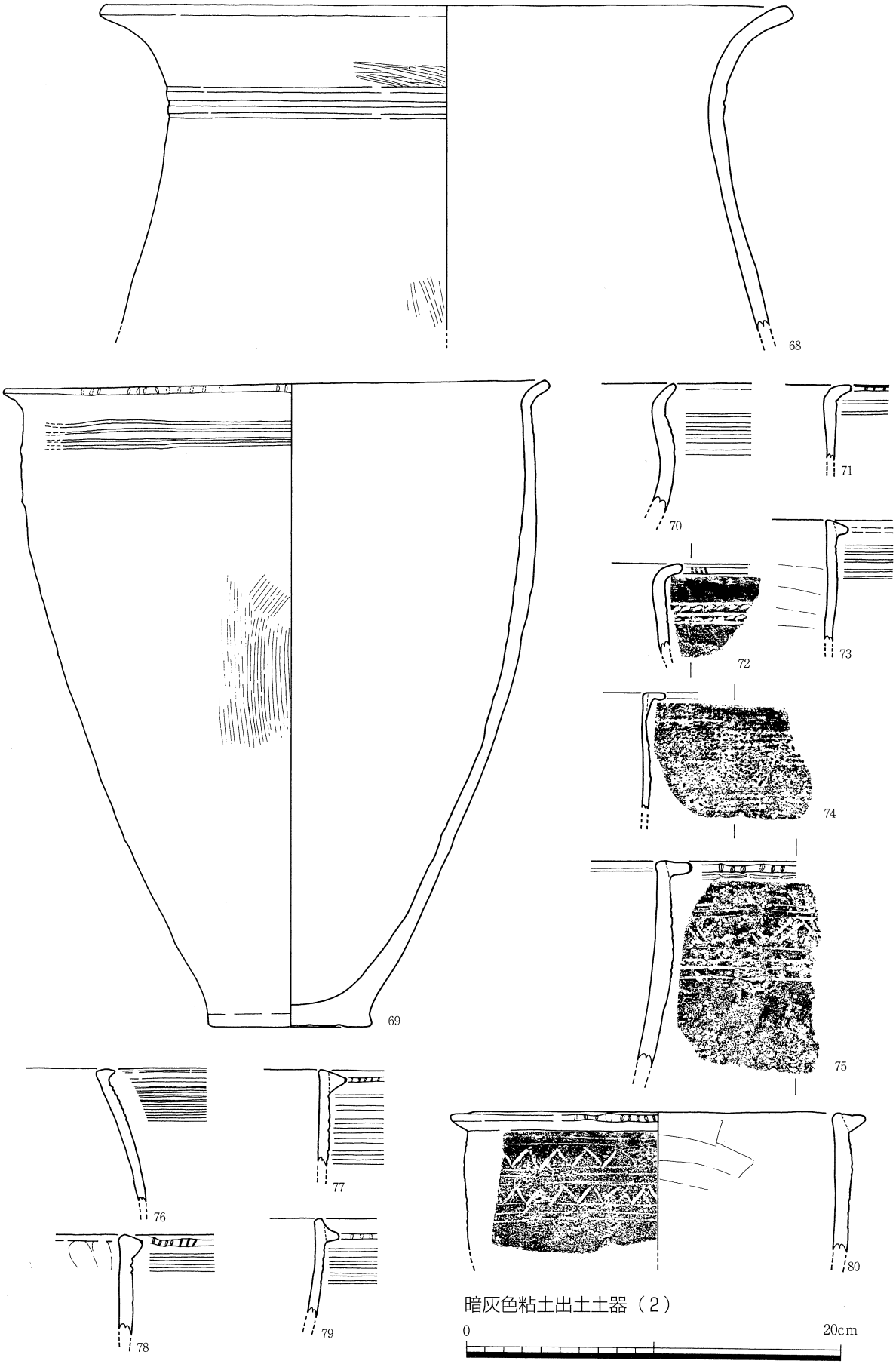


Fig.125　SD167出土土器（5）　（S＝1/3）

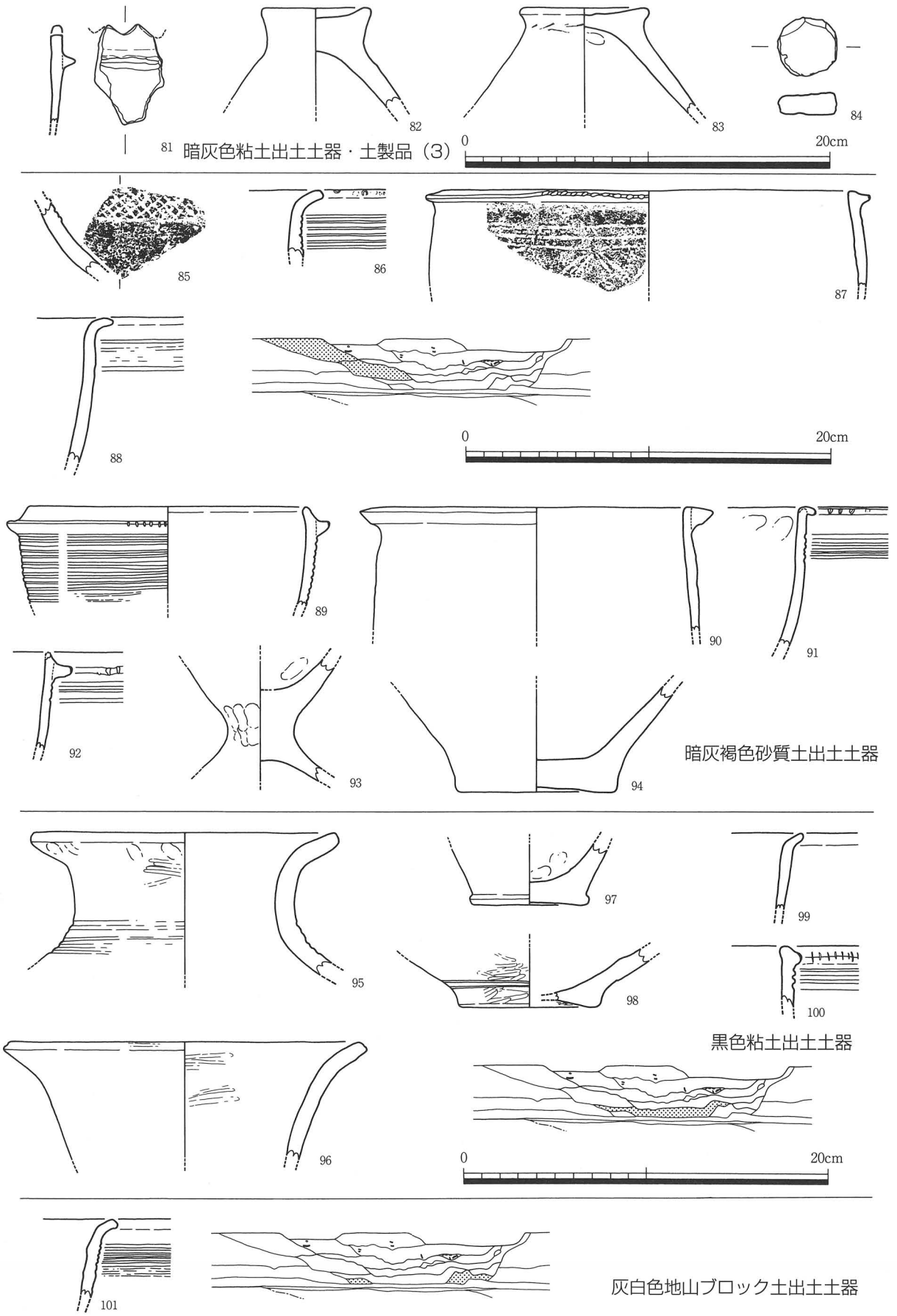
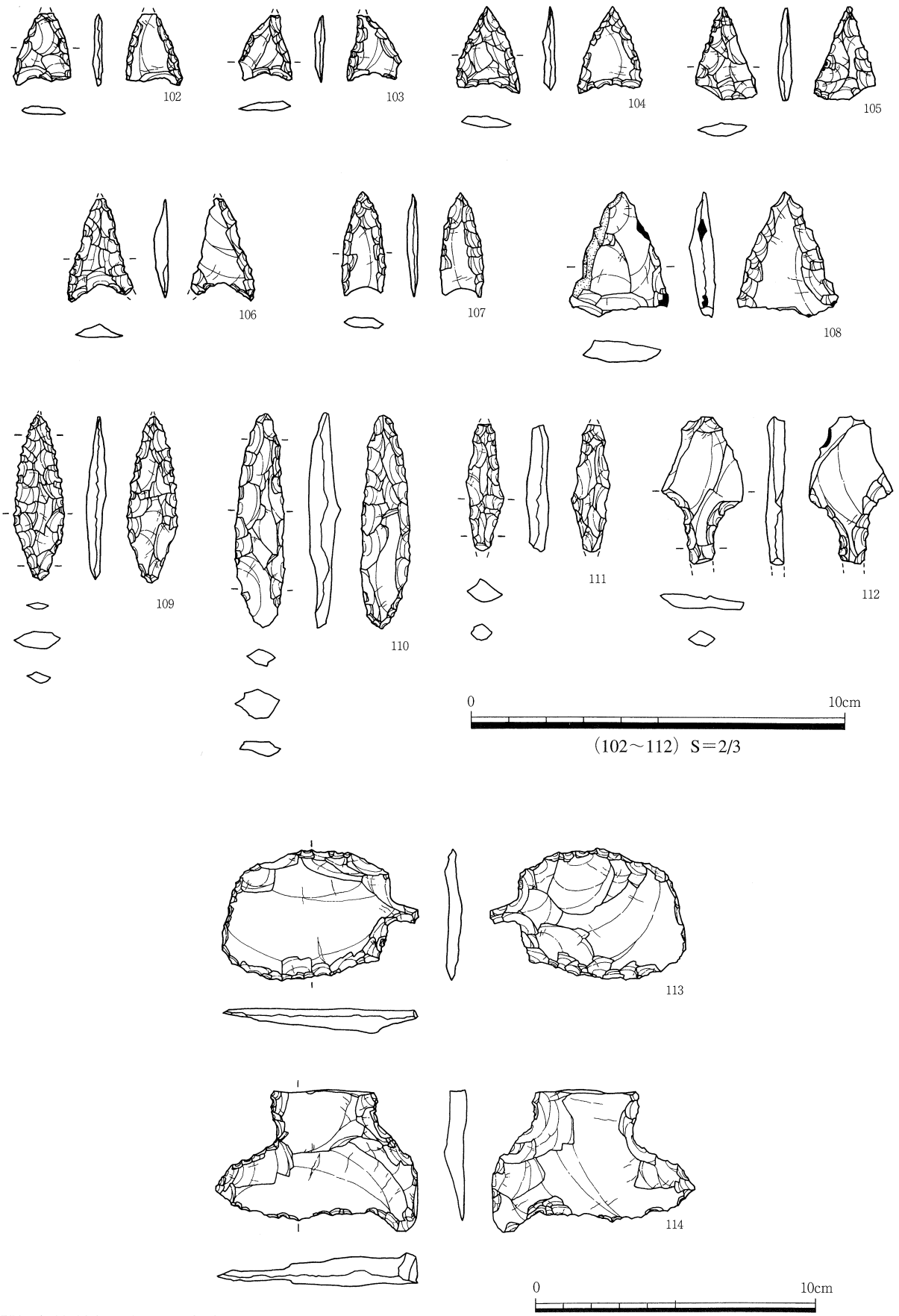
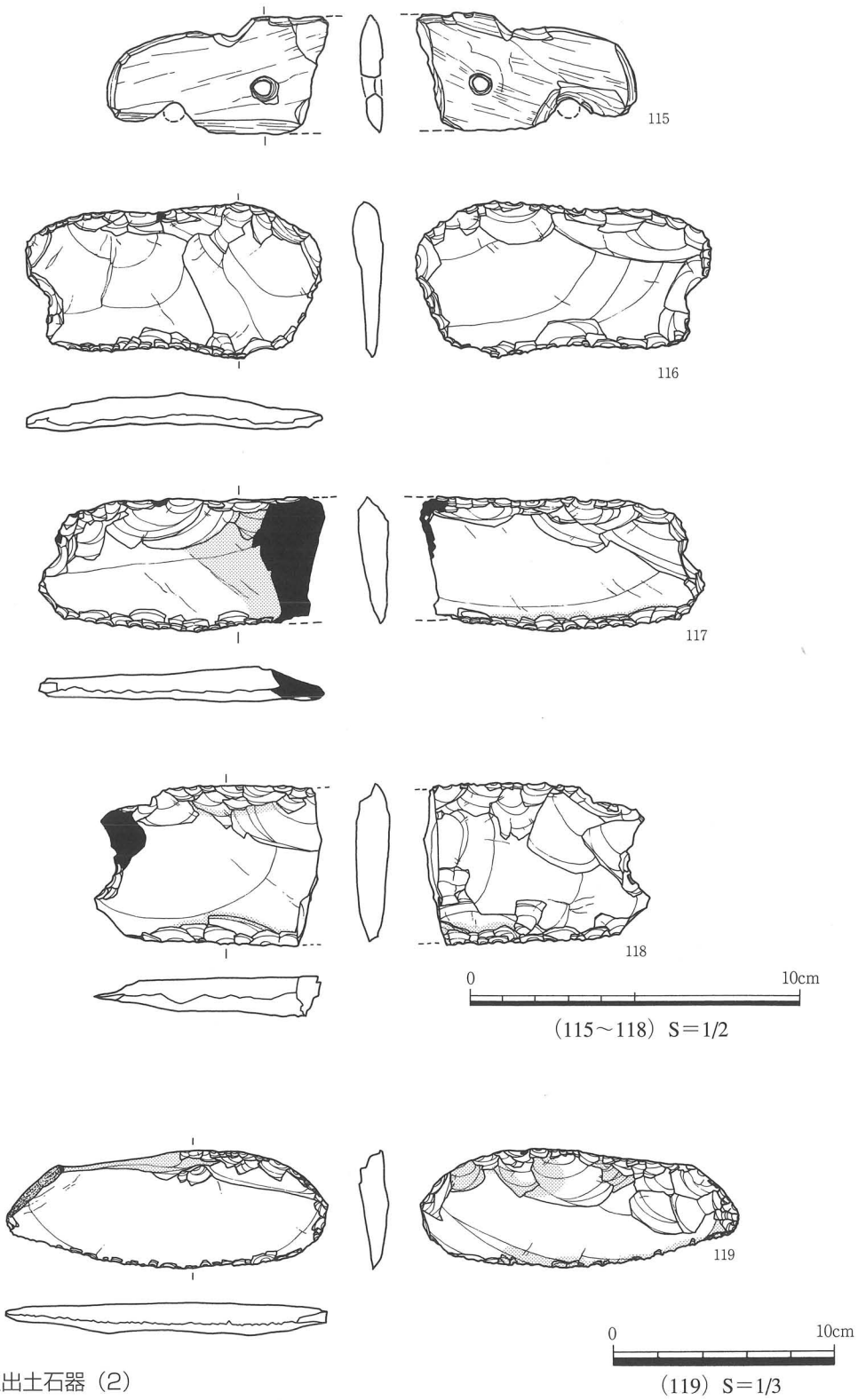


Fig.126　SD167出土土器・土製品（6）　（S＝1/3）



黒褐色粘質土出土石器（1）

Fig.127　SD167出土石器（1）



黒褐色粘質土出土石器（2）

Fig.128　SD167出土石器（2）

した。

石鏃

石材はすべてサヌカイトである。102は凹基式の石鏃であるが、一方の逆刺は作り出されていないため平基式と

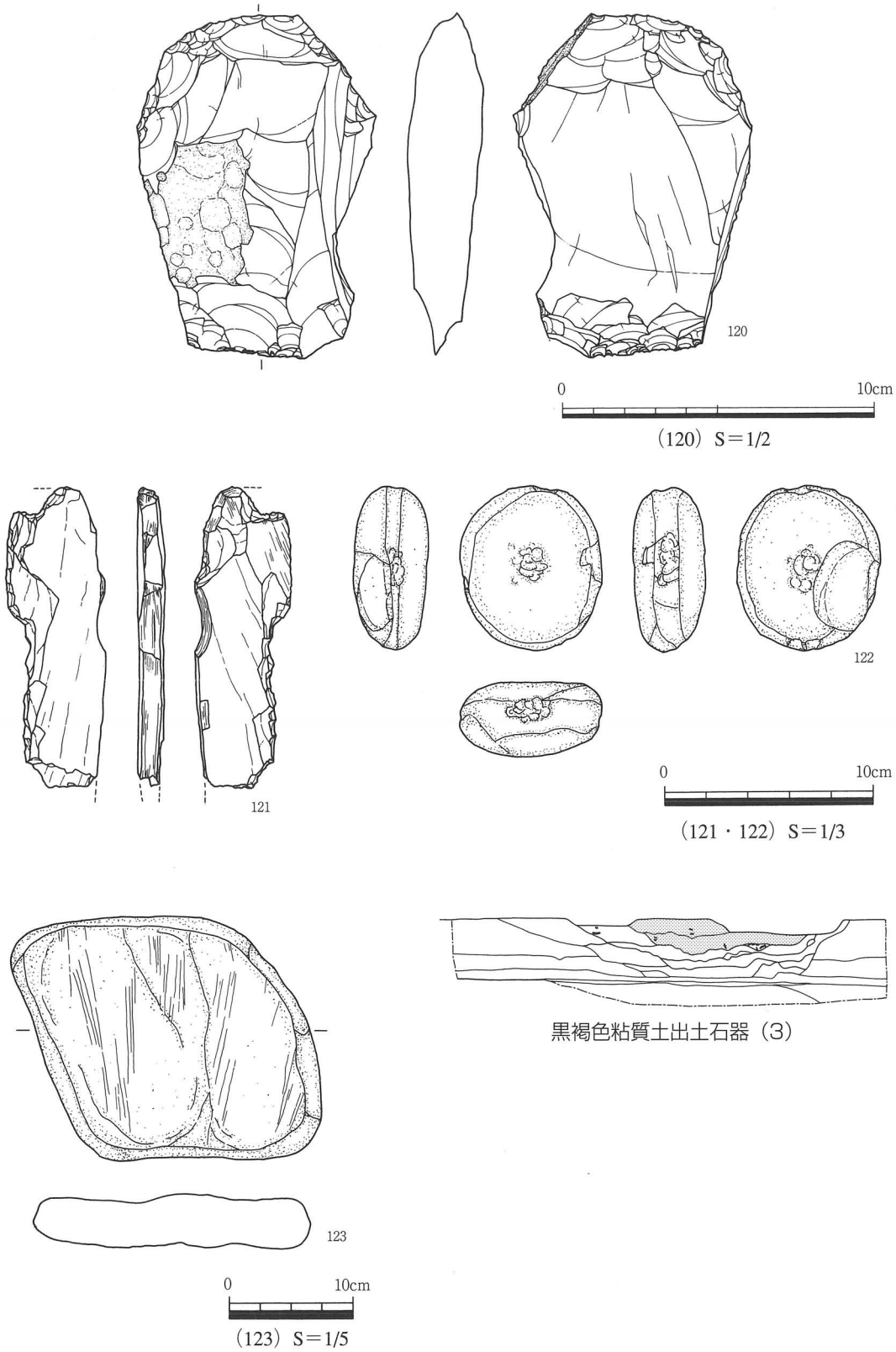


Fig.129　SD167出土石器（3）

も考えられる。腹面に素材面を残す。先端を折損し、最大長（1.9cm）、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重量（0.8g）である。103は平基式の石鏃である。両面に素材面を残す。先端を欠損し、最大長（1.7cm）、最大幅1.4cm、最大厚0.3cm、重量（0.6g）を測る。104は平基式の石鏃である。腹面に素材面を残している。完形で最大長2.3cm、最大幅

1.7cm、最大厚0.3cm、重量1.0gを測る。105は平基式の石鏃である。全面に調整が施され、基部を折損する。最大長2.5cm、最大幅（1.8cm）、最大厚0.5cm、重量（1.0g）である。106は凹基式の石鏃である。素材面を残し、切先と逆刺の先端を折損する。最大長（2.8cm）、最大幅1.8cm、最大厚3.5cm、重量（1.1g）を測る。107は平基式の石鏃である。背腹両面に素材面をのこす。基端は折れ面で、側縁の調整が折れ面を切っていることから素材の段階から折れていたと考えられる。最大長2.8cm、最大幅1.2cm、最大厚0.3cm、重量0.8gで完形である。109は凸基式の大型の石鏃である。両面を調整しており、刃部は2～3mmの鋸歯状に調整されている。先端を欠損し、最大長（4.4cm）、最大幅1.4cm、最大厚0.6cm、重量（2.1g）を測る。110は凸基式の大型の石鏃である。両面を調整するが、先端は折損している。石錐の可能性も考えられる。最大長（5.7cm）、最大幅1.8cm、最大厚0.9cm、重量（5.1g）を測る。

石鏃未製品

108は自然面を残すが、切先と側縁には調整が施されている。基部は折損しており、調整は施されていない。最大長3.4cm、最大幅2.7cm、最大厚0.7cm、重量5.0gで、石材はサヌカイトである。

石錐

石材はすべてサヌカイトである。111は頭部と錐部の境がなく、ほぼ一定の幅を持つ棒状の石錐である。両刃部を折損している。最大長（3.4cm）、最大幅1.4cm、最大厚0.6cm、重量（1.8g）を測る。112は頭部と錐部の境が明瞭で、錐部が細長い石錐である。背腹両面に素材面を残している。刃部を折損する。最大長（3.9cm）、最大幅2.2cm、最大厚0.6cm、重量（3.1g）を測る。

石匙

113はつまみが刃部側に向く形態と考えられるが、縦長の形態の可能性も考えられる。両面に素材面を残し、刃部には両面調整を施す。背部に折損面がみられる。完形で最大長4.7cm、最大幅7.0cm、最大厚0.8cm、重量22.2gを測る。石材はサヌカイトである。

スクレイパー

114は両側に抉りを持つスクレイパーである。素材面を残し、刃部は両面調整が施されている。基端を折損する。最大長（5.0cm）、最大幅7.2cm、最大厚1.2cm、重量（31.4g）で、石材はサヌカイトである。

磨製石包丁

115は磨製石包丁であるが、紐部の位置が不自然であるため、石剣・石戈からの転用の可能性が考えられる。背部は研磨によって作り出され、刃部は片刃で横方向に擦痕がみられる。最大長（6.7cm）、最大幅3.5cm、最大厚（0.8cm）、重量（24.2g）を測り、石材は青色結晶片岩である。青色の結晶片岩製の遺物は中の池遺跡ではこの石包丁のみであり、製作の際に石材が選択されている可能性が考えられる。

打製石包丁

石材はすべてサヌカイトである。116は片側に抉りをもつ打製石包丁である。背部には刃潰し加工が、刃部は直線状に両面調整が施されている。刃部の磨滅は著しい。完形で最大長9.0cm、最大幅4.7cm、最大厚1.1cm、重量44.4gである。117は抉りをもつ打製石包丁である。背部に刃潰し加工、刃部は直線状に両面調整が施されている。背面の背部から体部にかけてと、腹面の刃部に弱い光沢面がみられる。欠損しており、最大長（8.7cm）、最大幅4.1cm、最大厚0.9cm、重量（38.1g）を測る。118は抉りを持つ打製石包丁である。背部に刃潰し加工が、刃部に粗い両面調整が施されている。背部付近に弱い光沢面がみられる。折損しており、最大長（6.9cm）、最大幅4.8cm、最大厚1.2cm、重量（45.9g）である。119は抉りをもたない大型の打製石包丁である。背部には研磨による刃潰し加工が施され、刃部は明瞭に作り出されていない。背面背部と腹面背部付近および刃部に弱い光沢面がみられる。側辺部に自然面が残る。完形で最大長13.7cm、最大幅5.4cm、最大厚1.5cm、重量107.0gを測る。

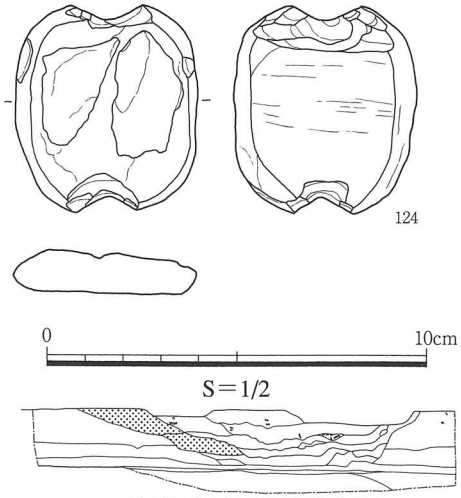


Fig.130　SD167出土石器（4）

楔形石器

120は板状剥片を素材とし、両側面の折れ面は不純物で折損したと考えられる。背面体部と側面の一部に自然面が残る。最大長10.9cm、最大幅7.7cm、最大厚2.4cm、重量241.0gで、石材はサヌカイトである。

柱状片刃石斧

121は抉りをもつ柱状片刃石斧である。抉りは丁寧な研磨によって作り出されている。石理に沿って剥離しており、全体の形状は復元できない。最大長（14.4cm）、最大幅（4.8cm）、最大厚（1.4cm）、重量（120.5g）を測り、石材は緑白色の結晶片岩である。

敲き石

122は側面と両面に敲打痕を有する。最大長7.8cm、最大幅6.9cm、最大厚3.6cm、重量243.0gで、石材は軟質の砂岩である。

石皿

123は表面に2面の皿部があり、それぞれに擦痕が確認できる。最大長19.3cm、最大幅24.9cm、最大厚4.3cm、重量3010.0gで石材は硬質の砂岩である。

暗灰褐色砂質土出土石器（Fig.130）

打欠石錘（124）が出土した。

124は緑白色の結晶片岩の扁平な石を打ち欠いている。完形で最大長5.5cm、最大幅4.8cm、最大厚1.2cm、重量51.6gである。

第3項　その他の弥生時代の溝出土遺物

SD131出土遺物

土器・土製品（Fig.131）

黒灰色細砂・暗褐色細砂出土土器・土製品（Fig.131）

壷（2～5）、甕（1・6～10）、甕蓋（11）、鉢（12・13）、土製円板（14・15）が出土した。

壷

2は復元底径8.3cm、残存高7.4cmを測り、緩やかに開く体部を有する。表面劣化が著しく調整等は不明である。3は底径9.0cm、残存高6.0cmを測り、緩やかに湾曲しながら開く体部を有する。外面は表面劣化が著しく調整等不明であるが、内面にはナデ調整を施す。4は復元頸部径17.4cm、残存高8.9cmを測る。口縁部は「く」字状に開き、口頸部境界に削り出しによる段を持つ。外面縦方向の板状工具によるナデの後横方向のヘラミガキを、内面口縁部に横方向のヘラミガキを行う。5は広く開く口縁部の破片である。残存高4.1cmを測る。口縁端部に面を持ち、1条の沈線を施す。表面の劣化が著しく調整等は不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、2・5はやや粒子が小さく、含有量も少ない。4・5は淡褐色を呈する。

甕

1は復元底径6.4cm、残存高4.0cmを測り、緩やかに開く体部を有する。表面劣化が著しく調整等は不明である。6は残存高4.8cmを測る如意状口縁のもので、短くやや強めに外反する口縁部を有する。口唇部のキザミは持たないが、口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。外面ナデ調整、内面劣化のため調整等不明である。7は残存高5.4cmを測る如意状口縁のもので、やや長く外反する口縁部を有する。口唇部劣化のためキザミの有無は不明であるが、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。8は残存高6.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする貼り付け口縁を有する。劣化のため口唇部のキザミの有無については不明であるが、口縁部直下には10条程度のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化のため調整等不明である。9は残存高3.9cmを測る如意状口縁のもので、強くやや長く外反する口縁部を有する。口唇部劣化のためキザミの有無は不明であるが、口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を有する。劣化のため調整等は不明である。10は残存高4.9cmを測る如意状口縁のもので、口縁端部を欠損する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

甕蓋

11は天井径6.1cm、残存高6.9cmを測り、天井部外面は広く窪む。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈する。表面劣化のため調整は不明である。

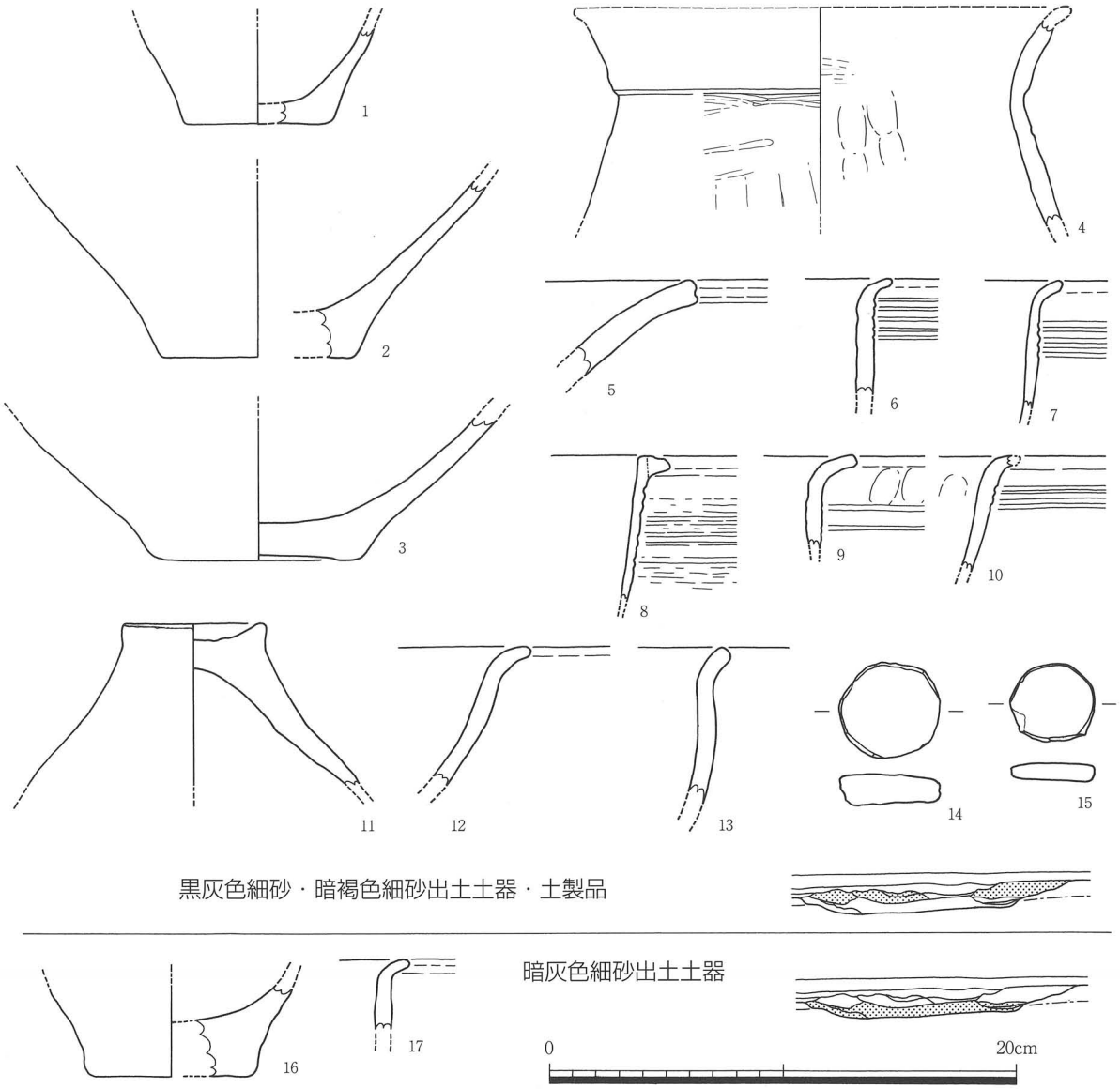


Fig.131　SD131出土土器・土製品　（S＝1/3）

鉢

12は残存高5.9cmを測る如意状口縁のもので、弱く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミを持たず、口縁部直下の沈線も見られない。劣化のため外面調整等は不明であるが、内面にはナデもしくはヘラミガキの痕跡が残る。13は残存高6.8cmを測る如意状口縁のもので、弱く外反する口縁部を有する。口唇部のキザミや口縁部直下の沈線は見られない。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

土製円板

14は直径4.3cmの円形を呈し、重量21.9gを測る。土器転用のものである。周囲を打ち欠き後研磨等は行わない。内外面表面劣化のため調整不明である。15は直径3.6cmの円形を呈し、重量11.2gを測る。土器転用のものである。周囲を打ち欠き後研磨等は行わない。内外面ナデ調整を施す。胎土は14が径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を、15が暗灰色を呈する。

暗灰色細砂出土土器（Fig.131）

壷（16）、甕（17）が出土した。

壷

16は復元底径6.6cm、残存高3.9cmを測る。底部付近は直立気味に立ち上がった後、緩やかに湾曲する体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。劣化のため調整等は不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

甕

17は残存高3.0cmを測る如意状口縁のもので、やや強く短く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミを持たず、口縁部直下の沈線も見られない。劣化のため外面調整等は不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

第4項　古墳時代の溝出土遺物

SD082出土遺物（Fig.132）

須恵器蓋（1～3）が出土した。

いずれも天井部のみの破片である。残存高は1が1.5cm、2が3.5cm、3が2.2cmを測る。内面ヨコナデ、天井部外面ヘラ切りの後1・3は回転ヘラケズリ、2はヘラ切り後にヨコナデ調整を施す。2は1・3に比してやや口径が小さく、3は天井部内面に当て具痕を有する。若干の時期差を有するようであるが、1・3はローリングを受けており、2の年代観から遺構の廃絶時期を7世紀第2四半期に置くことができる。

SD084出土遺物（Fig.132）

土師器甕（9）、須恵器甕（10）、弥生土器甕（11）が出土した。

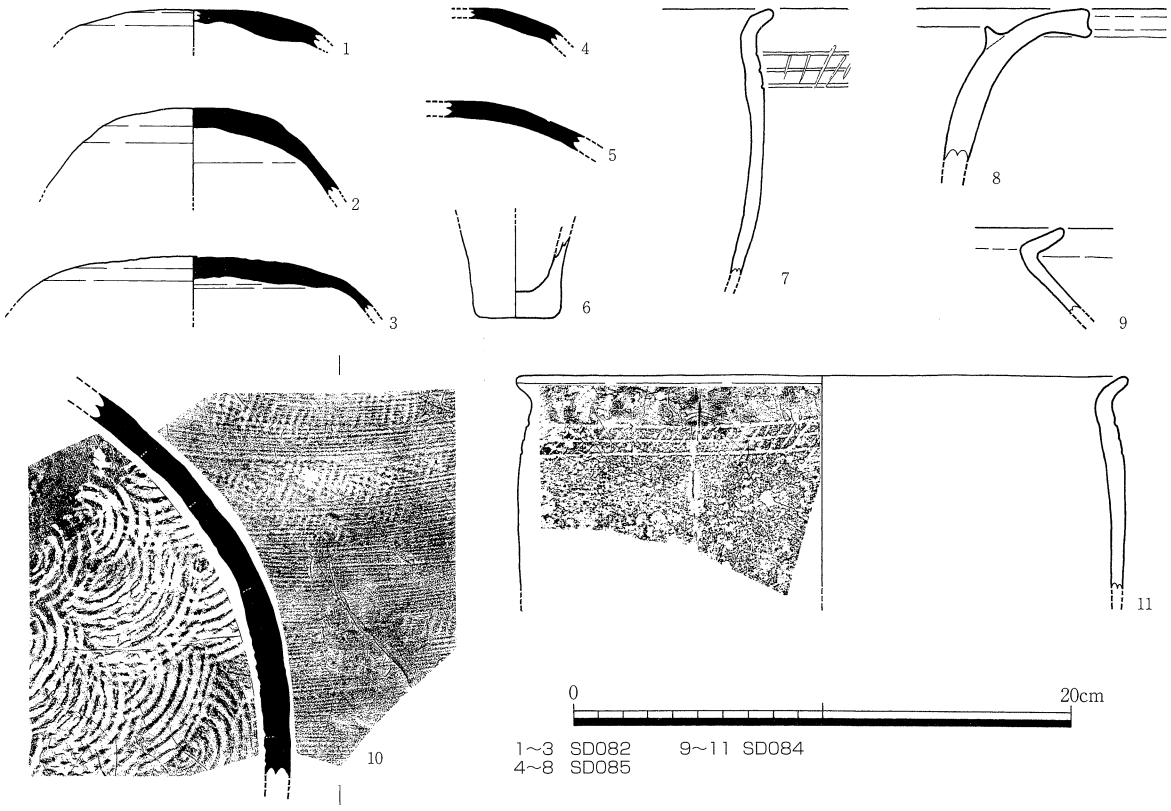


Fig.132　SD082・084・085出土土器（S＝1/3）

土師器甕

9は「く」字状に強く屈曲する口縁部の破片である。残存高3.4cmを測る。磨滅が著しく調整等は不明であるが、口縁端部がわずかに肥厚する。胎土は暗褐色を呈し、1mm程度の砂粒を含む。下川津式の範疇にはいると考えられるが、ローリングが著しく遺構の年代を示すものではない。

須恵器甕

10は肩部の破片と考えられる。残存高17.3cmを測る。外面は間の細かい方格の叩き後にカキメを施す。内面は同心円の当て具痕を多数有する。胎土は砂粒が少なく精良である。

弥生土器甕

11は復元口径24.2cm、残存高8.6cmを測り、短く屈曲する口縁部を有する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線とそれを切るタテ方向の条線を有する。後述するSD085出土のもの（7）と接合する。胎土は暗褐色を呈し、3mm程度の長石粒を多量に含む。

SD085出土遺物（Fig.132）

須恵器蓋（4・5）、弥生土器ミニチュア（6）、弥生土器甕（7）、弥生土器壷（8）が出土した。

須恵器蓋

4・5はいずれも天井部の破片である。残存高は4が1.4cm、5が1.9cmを測る。内面ヨコナデ調整を行う。5は天井部外面回転ヘラケズリを行うが、4はヨコナデ調整を施す。5は4に比して口径が大きいが、具体的な数字は不明である。胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。

弥生土器ミニチュア

6は底径3.4cm、残存高3.3cmを測る。甕のミニチュアと考えられる。胎土は3mm程度の長石粒を少量含む。

弥生土器甕

7は短く屈曲する口縁部を有する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線とそれを切るタテ方向の条線を有する。SD084出土のもの（11）と接合する。

弥生土器壷

8は残存高6.0cmを測り、広く開く口縁部を有し、口縁端部に面を持つ。口唇部には1条の沈線を、口縁部内面には1条の貼り付け突帯を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

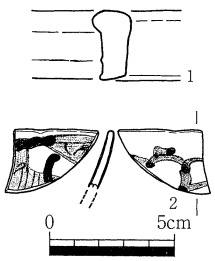


Fig.133　SD141出土土器（S＝1/3）

第5項　古代以降の溝出土遺物

SD141出土遺物（Fig.133）

瓦質土器（1）、染付皿（2）が出土した。

瓦質土器

1は器種不明である。残存高2.8cmを測る輪状のもので、一部被熱痕を有する。行灯などが考えられるが砕片のため不明である。

染付皿

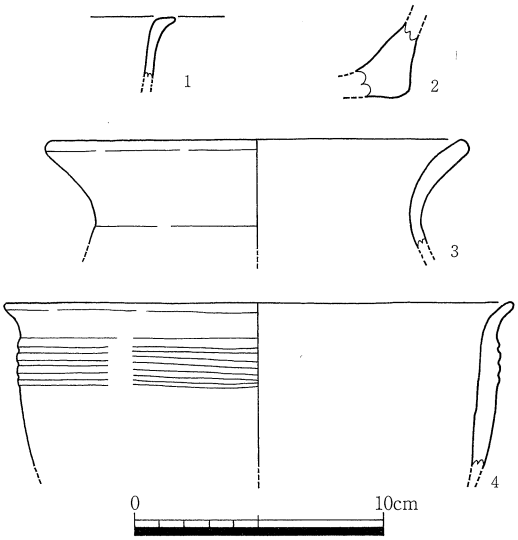
2は残存高2.5cmを測る。口縁端部は輪花状を呈するものと考えられる。呉須の発色は良好でない。波佐見窯の18世紀後半のものと考えられる。

第6項　土坑出土の遺物

SK075出土遺物（Fig.134）

弥生土器（2）が出土した。

底部の破片で、甕と考えられるが砕片のため詳細は不明である。残存高3.0cmを測る。表面劣化のため調整についても不明である。胎土は2mm程度の砂粒を多く含み淡褐色を呈する。



1 SK168　2 SK075　3・4 SK154

Fig.134　土坑出土土器　（S＝1/3）

SK168出土遺物（Fig.134）

弥生土器甕（1）が出土した。

残存高2.4cmを測る。口縁内面に稜を持ち、一見逆「L」字状口縁を呈する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は表面劣化のため確認できない。表面劣化のため調整等についても不明である。胎土は2mm程度の砂粒を少量含み暗褐色を呈する。

SK154出土遺物（Fig.134）

弥生土器壷（3）、甕（4）が出土した。

壷

3は復元口径17.0cm、残存高4.4cmを測る。頸部から口縁部にかけてやや広く開き、端部に面を持つ。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は3mm程度の長石粒を多量に含み赤色酸化土粒を少量含む。

甕

4は復元口径20.3cm、残存高6.5cmを測る如意状口縁のもので、口縁部を短く弱く屈曲させる。口唇部のキザミは見られないが、口縁直下には3条のヘラ描き沈線を施す。沈線周辺を掻き取る事によって削り出し突帯状に成形する。内面劣化の為調整等不明で、外面には板状工具によるナデ調整を施す。

SK185出土遺物（Fig.135）

弥生土器壷（1～7）、甕（8～11）、蓋（12）が出土した。

壷

1は残存高4.5cmを測る。口縁部は緩やかに湾曲して開き、端部に面を持つ。内面表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、外面にはヘラミガキを施す。頸部にはキザミを持つ1条の削り出し突帯を有する。2は残存高2.1cmを測る。口縁部は緩やかに湾曲して開き、端部に面を持つ。口唇部には1条の沈線を有する。表面の劣化が著しく内面調整等は不明であるが、外面にはヘラミガキを施す。3は復元底径6.6cm、残存高2.4cmを測る。表面の劣化が著しく調整等は不明である。4は復元底径5.2cm、残存高3.6cmを測り、直立気味に立ち上がった後直線的に開く体部を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。5は底径6.3cm、残存高3.2cmを測る。表面の劣化が著しく調整等は不明である。6は底径7.2cm、残存高5.5cmを測り、体部は直線的に開く。表面の劣化が著しく調整等は不明である。7は底径8.2cm、残存高4.5cmを測り、底部は広く窪む。体部は広く開く。表面の劣化が著しく調整等は不

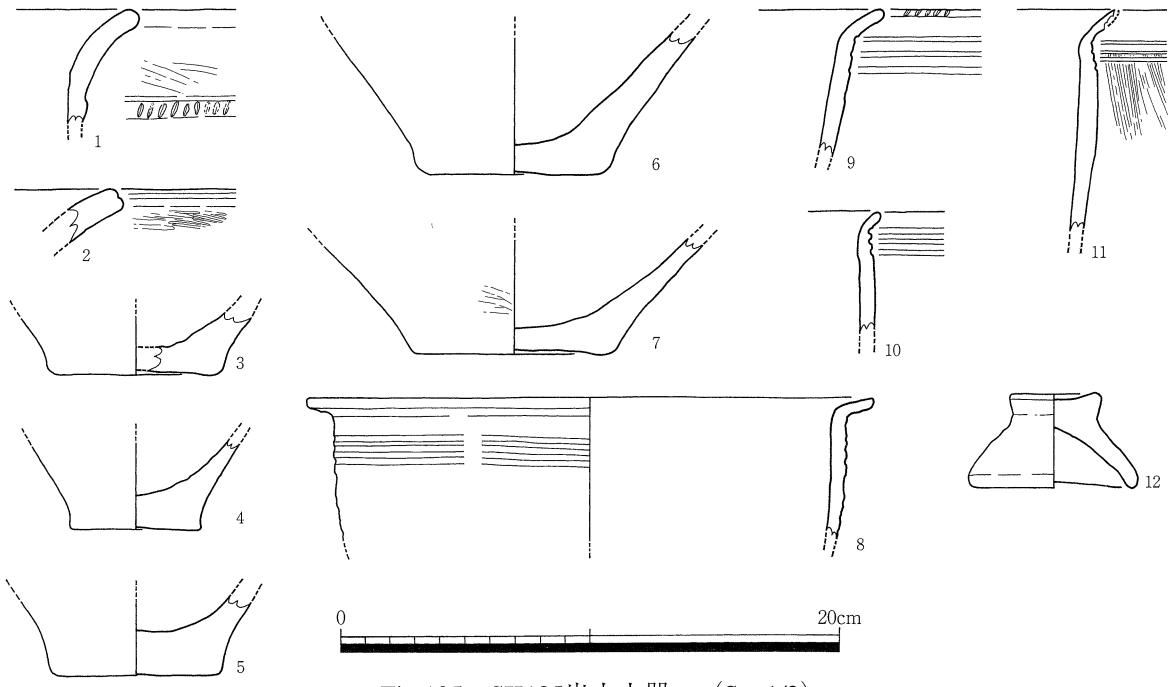


Fig.135　SK185出土土器　（S＝1/3）

明であるが、外面にはわずかにヘラミガキの痕跡が見られる。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものである。

甕

8は復元口径22.7cm、残存高5.7cmを測り、やや長く引き出す口縁部を有する。体部は直線的に開く。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。9は残存高5.7cmを測る如意状の口縁部を有する。口縁部は弱く長く屈曲する。口唇部にはキザミを口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。10は残存高4.9cmを測る如意状口縁のものである。短く屈曲させる口縁部を有し、口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。11は残存高8.8cmを測る如意状口縁のものである。屈曲した後長く伸びる口縁部を有し、口唇部のキザミの有無は不明だが、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内面劣化のため調整不明であるが、外面縦方向のハケ調整を施す。胎土はいずれも径5mm程度の砂粒を多量に含み、8・10は橙褐色、9・11は暗褐色を呈する。

蓋

12は口径6.6cm、器高3.8cm、天井部径3.2cmを測る小型品である。天井部外面はやや広く窪む。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は2mm程度の砂粒をやや多く含み褐色を呈する。

第7項　柱穴ほか出土の遺物

SA049・050出土遺物（Fig.136）

弥生土器壷（1～3）が出土した。

1は底径5.0cm、残存高1.2cmを測る底部の破片である。SA050 l 出土である。2は復元底径7.4cm、残存高4.7cmを測り、直立気味に立ち上がった後広く

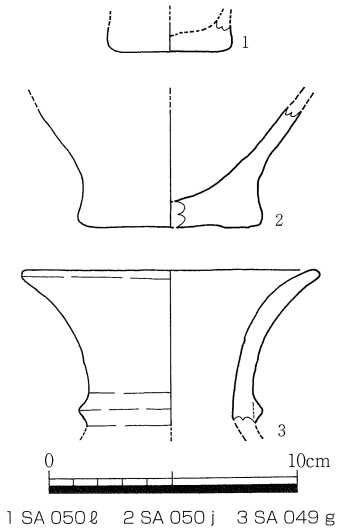


Fig.136　SA049・050出土土器（S＝1/3）

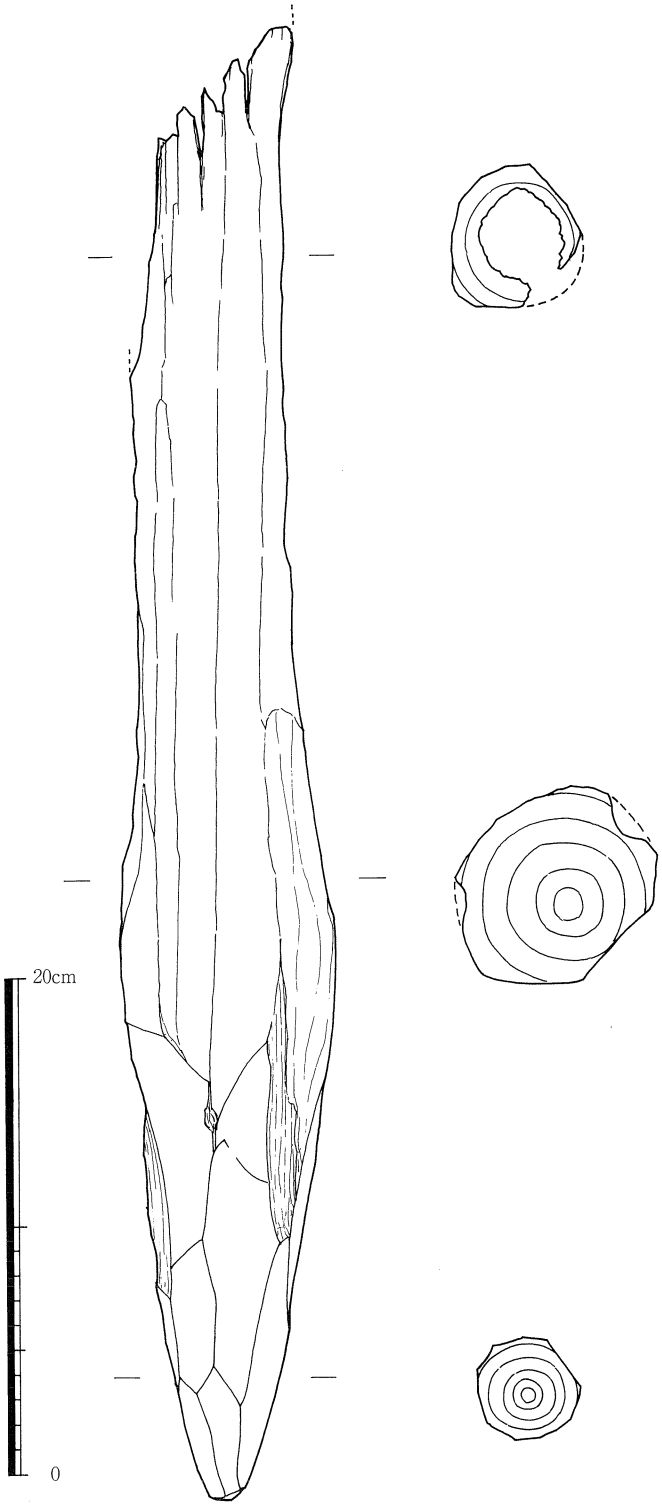


Fig.137　SX197出土杭　（S＝1/3）

開く体部を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。SA050 j 出土である。3は復元口径12.0cm、残存高6.2cmを測り、広くラッパ形に開く口縁部を有する。頸部には1条の貼り付け突帯を施す。SA049 g 出土である。胎土はいずれも3mm程度の長石粒を多量に含み、1・2は橙褐色、3は暗褐色を呈する。

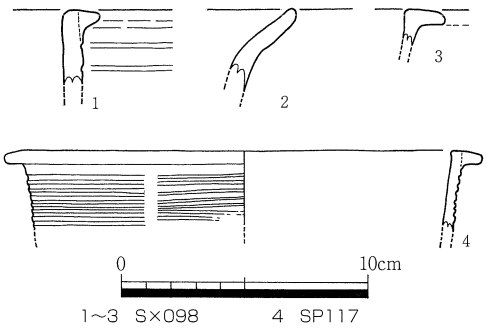


Fig.138　SX098・SP117出土土器
(S＝1/3)

SX197出土遺物（Fig.137）

杭が出土した。残存長59.3cm、最大幅8.8cmを測り、先端を尖らせる。先端の加工痕は比較的明確で単位も大きい。コナラ節の芯持ち材である。

SP117出土遺物（Fig.138）

弥生土器甕（4）が出土した。復元口径19.3cm、残存高3.1cmを測る逆「L」字状口縁を有するもので、水平にのびる断面四角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミは持たないが、口縁部直下には7条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は3mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

SX098出土遺物（Fig.138）

弥生土器甕（1・3）、壷（2）が出土した。

甕

1は残存高3.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、断面三角形の口縁部を貼り付ける。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等は不明である。3は残存高1.4cmを測る逆「L」字状口縁を呈するもので、口唇部のキザミは見られない。口縁部直下の沈線については不明である。胎土はいずれも3mm程度の砂粒・赤色酸化土粒を含み、褐色を呈する。

壷

2は残存高3.2cmを測り、緩やかに開く口縁部の破片である。口縁端部をわずかにつまみ上げる。内外面調整等は不明である。胎土は3mm程度の砂粒を含み、淡赤灰色を呈する。

第2節　南区出土の遺物

第1項　溝出土の遺物

SD209出土遺物（Fig.139）

黄灰色粘土出土遺物

弥生土器壷（1・2）が出土した。

1は底径10.0cm、残存高4.3cmを測り、比較的急に立ち上がる体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面表面劣化のため調整等は不明である。2は残存高5.0cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土はいずれも3mm程度の砂粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

暗灰色細砂出土遺物

弥生土器壷（3～5）が出土した。

3は底部付近の破片である。残存高5.3cmを測る。残存する部分が少なく、詳細は不明である。調整等も表面劣化のため不明である。4は残存高3.2cmを測り、緩やかに開く体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。5は残存高3.7cmを測り、比較的強く立ち上がる体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。胎土はいずれも3mm程度の砂粒を多く含み、3は淡褐色、4・5は褐色を呈する。

灰褐色細砂出土遺物

弥生土器壷（6・7）が出土した。

6は底径8.6cm、残存高10.4cm、胴部最大径17.2cmを測る。胴部の張りは強く、表面劣化のため内外面調整等は不明である。7は復元底径10.8cm、残存高9.4cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は6は砂粒が少なく淡褐色を呈する。7は3mm程度の砂粒を多く含み、橙

褐色を呈する。

暗灰褐色砂出土遺物

弥生土器壷（8）が出土した。

復元底径7.8cm、残存高4.3cmを測り、直線的に開く体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。胎土は3mm程度の砂粒を多く含み、黒褐色を呈する。

出土層位不明の遺物

断ち割り内より出土した遺物である。壷（9）と甕（10）が出土した。

弥生土器壷

9は残存高8.5cmを測る頸部の破片である。直立した後強く開く口縁部を有し、内面に2条、外面に3条の突帯を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は径3mm程度の砂粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

甕

10は残存高4.8cmを測る如意状と逆「L」字状の中間的な形態を有する口縁のものである。口縁部直下には1条の沈線を施しているようであるが、詳細は不明である。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を施す。胎土は

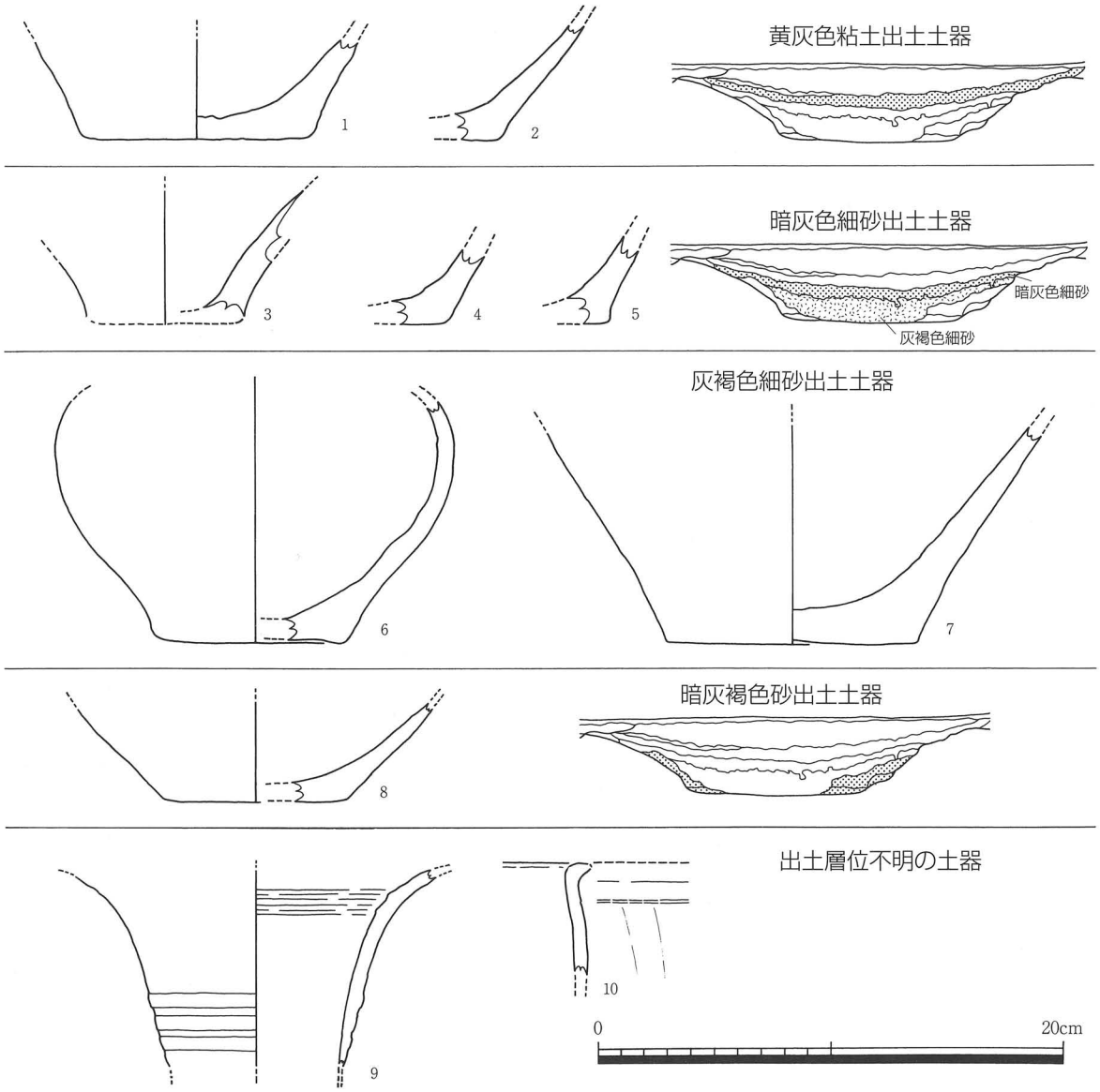


Fig.139　SD209出土土器　（S＝1/3）

径3mm前後の砂粒を多く含み、橙褐色を呈する。

SD210出土遺物（Fig.140）

須恵器坏（1）、須恵器皿（2）が出土した。

須恵器坏

1は復元底径9.3cm、残存高3.3cmを測り、直線的な体部と平坦な底部、低い断面四角形の貼り付け高台を有する。内外面ヨコナデ調整、底部外面ヘラ切りの後ヨコナデを施す。8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる。

須恵器皿

2は復元底径11.0cm、残存高0.9cmを測る。平坦な底部と広く開く体部を有し、内外面ヨコナデ調整、底部外面ヘラ切り後ヨコナデ調整を施す。8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる。

第2項　水田域の出土遺物

土器・土製品（Fig.141）

黒色粘土出土土器

須恵器坏（1）、弥生土器壷（2）、古式土師器甕（3）が出土した。

須恵器坏

1は復元底径8.0cmを測り、平坦な底部を有する。内面ヨコナデ、外面ヘラ切りの後ヨコナデ調整を施す。

弥生土器壷

2は復元底径8.7cm、残存高3.1cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。表面の劣化が著しく、調整等は不明である。胎土は3mm程度の砂粒を多く含み橙褐色を呈する。

古式土師器甕

3は残存高8.1cmを測り、球胴形を呈する。器壁は２～３mmと薄手で、口縁部は強く屈曲する。内面板状工具によるナデ調整を行うが、外面調整は不明である。下川津式の範疇に収まると考える。胎土は3mm程度の砂粒を多く含み褐色を呈する。

赤灰色粘土出土土器

弥生土器壷（4）、甕（5～7）、甕蓋（8）が出土した。

壷

4は残存高2.3cmを測り、緩やかに開く口縁部を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は砂粒少なく暗褐色を呈する。

甕

5は底径4.4cm、残存高3.9cmを測る小型のものである。比較的直線的に立ち上がる体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。6は復元底径6.8cm、残存高3.8cmを測り、直線的開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、表面劣化のために調整等は不明である。7は底径5.3cm、残存高2.5cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。表面の劣化が著しく、調整等は不明である。胎土いずれも3mm程度の砂粒多く含み橙褐色を呈する。

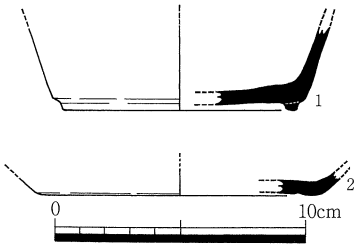


Fig.140　SD210出土土器
（S＝1/3）

甕蓋

8は天井部径5.7cm、残存高5.3cmを測る。2次焼成を受けており、調整等詳細は不明である。胎土は3mm程度の砂粒を多く含み橙褐色を呈する。

暗赤灰色粘土出土土器

弥生土器壷（9～11）が出土した。

9は底径9.9cm、残存高2.6cmを測り、広く開く体部を有する。底部の稜は不明瞭で、外底面ドーナツ状にやや窪む。内面ナデ調整、外面ヘラミガキを施す。10は復元底径10.0cm、残存高3.4cmを測り、緩やかに開く体部を有する。円板状の底部を有し、内外面ナデ調整を施す。11は復元底径5.9cm、残存高3.6cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。表面の劣化が著しく、調整等は不明である。いずれも胎土は3mm程度の砂粒を多く含み橙褐色を呈する。

暗黄褐色細砂出土土器・土製品

弥生土器壷（12～14）、同甕（15・16）、土製円板（17）が出土した。

壷

12は復元底径6.0cm、残存高5.4cmを測り、直立気味に立ち上がった後直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内面板状工具によるナデ調整、外面密なヘラミガキを施す。13は復元底径8.2cm、残存高4.1cmを測り、広く開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面密なヘラミガキを施す。14は復元底径10.0cm、残存高4.0cmを測り、広く開く体部を有する。底部の稜は不明瞭で、外底面ドーナツ状にやや窪む。内底面には板状工具によるナデ調整を施すが、外面調整は表面劣化のため調整不明である。胎土は、13・14は3mm程度の砂粒を多く含み橙褐色を呈するが、12は灰褐色を呈し砂粒少ない。

甕

15は底径8.2cm、残存高4.3cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面板状工具によるナデ調整を施す。16は復元底径6.5cm、残存高3.1cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。外面板状工具によるナデ調整を施すが、内面調整は表面劣化のため不明である。胎土は3mm程度の砂粒を多く含み橙褐色を呈する。

土製円板

17は土器転用の円板である。直径3.4cm、厚さ1.1cm、重量10.2gを測り、周囲を打ち欠きした後研磨する。胎土は径2mmの長石粒を少量含み、暗褐色を呈する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。胎土は3mm程度の砂粒を多く含み橙褐色を呈する。

石器（Fig.142～143）

黒色粘土出土石器（Fig.142）

石鏃（18）、環状石斧（19）が出土した。

石鏃

18は平基式の石鏃である。腹面に素材面を残す。切先と側縁の一部を欠損する。最大長（1.9cm）、最大幅1.5cm、最大厚3.5cm、重量（0.8g）で、石材はサヌカイトである。

環状石斧

19は環状石斧である。2つ以上の突起をもつと考えられるが、欠損・磨滅しており、形態や使用痕は不明である。最大長（9.2cm）、最大幅（5.8cm）、最大厚（3.0cm）、重量（170.6g）。石材は砂岩である。

赤灰色粘土出土石器（Fig.142）

打製石包丁（20）が出土した。

20は抉りのない打製石包丁である。背部には刃潰し加工を施し、刃部はやや明瞭さに欠く両面調整を施して外湾刃に仕上げている。背部および腹面刃部に光沢面がみられる。最大長12.9cm、最大幅5.2cm、最大厚1.2cm、重量68.1gを測り、石材はサヌカイトである。

暗赤灰色粘土出土石器（Fig.142）

磨製石包丁（21）、砥石（22）が出土した。

磨製石包丁

21は背部・刃部ともに直線的で、全体が長方形を呈する磨製石包丁である。両面に刃部を作り出す。刃部には斜め横方向の擦痕がみられる。欠損しており、最大長（9.5cm）、最大幅4.9cm、最大厚0.8cm、重量（58.3g）で、石材は安山岩である。

砥石

22は砥石と考えられる。21の磨製石包丁とセットで出土した。全体に磨滅しており、擦痕は確認できない。最大長7.1cm、最大幅5.1cm、最大厚5.1cm、重量334.0gを測り、石材は安山岩系の岩石であると考えられる。

暗黄褐色細砂出土石器（Fig.143）

打製石包丁（23）が出土した。

23は片方に抉りをもつ打製石包丁である。縦長の剥片素材とする。背部は折れ面で、目立った加工はみられない。刃部は両面調整されている。側辺に自然面を有する。最大長11.7cm、最大幅4.7cm、最大厚1.0cm、重量54.8gで完形である。石材はサヌカイトである。

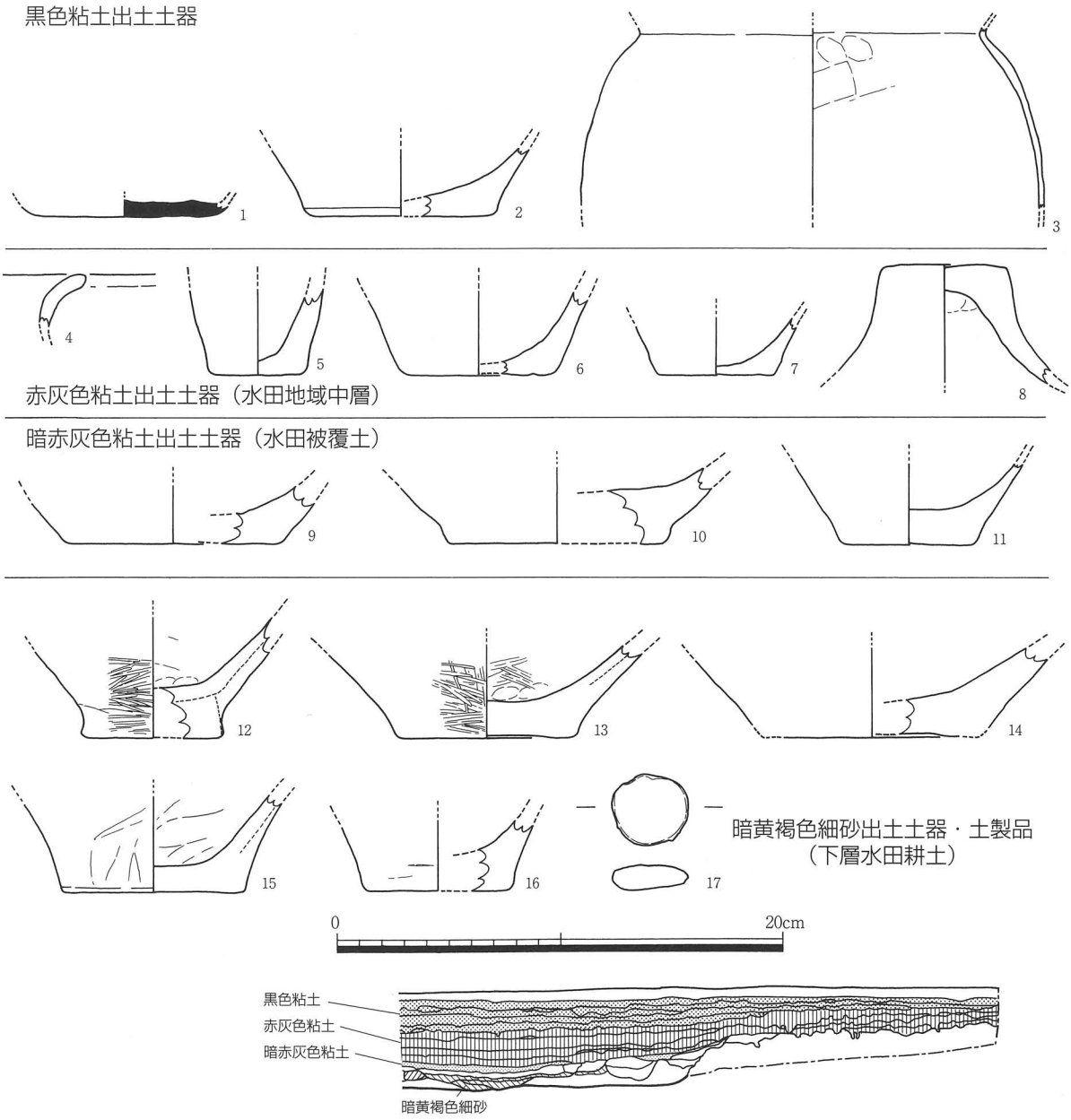


Fig.141　水田域出土土器　（S＝1/3）

第3項　水田関連の溝出土遺物

SD204出土遺物（Fig.144）

壷（1～6、9～12）、甕（7）、甕蓋（8）が出土した。

壷

1は復元口径13.4cm、残存高7.2cmを測る。口縁部は緩やかに湾曲し、端部を丸く納める。外面縦方向の細かいハケ調整の後、横方向に粗いヘラミガキを施し、内面は細かい横方向のハケ調整の後、同じく粗いヘラミガキを施す。2は底径7.8cm、残存高3.0cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面ヘラミガキを施し、底部外面にも及ぶ。体部には一部煤が付着するが、この煤は破断面まで及ぶ。土器焼成の際の失敗品である可能性もある。3は底径7.9cm、残存高3.5cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。内底面に指頭圧痕を残し、外面ナデ調整を施す。4は底径7.0cm、残存高3.8cmを測り、直立気味に立ち上がった後緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内底面に指頭圧痕を残し、外面ヘラミガキを施す。5は底径8.2cm、

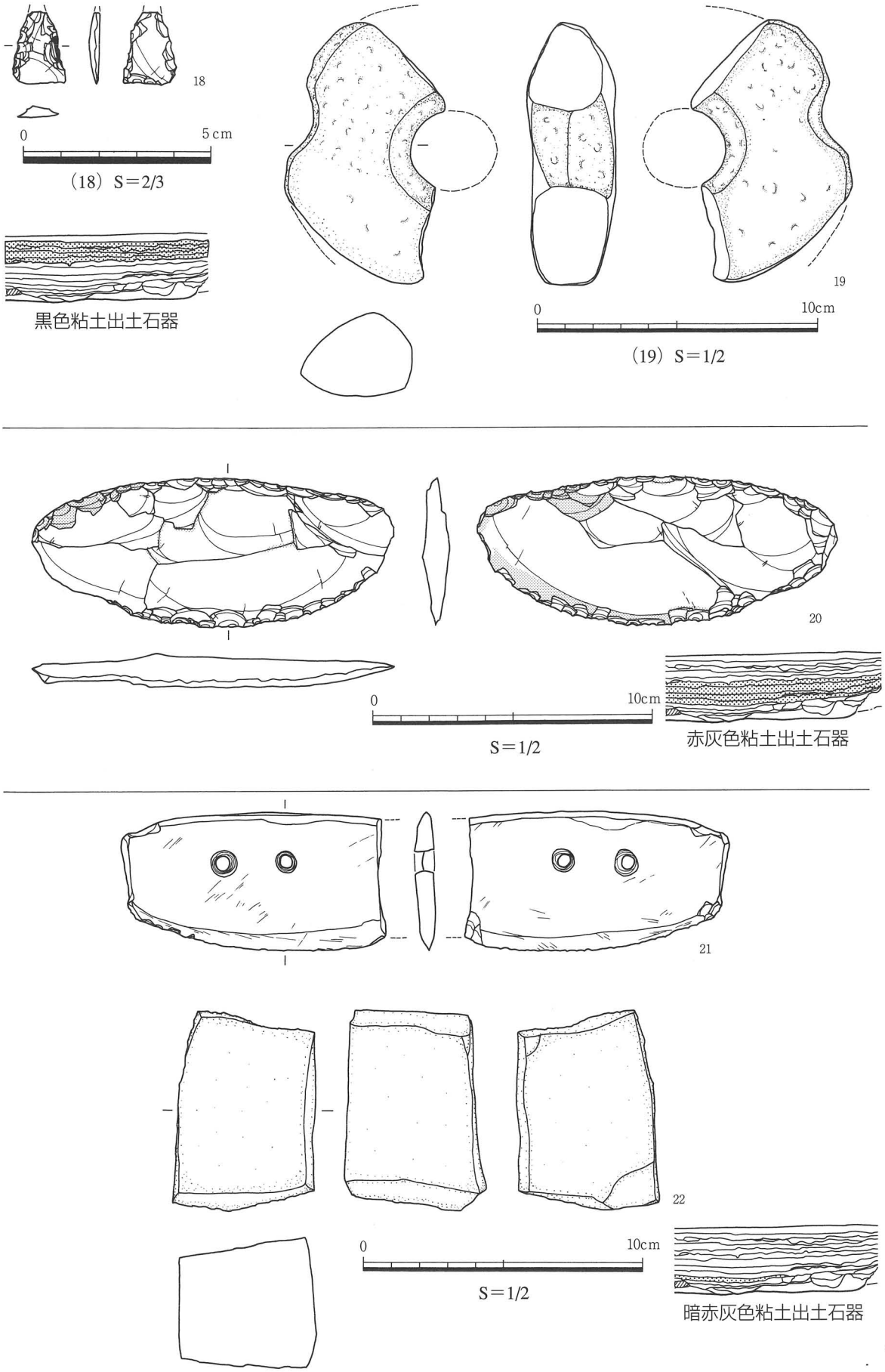


Fig.142　水田域出土石器（1）

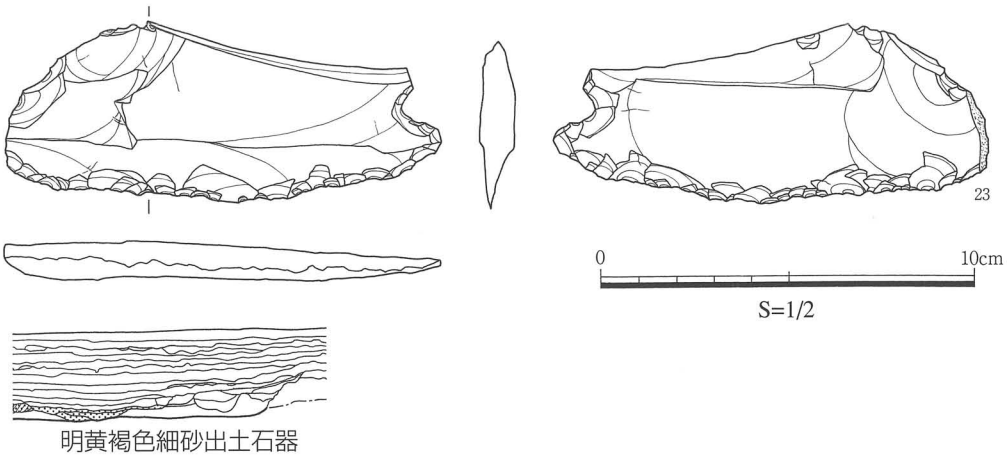


Fig.143　水田域出土石器（2）

残存高3.9cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面表面劣化のため調整等は不明である。6は残存高2.5cmを測り、やや強く開く口縁部を有する。口縁端部を丸く納め、内外面ナデ調整を施す。9は復元底径7.6cm、残存高2.7cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内底面には指頭圧痕を残し、外面ヘラミガキを施す。10は復元底径10.4cm、残存高5.0cmを測り、直立気味に立ち上がった後緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内面板状工具によるナデ調整を、外面ナデの後ヘラミガキを施す。11は底径10.0cm、残存高8.4cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。内底面には指頭圧痕を残し、外面ヘラミガキを施す。12は残存高3.5cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内面ナデ調整を、外面ヘラミガキを施す。いずれも胎土は径3mm前後の長石粒を含み、1・2・4～11は褐色を、3・12は暗褐色を、10は淡褐色を呈する。

甕

7は残存高2.2cmを測る如意状口縁のものである。器壁はやや薄手で、比較的強く湾曲する。口唇部にはキザミを有し、内外面ナデ調整を施す。外面には煤が付着する。暗灰色を呈し、胎土は比較的精良である。

甕蓋

8は残存高9.3cmを測り、広く外面が窪む天井部となだらかに開く体部を有し、内外面密にヘラミガキを施す。胎土は2mm程度の砂粒を少量含み褐色を呈する。

SD205出土遺物（Fig.145）

弥生土器壷が出土した。底径8.4cm、残存高7.0cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内面にはナデ調整を、外面ヘラミガキを施す。胎土は雲母を多く含み暗褐色を呈する。

SD212出土遺物（Fig.146）

木製品が出土した。残存長22.8cmを測り、縦・横に欠損する。端部は丁寧に面取りし、遺存は良好である。横槌と考えられる。材質は針葉樹である。

SD218出土遺物（Fig.147）

弥生土器壷（1～2）、甕（3）が出土した。

壷

1は底径9.2cm、残存高5.1cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。内底面には指頭圧痕を残すが表面の劣化が著しく、調整等は不明である。2は底径8.2cm、残存高6.1cmを測り、直立気味に立ち上がった後広く開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、外底面広く窪む。内外面横方向のヘラミガキを施す。

甕

3は残存高4.9cmを測る。残存状況が悪く詳細については不明である。

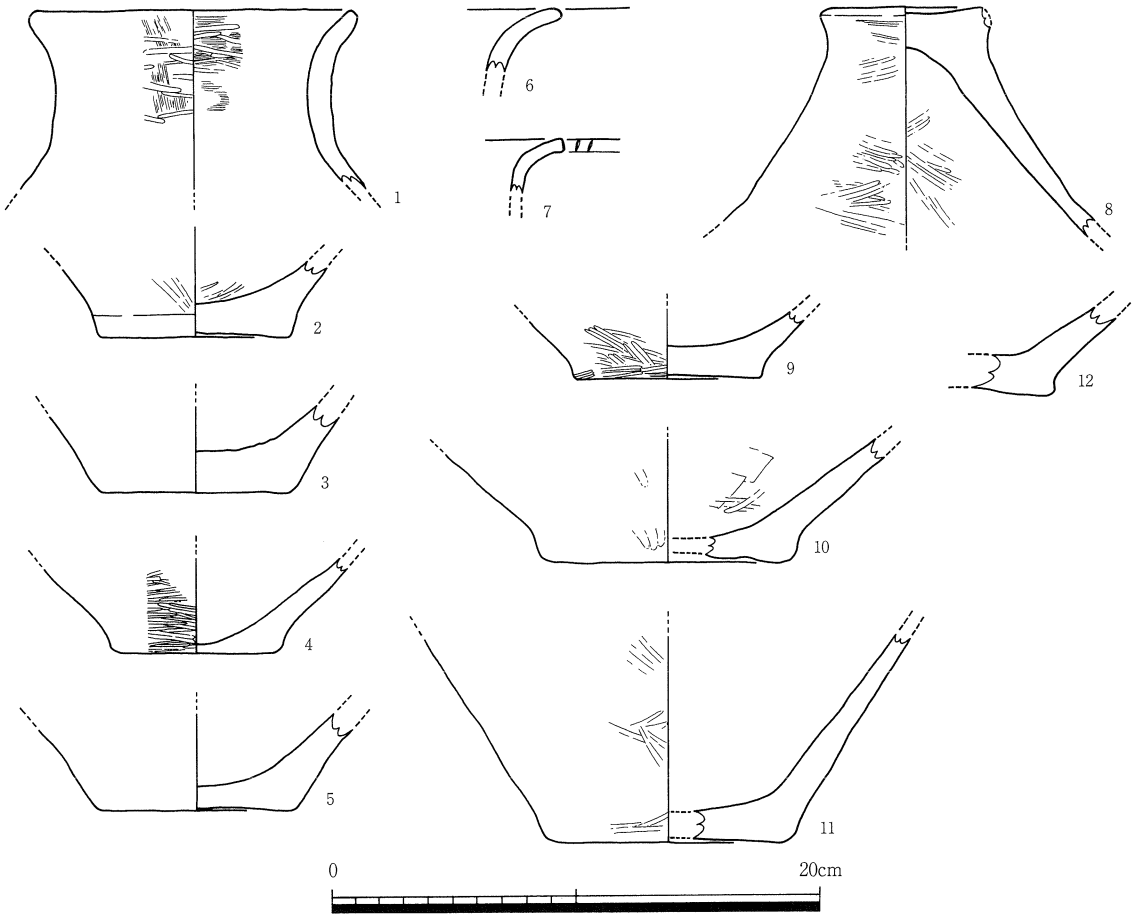


Fig.144　SD204出土土器　（S＝1/3）

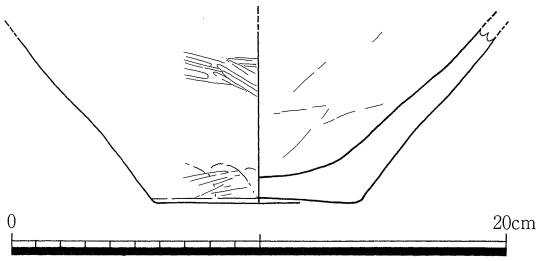


Fig.145　SD205出土土器　（S＝1/3）

第4項　墓出土の遺物

ST203出土遺物（Fig.148）

石鏃が出土した。凹基式の石鏃である。作用部の切先に近い側縁に屈曲がある。両面に素材面を残している。切先を折損する。土坑の西側底部より10cm程上面から出土。最大長（2.6cm）、最大幅1.6cm、最大厚0.4cm、重量（1.1g）を測る。石材はサヌカイトである。

第5項　深掘出土の遺物（Fig.149）

調査後、水田の基盤となった旧河道の深掘を行った。土器・石器類の出土は一切なかったが、断面図中55層相当の層中より木製品が1点出土した。長軸19.2cm、短軸6.3cm、厚さ4.4cmを測り、両端部は被熱。側縁部には加工痕を有する。器種等は不明であり、材質は広葉樹である。

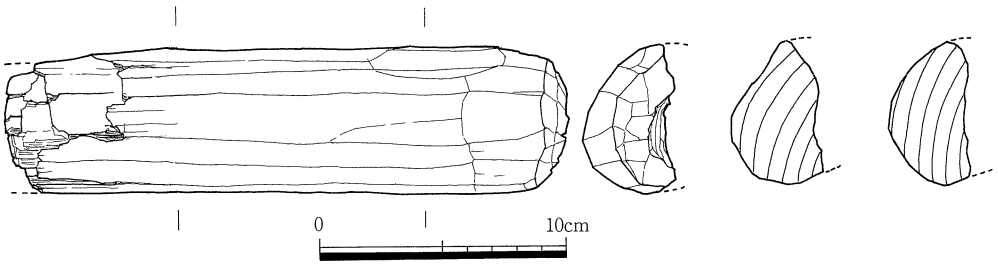


Fig.146　SD212出土木製品　（S＝1/3）

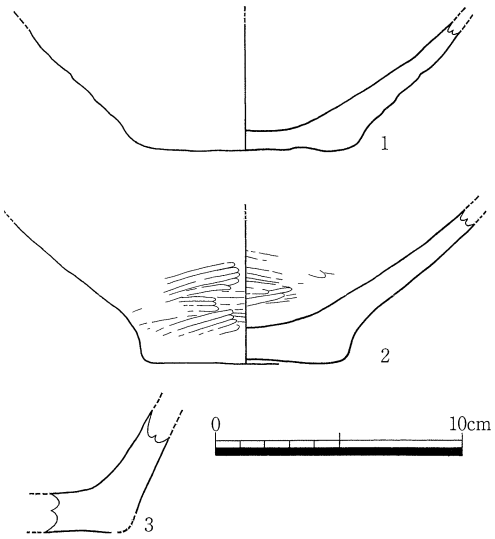


Fig.147　SD218出土土器　（S＝2/3）

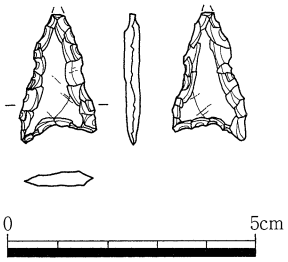


Fig.148　ST203出土石器
（S＝1/3）

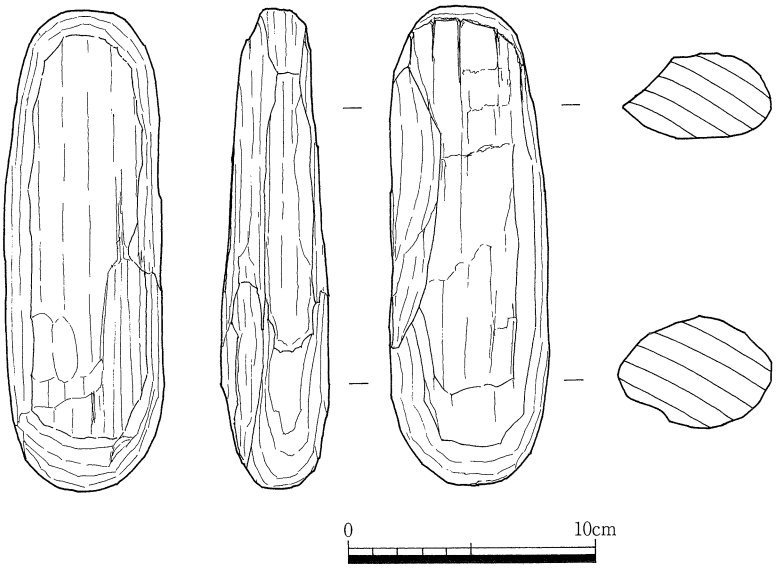


Fig.149　深掘出土木製品　（S＝1/3）

第7章　自然化学分析

第1節　分析の目的と資料の採取

本調査における自然化学分析の主な目的は、1．環濠の堆積環境の復元、2．環濠周辺の環境復元、3．環濠掘削時の環境復元、4．水田遺構における耕作の確認、5．水田における人糞尿利用の有無についての確認、を設定し、それぞれ1・2・3については珪藻分析を、1・2については花粉分析を、3・5については寄生虫卵分析を、4についてはプラントオパール分析を行った。資料の採取に当たっては、各環濠の断面観察から得られたいくつかの単位（報文中では遺物取りあげ単位として反映されている）をもとに、5cm×5cm×5cmのブロックで採取した。各採取地点はFig.29・Fig32・Fig.150・Fig.151のとおりである。なおプラントオパール分析資料の採取にあたっては、NO.1地点においては10cm毎に、NO.2地点においては層位毎に採取した。

第2節　中の池遺跡における花粉分析

第1項　はじめに

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壌中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布す

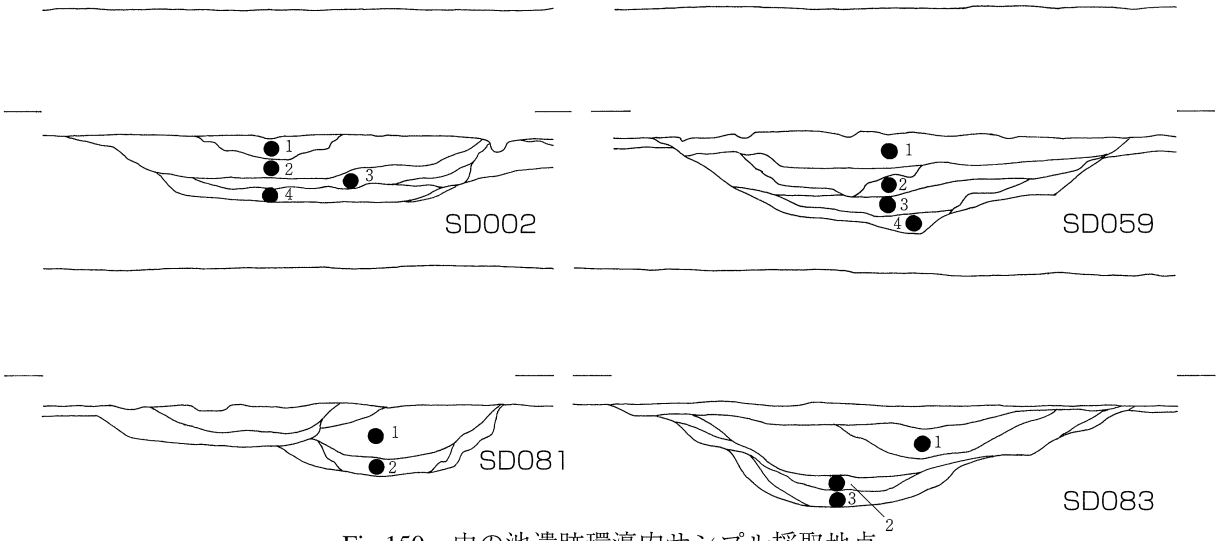


Fig.150　中の池遺跡環濠内サンプル採取地点

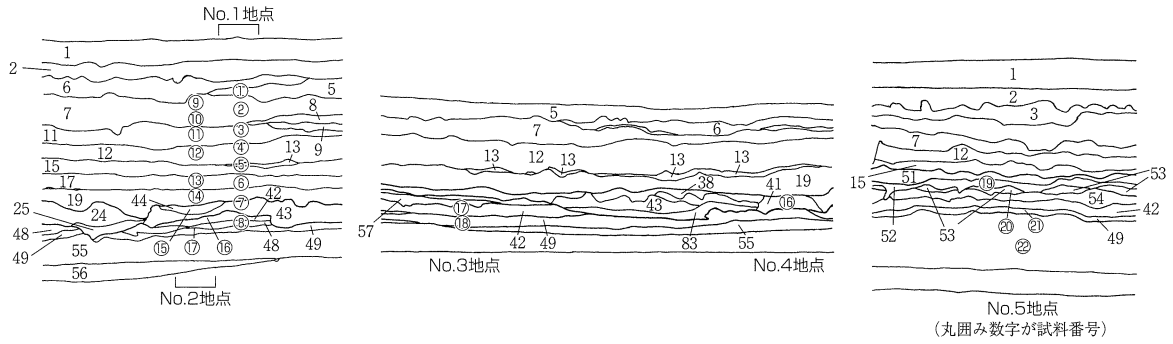


Fig.151　中の池遺跡プラント・オパールサンプル採取地点

る水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

第2項　試料

中の池遺跡、SD083（①、②、③）、SD002（①、②、③、④）、SD059（①、②、③、④）、ベース土、I期水田耕土より採取された堆積物、計13点である。

第3項　方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1）5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2）水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。

5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

第4項　結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉23、シダ植物胞子３形態の計54である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数および樹木花粉数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、ブドウ属、ハイノキ属、ニワトコ属－ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ノアズキ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、オオバコ属、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

1）SD083（③、②、①）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉はコナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、シイ属が出現する。③は草本花粉のイネ科が優占し、イネ属型、アカザ科－ヒユ科等が伴われる。②は草本花粉のアカザ科－ヒユ科が優占し、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等が伴われる。①は花粉密度が非常に低い。

2）SD002（④、③、②、①）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉はコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギが出現する。草本花粉はイネ科が優占し、ヨモギ属、カヤリグサ科、アカザ科－ヒユ科、イネ属型等が伴われる。また、シダ植物胞子のミズワラビが出現する。④から①へコナラ属アカガシ亜属が減少し、クワ科－イラクサ科、ヨモギ属が増加している。

3）SD059（④、③、②、①）

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より3帯の花粉分帯を行った。

・I帯（④）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉のガマ属－ミクリ属、イネ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属が出現し、カヤツリグサ科、ギシギシ属、セリ亜科、ゴキヅル、オナモミ属が伴われる。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属等が出現する。

・II帯（③、②）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉のイネ科が優占し、イネ属型、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われる。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が出現し、マツ属複維管束亜属シイ属が出現する。

・III帯（①）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉のイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われる。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属が出現し、コナラ属コナラ亜属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、シイ属が伴われる。

4）ベース土

花粉密度が非常に低い。

5）I期水田耕土

草本花粉より樹木花粉の占める割合が高い。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が出現し、マツ属複維管束亜属、シイ属、ハンノキ属が伴われる。草本花粉はイネ科が出現し、イネ属型、カヤツリグサ科、ヨモギ属、チドメグサ亜科が伴われる。

第5項　花粉分析から推定される植生と環境

1）SD083（③、②、①）

乾燥し開けた環境に生育するアカザ科－ヒユ科が高率に出現し、同様に乾燥を好むヨモギ属も出現するため、環濠周辺は乾燥し開けていると推定される。また、イネ属型が出現しており、水田が営まれていたと示唆される。周辺地域の森林植生は、コナラ属アカガシ亜属等が分布していた。

2）SD002（④、③、②、①）

④から①へと、コナラ属アカガシ亜属が減少し、クワ科－イラクサ科、ヨモギ属が増加するため、環濠周辺は開けていくことがうかがえる。また、イネ属型が出現しており、水田が営まれていたと示唆される。周辺地域の森林植生はコナラ属アカガシ亜属等が分布していた。

3）SD059（④、③、②、①）

花粉分帯に沿って、植生変性の復元を行う。

・I帯（④）

乾燥した環境に生育するアカザ科－ヒユ科、ヨモギ属等が出現するため、周囲は乾燥した堆積環境であったと示唆される。周辺地域の森林植生はコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属等が分布していた。

・II帯（③、②）

イネ属型、水田雑草であるミズアオイが出現するため、水田が営まれていたと考えられる。乾燥を好むアカザ科－ヒユ科が減少し、湿地を好むイネ科、カヤツリグサ科の増加がみれられるため、周辺は湿潤化したと推定される。周辺地域の森林植生はコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属等が分布していた。

・III帯（①）

イネ科が増加し、抽水植物であるガマ属－ミクリ属が出現するため、環濠は浅水域から湿った環境であったと示唆される。周辺地域の森林植生はコナラ属アカガシ亜属が分布していた。

4）ベース土

花粉がほとんど検出されていない。これは、花粉等の有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であるか、堆積速度が速かったかという理由が考えられる。

5）I期水田耕土

抽水植物であるガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属が出現することから、浅水域から湿った環境で、イネ属型の出現から、水田が示唆される。周辺地域の森林植生はコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が近隣に分布していた。

第6項　まとめ

中の池遺跡の環濠などの堆積物の花粉分析を行った結果、環濠は抽水植物が生育し浅水域から湿地の環境を呈し、周囲はアカザ科－ヒユ科の生育する乾燥地から水田などの湿地の環境が分布していた。また、上位に向かって草本がより優勢になる。周辺地域はコナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が分布していた。

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

第3節　中の池遺跡における寄生虫卵分析

第1項　はじめに

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができトイレ遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。現状では近年研究されだした研究であり分析例も少ない。

第2項　試料

中の池遺跡、SD083（①、②、③）、SD002（①、②、③、④）、SD059（①、②、③、④）、ベース土、I期水田耕土より採取された堆積物、計13点である。

第3項　方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

1）サンプルを採量する。

2）脱イオン水を加え撹拌する。

3）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。

4）25％フッ化水素酸を加え30分静置。（2・3度混和）

5）水洗後サンプルを2分する。

6）２分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す。

7）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。

8）検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

第4項　結果と考察

1）SD083（①、②、③）

試料③から回虫卵、鞭虫卵が低密度に検出された。他の試料は寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

2）SD002（①、②、③、④）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

3）SD059（①、②、③、④）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

4）ベース土

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

5）I期水田耕土

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

第5項　まとめ

中の池遺跡の寄生虫卵分析を行った結果、環濠SD083（③）から回虫卵、鞭虫卵が検出された。低密度であり、居住域周辺の汚染と考えられる。

参考文献

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from　Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science，19, p.231-245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－，奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，8，医歯薬出版，p.9-55.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，2，同成社，p.151-158.

第4節　中の池遺跡における珪藻分析

第1項　はじめに

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

第2項　試料

試料は、中の池遺跡より検出されたSD083（①、②、③）、SD002（①、②、③、④）、SD059（①、②、③、④）、ベース土の堆積物12点である。

第3項　方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

1）試料から1cm³を秤量する。

2）10％過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。

3）上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。

4）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

第4項　結果

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）68分類群、真－中塩性種（海－汽水生種）８分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表１に示す。また、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図１に示す。

1）SD083（③、②、①）

試料①は、珪藻殻密度は低いが陸生珪藻が検出される。試料②は、止水性種のAmphora venetaが特徴的に出現する。他に、各生態性が不定性のAnomoeoneis sphaerophora、Navicula cryptotenella、陸生珪藻のAmphora montanaなどが伴う。試料③は各生態性が不定性のAchnanthes hungaricaが多く検出され、止水性種のAmphora veneta、流水性種のNavicula capitata、陸生珪藻のAmphora montanaなどが伴う。

2）SD002（④、③、②、①）

試料①から③は、珪藻殻密度は低い。試料④は各生態性が不定性のAmphora copulata、流水性種のGomphonema parvulum、陸生珪藻のHantzschia amphioxysなどがやや多い。

3）SD059（④、③、②、①）

試料①、②は珪藻がほとんど検出されなかった。試料③は、各生態性が不定性のAmphora copulata、Gyrosigma sp.や止水性種で沼沢湿地付着性種群のPinnularia acrosphaeria、Stauroneis phoenicenteronなどが出現する。試料④は、流水性種のNavicula captitata、止水性種で沼沢湿地付着性種群のGomphonema gracile、各生態性が不定性のGomphonema pseudoaugur、陸生珪藻のHantzschia amphioxysやNavicula muticaが検出される。

4）ベース土

珪藻は検出されなかった。

第5項　珪藻分析から推定される堆積環境

（1）SD083（③、②、①）

下部の試料③の時期は、不定性種、止水性種、流水性種が多く、陸生珪藻も伴うため、流水の影響のあるやや不安定な止水域であったと推定される。試料②は、止水性種が優占し、不定性種と陸生珪藻が伴われ、止水域の環境が推定される。上部になると珪藻殻密度は低いが陸生珪藻は検出されるため、珪藻の生育しにくい乾燥した環境から湿った土壌の環境の分布が示唆される。

2）SD002（④、③、②、①）

下部の試料④の時期は各生態性が不定性の珪藻に流水性種、陸生珪藻などが伴われ、流水の影響のあるやや不安定な滞水域で湿った土壌の環境を伴っていたと推定される。上部の試料①から③の時期は、珪藻殻密度が低く珪藻の生育しにくい乾燥した環境から湿った土壌の環境の分布が示唆される。

3）SD059（④、③、②、①）

試料④の時期は、流水性種、止水性種で沼沢湿地付着性種群、各生態性が不定性種、陸生珪藻などが出現し、流水の影響があり、湿った土壌の環境を伴う水生植物が生育する止水域の環境であったと推定される。試料③は、各生態性が不定性種や止水性種で沼沢湿地付着性種群が検出され、不安定な滞水域が示唆される。上部の試料①、②の時期は珪藻がほとんど検出されず、珪藻の生育しにくい乾燥した堆積環境が推定される。

4）ベース土

珪藻は検出されず、珪藻の生育しにくい乾燥した堆積環境が推定される。

第6項　まとめ

中の池遺跡の珪藻分析を行った結果、環濠の下部の時期は滞水し、上部では乾燥化したことが推定された。

参考文献

Hustedt,F.(1937-1938)Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15,p.131-506.

Patrick, R.eimer, C. W.(1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollusion tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

Patrick, R.eimer, C. W.(1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第1号，植生史研究会，p.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

第5節　中の池遺跡におけるプラント・オパール分析

第1項　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

ここでは、中の池遺跡における稲作の可能性について、プラント・オパール分析から検討を行う。

第2項　試料

調査地点は３区西壁の５箇所である。ここでは、便宜的に北側より順にNo.１～No.５地点とした。

分析試料は、No.１地点では上位より暗褐色粘質土（試料１）、黒灰色粘土（試料２）、赤灰色粘土（試料３）、赤灰色粘土（試料４）、暗赤灰色粘土（試料５）、暗赤灰色粘土（試料６）、暗黄褐色細砂（試料７）および灰色粘土（試料８）の８点、No.２地点では上位より黒灰色粘土（試料９，10）、赤灰色粘土（試料11）、赤灰色粘土（試料12）、暗赤灰色粘土（試料13）、暗赤灰色粘土（試料14）および暗灰色粘土（試料15）の７点、No.３地点では暗灰褐色粘土（試料16，Ⅰ期水田畦畔）、No.４地点では明黄褐色粘土（試料17）と黒色粘土（試料18）の２点、No.５地点では上位より黒灰色粘土（試料19）、明黄褐色粘土（試料20）、黒色粘土（試料21）および淡灰色粘土（試料22）の４点の合計22点が採取された。各地点における試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

第3項　分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10－５g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48およびクマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

第4項　結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１～２および図１～４に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、各地点における検出状況を記す。

1）No. 1 地点

イネは試料１～７で検出されている。このうち、試料１、試料４および試料６では高い密度である。ヨシ属は試料１、試料３、試料４、試料６、試料７および試料８で検出されている。ただしいずれも低い密度である。ススキ属型はすべての試料で検出されているが、全体に低い密度である。ネザサ節型もすべての試料から検出されている。いずれも高い密度である。クマザサ属型は試料８を除く各試料で検出されているが、低い密度である。

2）No. 2 地点

イネは試料15を除く各試料で検出されている。試料９、試料12および試料13は高い密度である。ヨシ属は試料９を除く各試料で検出されている。試料12で比較的高い他はいずれも低い密度である。ススキ属型は試料14を除く各試料で検出されている。試料11では比較的高い密度である。ネザサ節型およびクマザサ属型はすべての試料で検出されている。このうち、試料９～14ではネザサ節型の密度が高い。

3）No. 3 地点

試料16について分析を行ったところ、イネ、ススキ属型およびクマザサ属型が検出されている。このうち、イネは比較的高い密度であり、ネザサ節型は高い密度である。

4）No. 4 地点

ここでは、試料17と試料18について分析を行った。その結果、ヨシ属とススキ属型が試料18で、ネザサ節型とクマザサ属型が両試料よりそれぞれ検出されている。ただし、いずれもやや低い密度である。

5）No. 5 地点

試料19～22について分析を行った。その結果、ヨシ属は試料19のみで、ススキ属型は試料21のみで検出されているが、どちらも低い密度である。ネザサ節型はすべての試料で検出されているが、いずれもやや低いか低い密度である。クマザサ属型は試料19と試料21で検出されているが、どちらも低い密度である。

第5項　中の池遺跡における稲作跡の可能性

上位より暗褐色粘質土（試料１）、黒灰色粘土（試料２，試料９，試料10）、赤灰色粘土（試料４，試料12）および暗赤灰色粘土（試料６，試料13）では、プラント・オパール密度が5,000～9,600個/gであり、稲作跡の探査や検証を行う際の判断基準値である5,000個/gを上まわっている。こうしたことから、これら４層準については稲作跡である可能性が高いと考えられる。また、赤灰色粘土（試料３，試料11）では、プラント・オパール密度が3,000～3,800個/gと比較的高い値であることから、当該層準では調査地点もしくは近傍で稲作が行われていた可能性が考えられる。暗赤灰色粘土（試料５）、暗赤灰色粘土（試料14）および暗黄褐色細砂（試料７）については、プラント・オパール密度が2,000個/g前後とやや低いことから、これらの層準においても稲作が行われていた可能性が考えられるものの、上層等から後代のプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。　なお、灰褐色粘土（試料16）の採取箇所は発掘調査において畦畔とされていた部分である。通常、畦の作り替えや畦塗りの際に水田土壌が使われるため、畦畔からも比較的高い密度でイネのプラント・オパールが検出されることが多い。分析結果をみると、ここからもイネのプラント・オパールが3,000個/gと比較的高い密度で検出されている。このことは、本試料の採取地点が畦畔であったことを支持している。

第6項　プラント・オパール分析から推定される植生と環境

イネ以外の分類群の検出状況（図の右側）をみてみると、各層準ともおおむねネザサ節型が優勢であり、赤灰色粘土（試料12）と暗赤灰色粘土（試料６）ではヨシ属も多い。したがって、調査の対象となった各層準の堆積時は、調査区周辺はササ類やススキ属などの生育する比較的乾いた環境であったと推定される。さらにこのことは、各層で存在の可能性が指摘された水田が、地下水位の低い乾田もしくは半湿田であったことを示唆している。なお、赤灰色粘土や暗赤灰色粘土の堆積時は、周辺に湿地的なところもみられたと推定される。

第7項　まとめ

中の池遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の可能性について検討した。その結果、下位より暗

赤灰色粘土（試料6，試料13）、赤灰色粘土（試料4，試料12）、黒灰色粘土（試料2，試料9，試料10）および暗褐色粘質土（試料1）については、稲作跡である可能性が高いと判断された。さらに、赤灰色粘土（試料3，試料11）では、調査地点もしくは近傍で稲作が行われていた可能性が示唆された。また、発掘調査において畦畔とされていた灰褐色粘土（試料16）からもイネのプラント・オパールが比較的高い密度で検出されたことから、分析のうえからもここが水田にともなう畦畔であった可能性が認められた。

なお、調査の対象となった各層準の堆積時は、調査区周辺は比較的乾いた環境であり、赤灰色粘土や暗赤灰色粘土の堆積時は周辺に湿地的なところもみられたと推定された。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

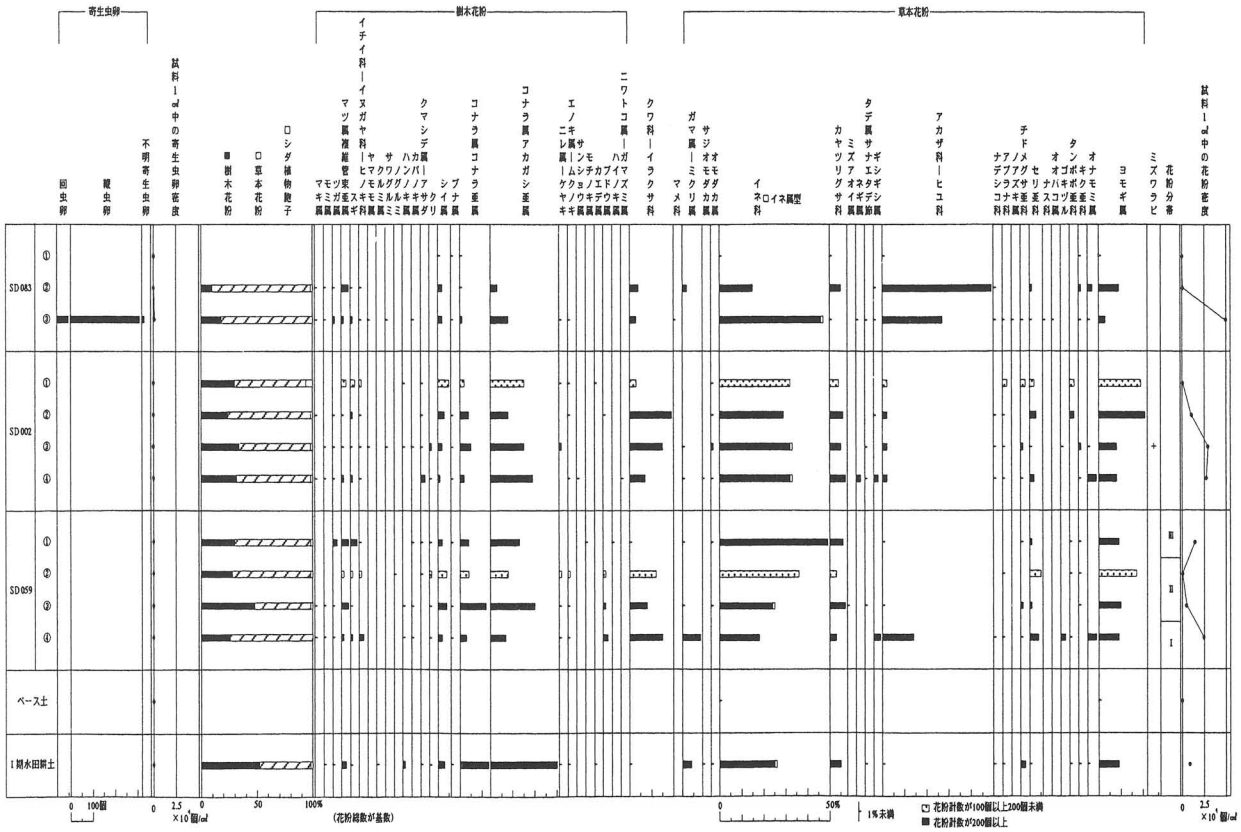


Fig.152　中の池遺跡における寄生虫卵・花粉ダイアグラム

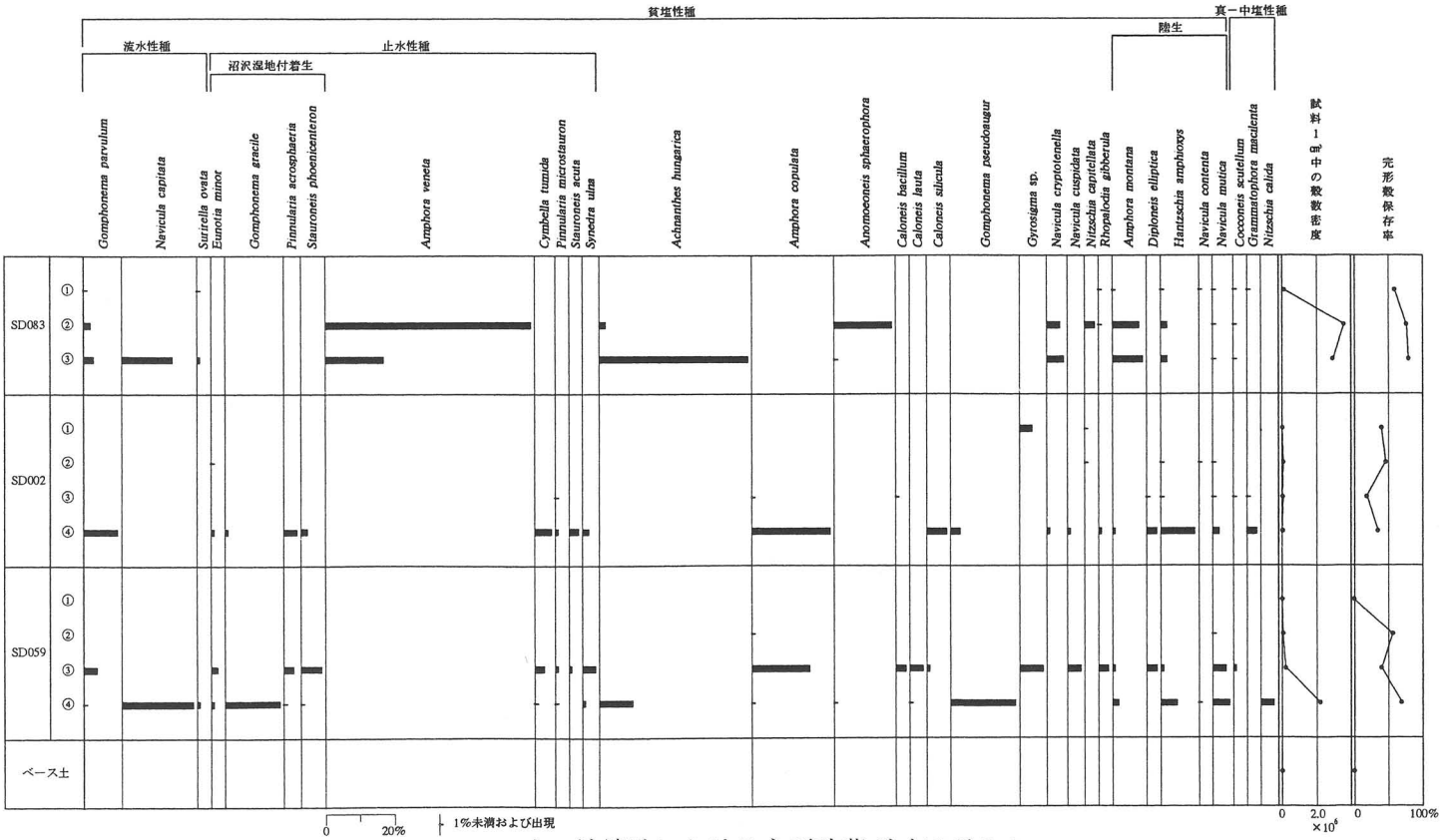


Fig.153　中の池遺跡における主要珪藻ダイアグラム

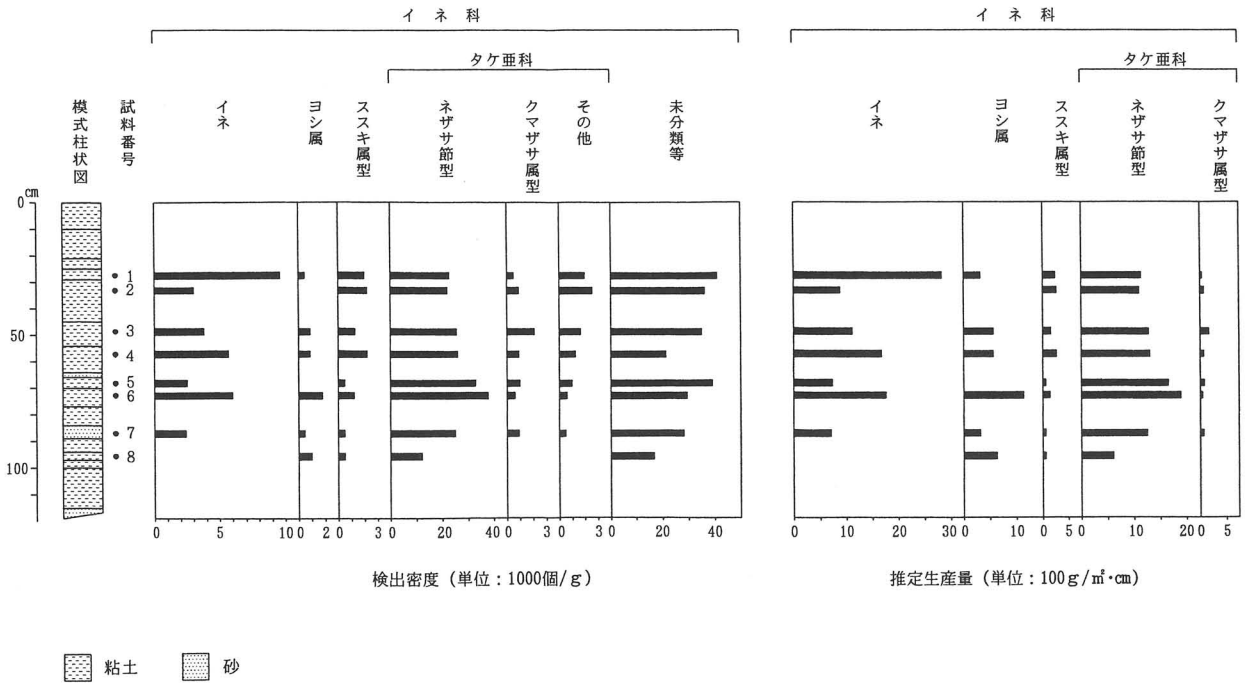


Fig.154　NO.1地点におけるプラントオパール分析結果

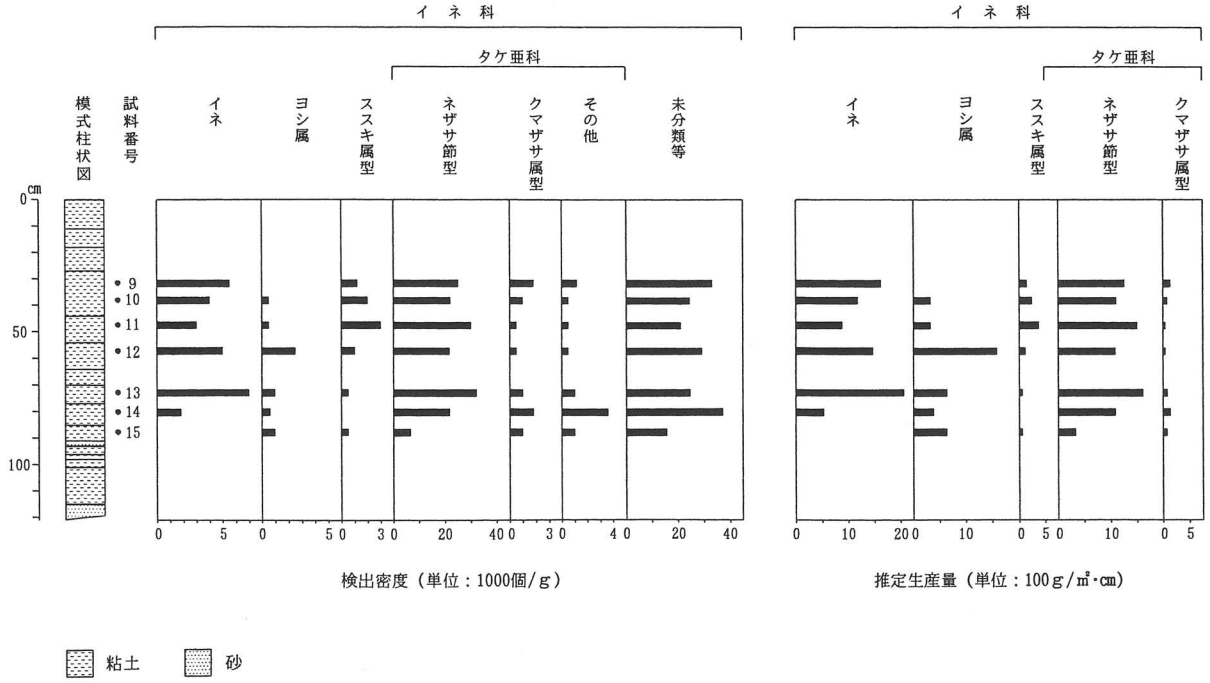


Fig.155　NO.2地点におけるプラント・オパール分析結果

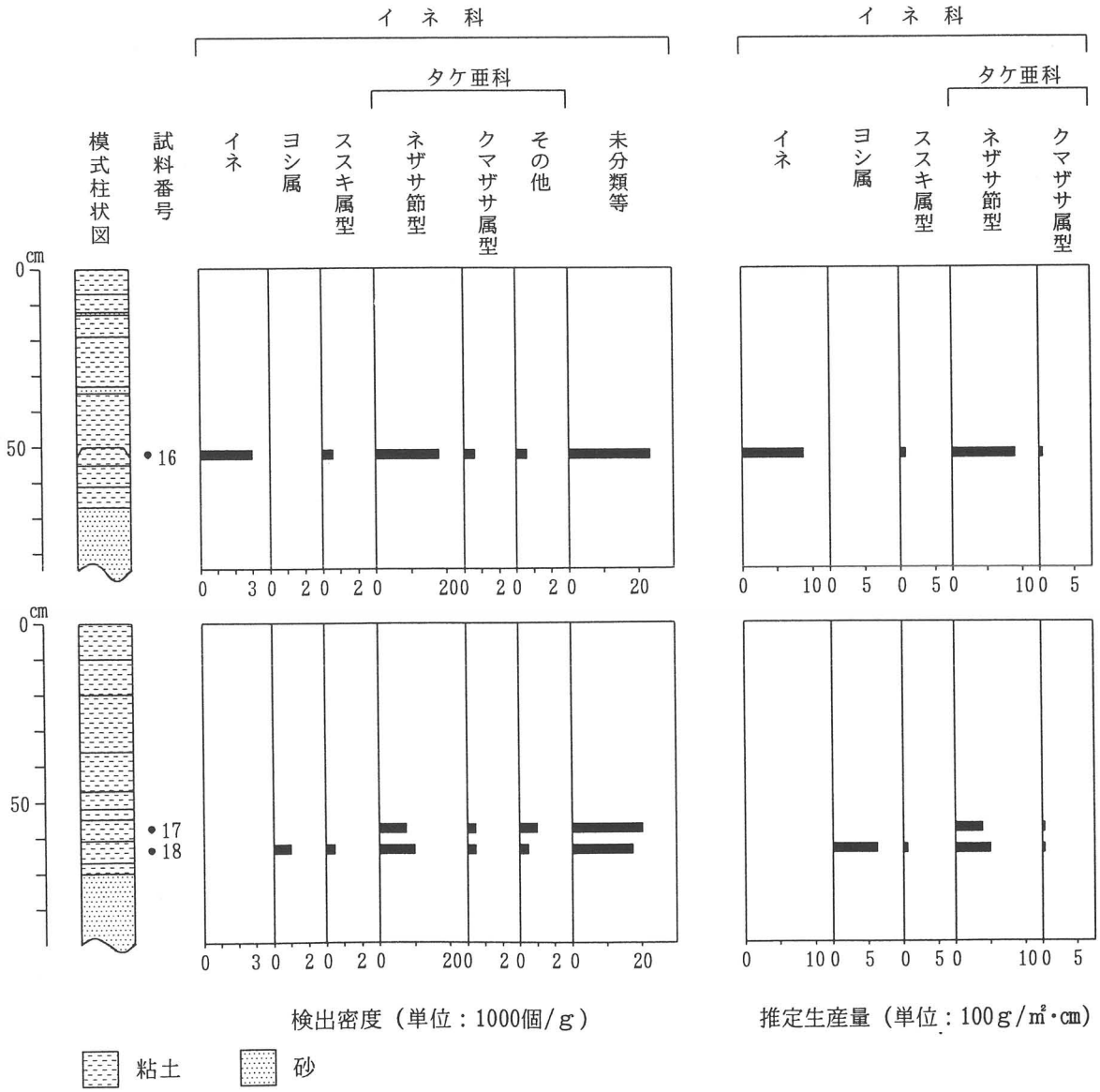


Fig.156　NO.3・NO.4地点におけるプラント・オパール分析結果

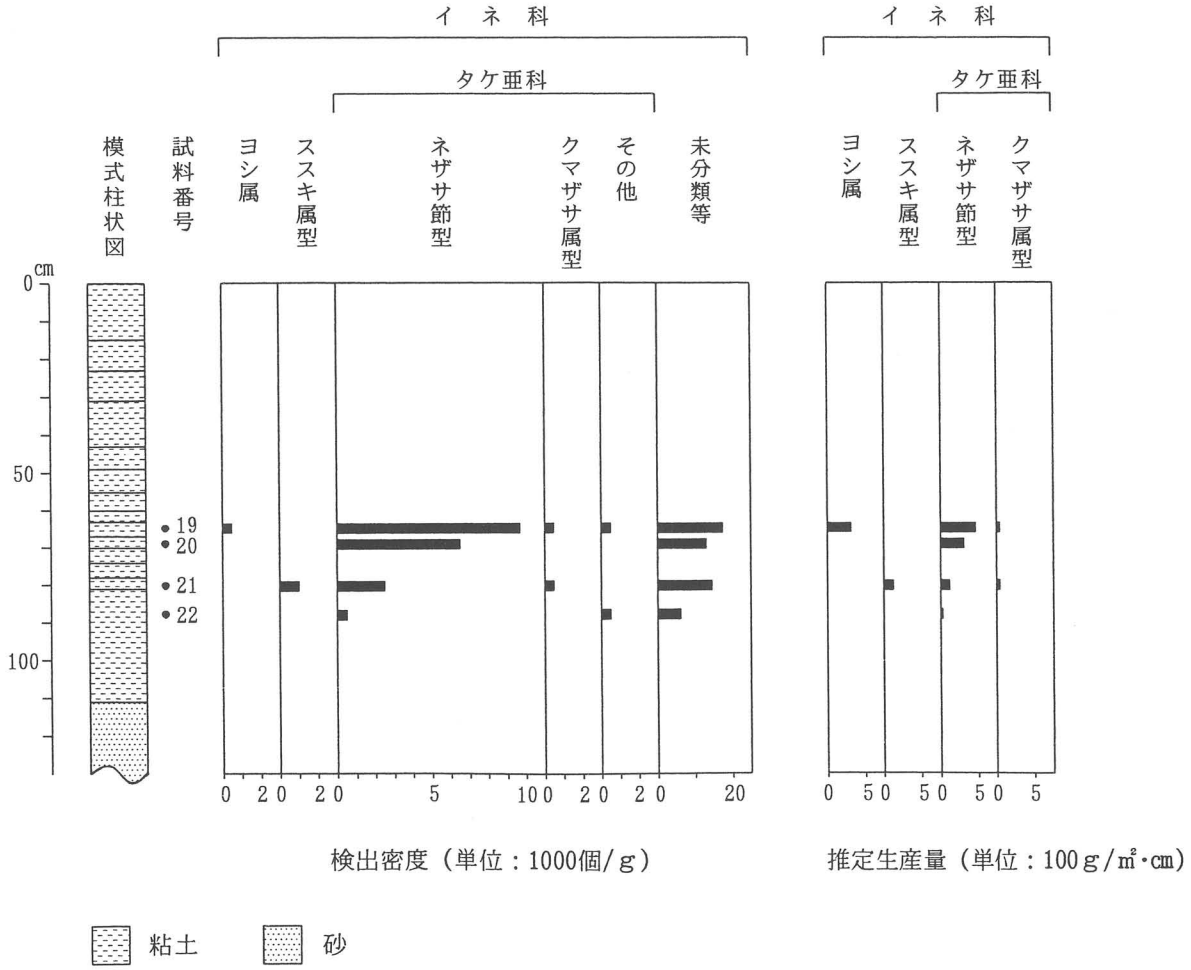


Fig.157　NO.5地点におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

地点名		No. 1								No. 2						
分類群（和名・学名）＼土層		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
イネ科	Gramineae (Grasses)															
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	96	30	38	57	25	60	24		55	40	30	50	70	18	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	5		9	9		18	5	10		5	5	25	10	6	10
ススキ属型	*Miscanthus* type	20	22	13	22	5	12	5	5	12	20	30	10	5		5
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)															
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	227	220	256	261	330	378	250	121	251	220	300	216	322	216	66
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	5	9	21	9	10	6	9		18	10	5	5	10	18	10
その他	Others	20	26	17	13	10	6	5		12	5	5	5	10	36	10
未分類等	Unknown	409	362	350	213	391	294	283	167	331	245	210	291	246	372	157
プラント・オパール総数		783	668	704	583	772	774	579	303	680	545	585	603	674	666	258

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	2.82	0.89	1.13	1.66	0.75	1.76	0.69		1.62	1.18	0.88	1.48	2.07	0.53	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.32		0.54	0.55		1.14	0.30	0.64		0.32	0.32	1.59	0.63	0.38	0.64
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.25	0.27	0.16	0.27	0.06	0.15	0.06	0.06	0.15	0.25	0.37	0.12	0.06		0.06
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	1.09	1.05	1.23	1.25	1.58	1.81	1.20	0.58	1.21	1.06	1.44	1.04	1.54	1.04	0.32
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	0.04	0.06	0.16	0.07	0.08	0.05	0.07		0.14	0.08	0.04	0.04	0.08	0.14	0.08

Tab.2　中の池遺跡のプラント・オパール分析結果（1）

検出密度（単位：×100個/g）

		No. 3	No. 4		No. 5			
分類群（和名・学名）＼試料		16	17	18	19	20	21	22
イネ科	Gramineae (Grasses)							
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	30						
ヨシ属	*Phragmites* (reed)			10	5			
ススキ属型	*Miscanthus* type	6		5			10	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)							
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	180	77	100	97	65	25	5
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	6	5	5	5		5	
その他	Others	6	10	5	5			5
未分類等	Unknown	234	204	175	175	131	146	61
プラント・オパール総数		462	296	300	286	196	186	71

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	0.88						
ヨシ属	*Phragmites* (reed)			0.63	0.29			
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.07		0.06			0.12	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	0.86	0.37	0.48	0.47	0.31	0.12	0.02
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	0.05	0.04	0.04	0.03		0.04	

Tab.3　中の池遺跡のプラント・オパール分析結果（2）

分類群		SD083			SD002				SD059				ベース	1期
学名	和名	①	②	③	①	②	③	④	①	②	③	④	土	水田耕土
Helminth eggs	寄生虫卵													
Ascaris	回虫卵			5										
Trichuris	鞭虫卵			34										
Unknown eggs	不明虫卵			1										
Total	計	0	0	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	試料1cm³中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	3.6 $\times 10^{2}$	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉													
Podocarpus	マキ属		2	1		1		1			1	1		
Abies	モミ属		1	1			1	2			1	1		2
Tsuga	ツガ属		1	6		1	4	3	5		2	1		1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属		7	6	4	3	1	6	7	2	11	6		8
Cryptomeria japonica	スギ		1	7	4	4	1	5	6	2	1	6		1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1	4	2	2	4	4	2	2		7		
Myrica	ヤマモモ属			1			2							
Juglans	クルミ属													1
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ			1			1							
Platycarya strobilacea	ノグルミ									1				
Alnus	ハンノキ属				1		1				1	1		4
Betula	カバノキ属			1			3		2		3	1		
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ				1	2	1	8	2	1				2
Castanea crenata	クリ						5	3	1	2	1	2		3
Castanopsis	シイ属	2	4	13	10	12	10	6	4	7	14	10		10
Fagus	ブナ属	1		1		1	1	2	1		1	4		1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1	1	7	4	14	20	10	8	6	46	14		51
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属		7	47	29	29	69	87	30	12	71	35		119
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ			1	1		5			2	1	1		3
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ			1	1	1		1		2	3	2		3
Zanthoxylum	サンショウ属							1						
Ilex	モチノキ属								1					
Acer	カエデ属				1									1
Vitis	ブドウ属					1				2	4	9		
Symplocos	ハイノキ属								1					
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属							1						
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉													
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		11	16	6	67	64	34	2	19	27	69		3
Leguminosae	マメ科			1										
Nonarboreal pollen	草本花粉													
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属		6				2	3	1		2	37		14
Alisma	サジオモダカ属							1						1
Sagittaria	オモダカ属				1	1	6	3	1		3			1
Gramineae	イネ科	6	37	263	61	103	133	147	110	57	86	84	1	101
Oryza type	イネ属型			2			1	1			1			1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	12	3	8	20	21	30	13	5	24	14		19
Monochoria	ミズアオイ属										1			
Allium	ネギ属			5				7						
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節			1			2	1			1			2
Rumex	ギシギシ属		2	2		1		9				12		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	4	125	152	4	6	10	7	1		3	64		1
Caryophyllaceae	ナデシコ科		2	1		1	1	1				2		2
Cruciferae	アブラナ科			2	3	1	1	2		1		3		1
Dunbaria	ノアズキ属			1										
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科			1	4		5	4	1		4	1		7
Apiodeae	セリ亜科		3	2	4	9	3	8	3	8	5	17		1
Solanaceae	ナス科			1										
Plantago	オオバコ属			2										
Actinostemma lobatum	ゴキヅル						1					7		
Lactucoideae	タンポポ亜科				4	7			1	1		1		1
Asteroideae	キク亜科	1	3	1			6	1	1	1	2			1
Xanthium	オナモミ属		5	1			2	19				19		2
Artemisia	ヨモギ属	2	22	17	35	75	35	38	20	27	36	41	1	36
Fern spore	シダ植物胞子													
Monolate type spore	単条溝胞子		1	1	6	3	1	2	1	1	2	1		3
Celatopteris	ミズワラビ						1							
Trilate type spore	三条溝胞子	1	3		5	3	2	2	3	2	1	1		2
Arboreal pollen	樹木花粉	4	25	98	58	71	129	140	70	41	161	101	0	210
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	11	17	6	67	64	34	2	19	27	69	0	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	14	217	457	124	224	229	282	152	100	168	302	2	191
Total pollen	花粉総数	18	253	572	188	362	422	456	224	160	356	472	2	404
	試料1cm³中の花粉密度	1.4 $\times 10^{2}$	1.8 $\times 10^{3}$	5.0 $\times 10^{4}$	1.6 $\times 10^{3}$	1.1 $\times 10^{4}$	2.9 $\times 10^{4}$	2.7 $\times 10^{4}$	1.4 $\times 10^{3}$	1.6 $\times 10^{3}$	4.9 $\times 10^{3}$	2.4 $\times 10^{4}$	1.2 $\times 10$	8.9 $\times 10^{3}$
Unknown pollen	未同定花粉	2	5	3	12	7	7	0	5	12	9	2	0	9
Fern spore	シダ植物胞子	1	4	1	11	6	4	4	4	3	3	2	0	5

Tab.4　中の池遺跡における寄生虫・花粉分析結果

分類群	S083 ①	S083 ②	S083 ③	S002 ①	S002 ②	S002 ③	S002 ④	S059 ①	S059 ②	S059 ③	S059 ④	ベース土
貧塩性種（淡水生種）												
Achnanthes hungarica		7	93								15	
Achnanthes lanceolata										2	1	
Amphora copulata						4	23		3	18	1	
Amphora montana	11	25	20				1			1	3	
Amphora veneta		185	37									
Anomoeoneis sphaerophora		53	2								1	
Caloneis bacillum						1				3		
Caloneis hyalina										1		
Caloneis lauta										4	1	
Caloneis silicula							6			1		
Cyclotella sp.											1	
Cymbella cesatii							1					
Cymbella minuta										2		
Cymbella naviculiformis										2		
Cymbella silesiaca										1		
Cymbella sinuata										1		
Cymbella sp.							1					
Cymbella tumida							5			3	1	
Diploneis elliptica						1	3			3		
Diploneis ovalis										2		
Diploneis yatukaensis						2	1					
Eunotia bilunaris											1	
Eunotia minor					1		1			2	2	
Gomphonema acuminatum						1	1					
Gomphonema angustum											2	
Gomphonema gracile							1				24	
Gomphonema grovei						2	1					
Gomphonema minuta							1					
Gomphonema olivaceum v. *salinum*											1	
Gomphonema parvulum	1	5	6				10			4	1	
Gomphonema pseudoaugur							3				29	
Gomphonema sp.										2		
Gomphonema subtile							1					
Gomphonema vibrio									1			
Gyrosigma acuminatum										1		
Gyrosigma sp.							4			8		
Hantzschia amphioxys	4	5	4		10	1	10			1	8	
Navicula capitata			33								32	
Navicula confervacea							2				1	
Navicula contenta	2				1						1	
Navicula cryptotenella		11	11				1					
Navicula cuspidata							1			4		
Navicula elginensis										1	2	
Navicula hasta										1		
Navicula laevissima										1		
Navicula mutica	6	1	2		38	2	2		2	4	7	
Navicula mutica v. *ventricosa*		1									1	
Navicula pupula							1				2	
Nitzschia amphibia		2	1									
Nitzschia angustata											2	
Nitzschia capitellata		9		1	2							
Nitzschia clausii									1	1		
Pinnularia acrosphaeria							4			3	1	
Pinnularia borealis							1					
Pinnularia brevicostata							1			1		
Pinnularia gibba										1		
Pinnularia major							1			2		
Pinnularia microstauron						1	1			1	1	
Pinnularia nodosa										2		
Pinnularia obscura						1						
Pinnularia schroederii							1					
Pinnularia subcapitata		1										
Rhopalodia gibberula	1	1					1			3		
Stauroneis acuta							3			1		
Stauroneis phoenicenteron							2			6	1	
Stephanodiscus sp.					1							
Surirella ovata	1		3								2	
Synedra ulna							2			4	2	
真-中塩性種（海-汽水生種）												
Achnanthes brevipes										1		
Actinoptychus sp.										1		
Cocconeis scutellum	2	1	2			1				1		
Grammatophora macilenta	1					2	3					
Nitzschia calida											6	
Nitzschia constricta										2		
Nitzschia levidensis										1	1	
Thalassionema nitzschioides							1				1	
合　計	29	307	214	1	53	19	102	0	7	104	155	0
未同定	2	9	23	1	4	5	7		1	8	14	
破片	22	89	60	3	73	104	205		7	172	79	1
試料1cm³中の殻数密度	1.1 $\times 10^4$	3.6 $\times 10^6$	2.9 $\times 10^6$	8.0 $\times 10^2$	2.3 $\times 10^4$	9.6 $\times 10^3$	3.6 $\times 10^4$	0.0 $\times 10$	2.0 $\times 10^3$	2.9 $\times 10^5$	2.2 $\times 10^6$	0.0 $\times 10$
完形殻保存率（%）	58.5	78.0	79.8	40.0	43.8	18.8	34.7	-	53.3	39.4	68.1	0.0

Tab.5　中の池遺跡における珪藻分析結果

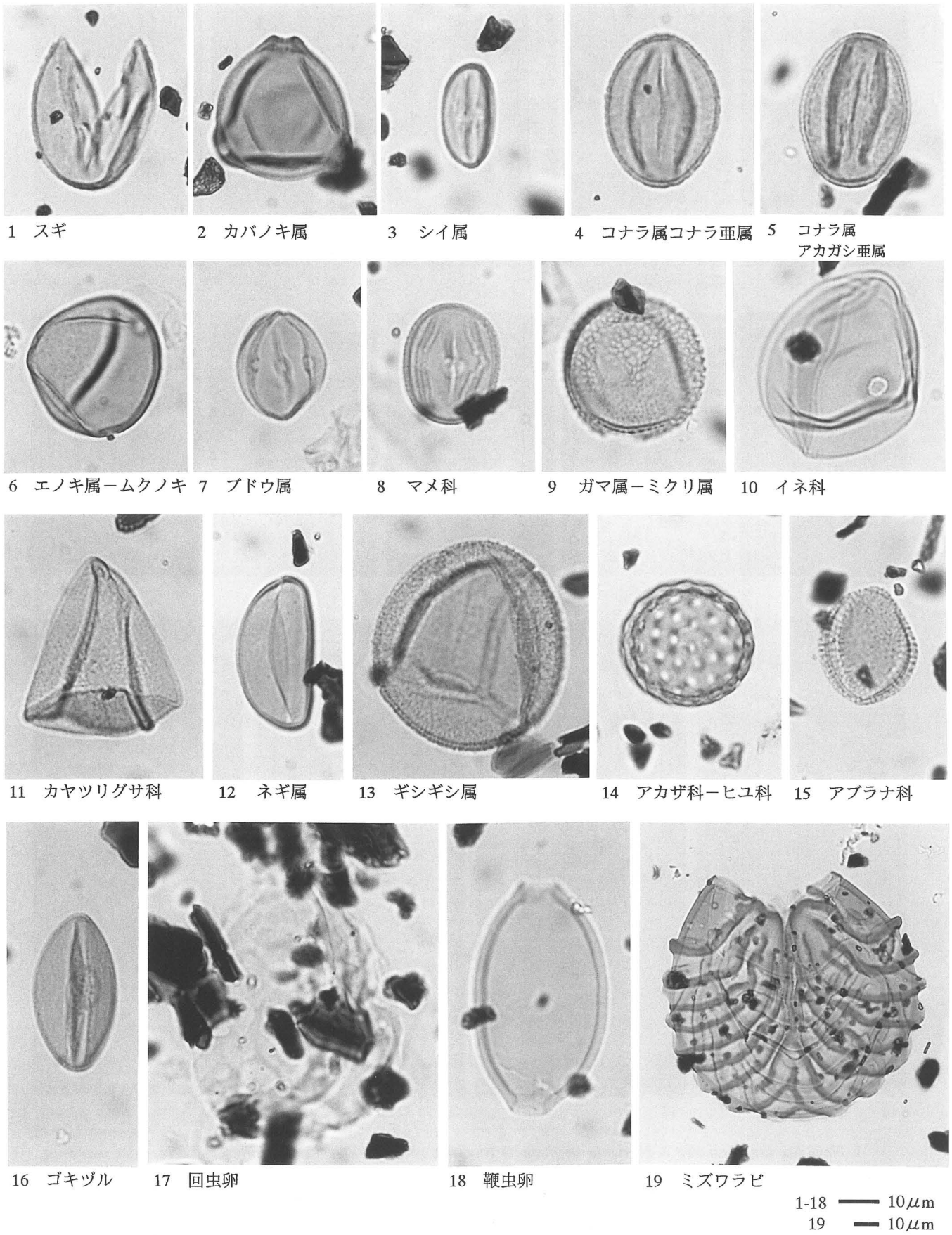
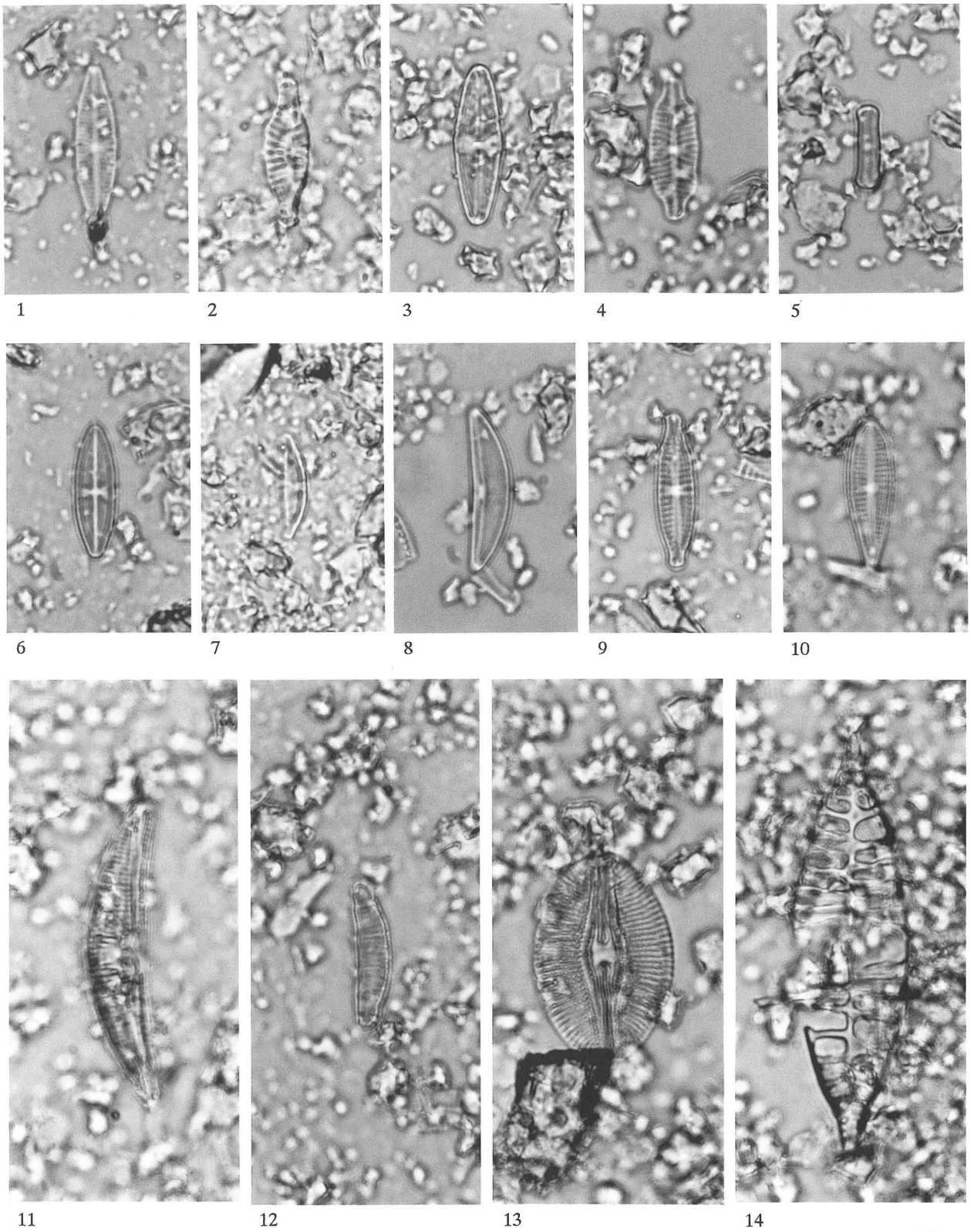
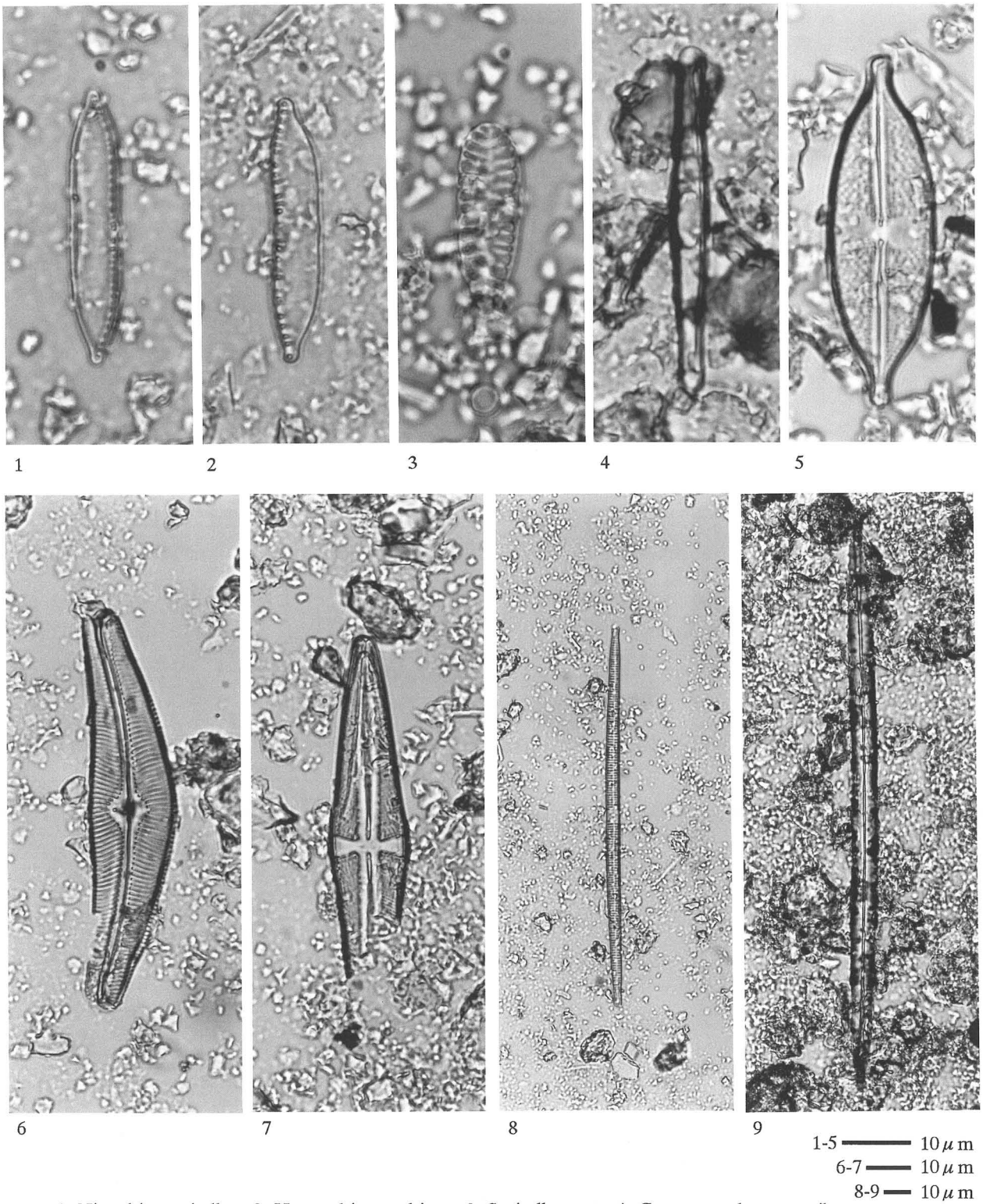


Fig.158 中の池遺跡の花粉・寄生虫卵・胞子



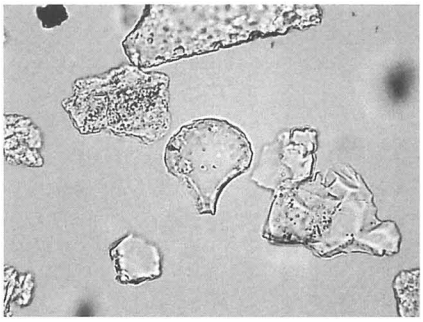
1. *Navicula cryptotenella* 2. *Navicula capitata* 3. *Navicula mutica* 4. *Navicula elginensis* 5. *Navicula contenta*
6. *Achnanthes hungarica* 7. *Amphora montana* 8. *Amphora veneta* 9. *Gomphonema parvulum*
10. *Gomphonema pseudoaugur* 11. *Amphora copulata* 12. *Eunotia minor* 13. *Diploneis elliptica*
14. *Navicula cuspidata*

Fig.159　中の池遺跡の珪藻 Ⅰ

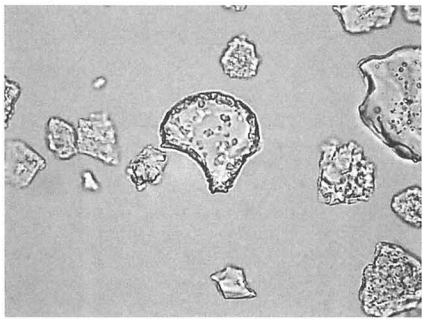


1. *Nitzschia capitellata* 2. *Hantzschia amphioxys* 3. *Surirella ovata* 4. *Grammatophora macilenta*
5. *Anomoeoneis sphaerophora* 6. *Cymbella tumida* 7. *Stauroneis acuta* 8. *Synedra ulta* 9. 海綿骨針

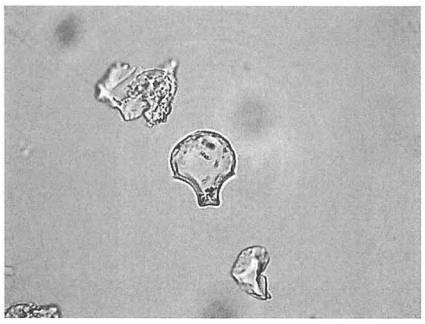
Fig.160　中の池遺跡の珪藻 Ⅱ



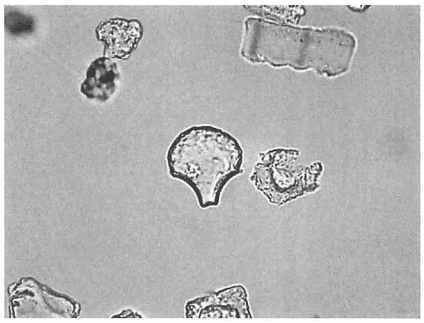
イネ



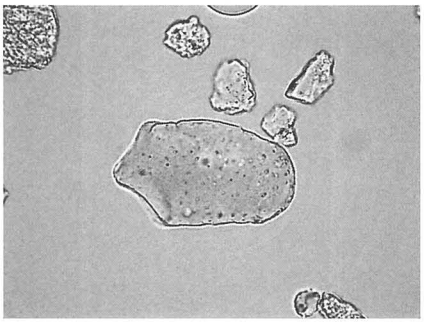
イネ



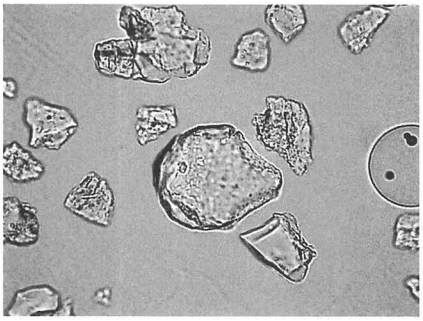
イネ



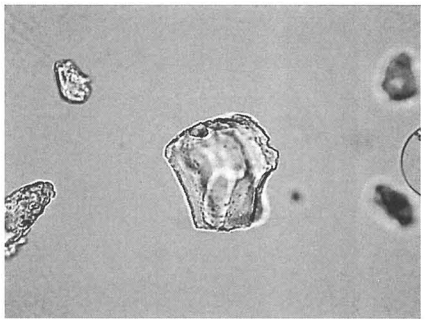
イネ



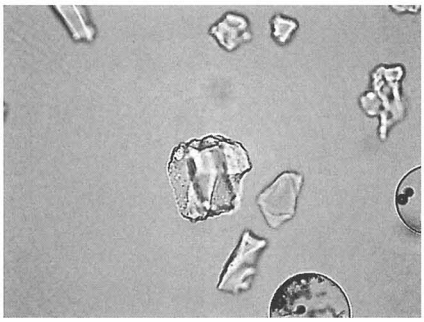
ヨシ属



ヨシ属

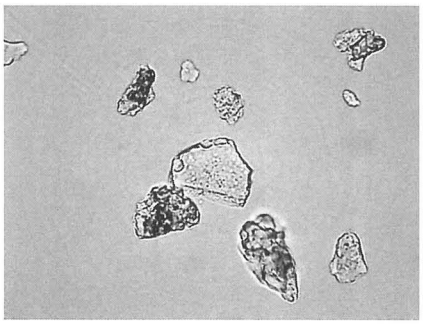


ネザサ節型

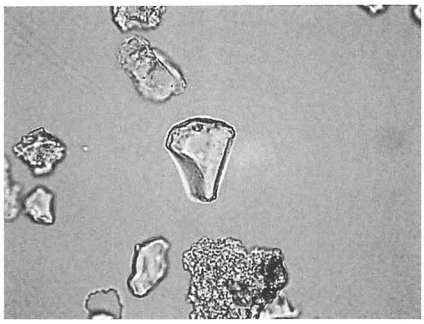


ネザサ節型

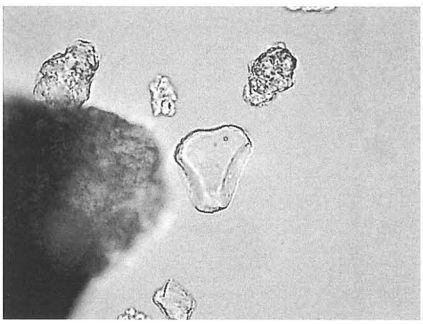
クマザサ属型



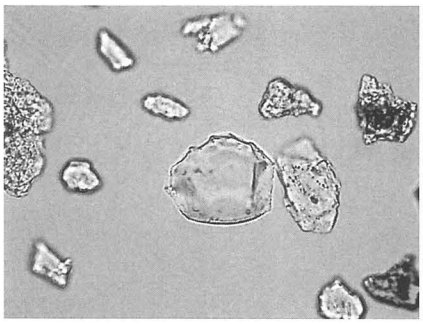
クマザサ属型



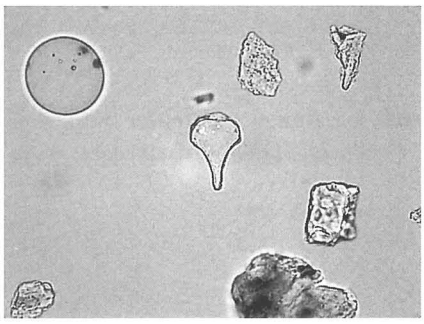
ススキ属型



ススキ属型



ジュズダマ属型



シバ属

Fig.161　中の池遺跡のプラントオパール

第8章　調査のまとめ

第1節　出土土器の時期と遺構の変遷

第1項　目的

当遺跡の最大の特徴は、香川県内屈指の環濠集落であることと言える。現在、弥生時代における社会構成を考える上で、拠点的集落の性格をどう考えるかが重要となっている。それに伴い環濠集落研究においては集落を巡る溝の機能の解明、環濠集落を取り巻く景観変遷の復元が課題として提示されている。当遺跡の評価を行うにあたり、本節では出土遺物の分析をもとに、当遺跡における遺物群の相対的関係を整理する。そしてそれを元に遺構の変遷を分析し、多重環濠成立のプロセスを探る。なお、文中でふれる遺物番号は、本文中の遺物番号に依拠する。

第2項　方法

当遺跡の資料は溝からの出土資料が中心で、また既往の編年観を基にする限りそれほど大きな時期差を持たないことが予想される[1]。しかし、細分された取り上げ単位と、まとまった遺物量という遺跡特性をもとに、数量的処理を行うことで、各出土遺物群の相対的な新旧関係の追求が可能になると考える。そこで、先学によって指摘されている時期差を示す属性をもとに、下記の基準を設定して数量的処理を行った。なお、カウントの基準は破片数である。

・逆「L」字状の口縁部を有するいわゆる瀬戸内型甕の比率
・口縁部キザミの保有率
・口縁部直下に貼り付け突帯を有する甕の保有率
・口縁部直下の条線の数

また、これら諸属性の数量的比率に加え、特徴的な壷類、甕の有無についても、補助的な検討素材とした。

第3項　検討資料の抽出

まず、対象遺物群の抽出を試みる。当遺跡において一括性のある良好な遺物群としてはSK185、SD081暗灰色粘土、SD081明黄褐色粘土があげられる。SD081は暗灰色粘土が堆積した後、明黄褐色粘土で人為的に埋没する。この明黄褐色粘土は他の溝の最終埋土と異なり下層遺物を含んだ土壌化層ではなく、地山土のブロックである。その後SD081が再掘削や浚渫を受けた痕跡は見られず、この層位の遺物群は一括性が強いと考えてよい。SK185はSD081に切られる土坑である。SD081に再掘削の痕跡がなく、081の縦断面にSK185掘削時の排土の痕跡などが見られないことから、SK185の掘削時期はSD081に先行すると考えてよい。また、出土石器は剥片類が卓越することから、石器製作の際の屑を投棄したと考えることが可能であり、埋土観察から得られた廃絶状況と矛盾しない。したがってこれら良好な一括性を示す遺物群の序列はSK185→SD081暗灰色粘土→SD081明黄褐色粘土となる。ただ、ここで図化された遺物の中にいくつか新しい要素を持つ遺物が見られる。混入の可能性のあるものを本文の図版作成段階で除外するのではなく、一旦図化した上でまとめの段階で混入と判断する遺物を除外することにした。新しい要素を持つ遺物としては、Fig.63－47やFig.68－133・69－137などがそれに該当するが、まずFig.68－133については壷において口縁部の開き、頸部の直立化傾向などに明らかに後出する要素が認められる。この遺物は調査区北端付近から出土したもので、灰褐色細砂出土のものと接合関係を有し、明黄褐色粘土が尽きて灰褐色細砂と暗灰色粘土が接する部分において灰褐色細砂の遺物を誤って暗灰色粘土として取り上げたものと考える。Fig.69－137についてはセクションｃ付近出土であることが確認できる。この付近は撹乱に近接する地点であり、撹乱からの混入が最大の原因と考えられる。Fig.63－47は直立気味の頸部や頸部体部境界の貼付け突帯などに新しい要素を見出すことができる。しかし出土状況に不審な点は見られず、現段階では明黄褐色粘土出土として扱っておく。

次に遺物のまとまりがあまり良好ではないが、数量処理に耐えうる遺物量を有する遺構としてSD083があげられる。SD083は埋土の観察から数度の掘り直しを想定している。下層・最下層に当たる暗灰色砂質土・黒灰色粘土は

浚渫も行われているが、溝底まで大々的に行うようなものではなかったと考えられる。しかし、中・上層にあたる暗灰色粘質土・暗灰色粘土・暗褐色砂質土は、例えばFig.94－150のような4期以降に降る遺物が混在することから、かなり浚渫・掘り直しが行われたものと考えられる。その後の黒褐色粘土・暗褐色粘質土については最後の比較的規模の大きな掘り直し後の埋め戻し土と考えられる。以上の堆積環境をふまえて遺物群を観察すると、SD083は最下層に当たる暗灰色砂質土においてFig.97－196のような刺突文を持つものや、最下層直上の黒灰色粘土においてFig.96－166・167のような、Fig.95の壷類に比して明らかに後出する要素を持つものが存在している。これらの遺物についても、上層の浚渫による遺物が混入したものとして理解してよいと考える。なお、Fig.97－186の土錘が最上層にあたる暗褐色粘質土から出土したものと接合関係を有することや、縦断面に中層から最下層まで達する掘りこみが見られることはこの想定を補強する。

Tab.6　SK185・SD081・083土器組成分析表
（トーンは遺物総数が20以下で扱いに注意を有するもの）

	逆「L」字状口縁甕の比率(%)						口唇部刻みの保有率(%)				突帯文系の保有率(%)	口縁部直下の沈線(1位●、2位△、○1個体ずつ程度)						その他の属性(壺)				その他の属性(甕)		時期
	0	1～20	21～40	41～60	61～80	81～100	21～40	41～60	61～80	81～100		0	1～3	4～6	7～10	11以上	櫛描き文	口縁部と頸部の違いの明確なものが半数以上	口縁部と頸部の違いの不明確なものが半数以上	壺口唇部に幅を持ち刻み・沈線などが文様帯を形成するもの	壺口縁部上面に加飾	断面三角形の逆しで刻み・沈線を持たないもの	甕口縁部上面に加飾	
SK185	●												●											1期
SD081暗灰色粘土(40)		●(12.5)								●	0	△	●					●						2期
SD081明黄褐色粘土(85)		●(23.5)						●			7		△	●					●					3期(古？)
SD081灰褐色細砂・暗褐色粘土(49)		●(12.2)						●			4		△	●					●					
SD083暗灰色砂質土(11)					●(72.7)			●						●	△				●					3期(新？)
SD083黒灰色粘土(35)				●(60)				●			8	△		●	△				●					
SD083暗灰色粘質土(14)					●(71.4)			●				●	△	●					●	●		●		4期
SD083暗灰色粘土(99)						●(83.8)		●			4	△		●					●	●(刻み)				
SD083暗褐色砂質土(49)					●(77.5)			●			6	●		△					●			●		
SD083黒褐色粘土(235)					●(80)		●				4	●		△			●		●	●(刻み)	●	●		5期
SD083暗褐色粘質土(563)					●(65.3)				●		1	●			△		●		●	●		●	●	

Tab.7　SD002・059土器組成分析表
（トーン部分は遺物総数が20以下で扱いに注意を有するもの）

	逆「L」字状口縁甕の比率(%)						口唇部刻みの保有率(%)				口縁部直下に貼り付け突帯を持つ甕の保有率(%)	口縁部直下の沈線(1位●、2位△、○1個体ずつ程度)						その他の属性(甕)		その他の属性(壺)			
	0	1～20	21～40	41～60	61～80	81～100	21～40	41～60	61～80	81～100		0	1～3	4～6	7～10	11以上	櫛描き文	断面三角形の逆しで刻み・沈線を持たないもの	甕口縁部上面に加飾	口縁部と頸部の違いの明確なものが半数以上	口縁部と頸部の違いの不明確なものが半数以上	壺口唇部に幅を持ち刻み・沈線などが文様帯を形成するもの	壺口縁部上面に加飾
SD059暗灰色地山ブロック土(SD167灰色地山ブロック土)(8)						●(87.5)						●		△	△					?	?		
SD059・167黒色粘土(10)					●(80)							●			△					?	?		
SD059・167暗灰褐色砂質土(22)					●(77.2)					●	13	△	△	●	△				●	?	?		
SD059・167暗灰色粘土(41)					●(65.8)			●			4			●	△			●			●	●	
SD059・167暗灰色砂質土(26)					●(69.2)						3	●			△			●			●		
SD059・167黒褐色粘質土(167)					●(65.8)		●				0.5			●	△		●	●	●		●	●	
SD059黄褐色砂質土(10)						●(100)				●		●				△		●		?	?	?	
SD002黒灰色粘土(5)		●(20)											○		⊙								
SD002暗灰色粘土(3)					●(66.6)				●				⊙		○						●		
SD134暗褐色砂質土(2)						●(100)								○	⊙								
SD002・134黒灰色細砂(18)				●(55.5)				●					△	●									
SD134暗灰色粘質土(1)検討不可																							
SD002黒褐色砂質土・SD134暗褐色細砂(34)					●(73.5)			●			2		△	●				●			●		
SD002・134黒色粘土(41)						●(85.3)			●		0			●	△			●					

第4項　時期区分の設定

以上のかなり限定された出土状況の遺物群ではあるが、上記をもとにまず遺構・層位の序列を決定し、土器様相の特徴を抽出、時期区分を明確にしたい。Tab. 6 は先述の遺構出土の遺物群のうち特に甕に重点を置いた構成要素を一覧にした表である。これを見ると、それぞれの要素の増減からいくつかの段階を設定できる。

1期（Fig.162）

逆「L」字状の口縁部を持つ甕が存在せず、口縁部直下に1～3条の沈線を施す甕が中心の遺物群である。SK185が該当する。甕には口縁部の折り曲げの強いもの（135－8）が出現しており、貼付突帯系壷（135－1）の口縁部の伸びは弱い。

2期（Fig.162）

逆「L」字状の口縁部を持つ甕が1～20％存在し、口縁部に1～3条の沈線を施す甕を中心とする遺物群。逆「L」字状の口縁部は断面四角形で肉厚のものが主体である。壷の大半は口縁部と頸部の境界が明確である。SD081暗灰色粘土が該当する。沈線文系壷の中にはSD081暗灰色粘土（68－130・133）のような口縁部の伸びの大きいものも少数含まれる。如意状口縁の甕は口縁部を短く強く折り返すもの（69－152・70－159）が主体である。

3期（Fig.162・163）

口縁部直下に4～6条の沈線を持つ甕を主体とし、壷は口縁部と頸部の境界が不明瞭なものが主体となる。SD081明黄褐色粘土、SD081灰褐色細砂、SD081暗褐色粘土、SD083暗灰色砂質土、SD083黒灰色粘土が該当する。壷は口縁部の伸びが長いものが主体となり、胴部最大径が下位にくるものが多い。SD081明黄褐色粘土Fig.63－47のような胴部と頸部の境界を明確にするもの、（63－53）のような口縁部が水平近くまで開くものも見られる。逆「L」字状の口縁部を持つ甕の比率の違いや、甕口縁部直下の沈線多条化を指標として2時期に分かれる可能性がある。

4期（Fig.163）

甕は口縁部直下に4～6条の沈線を持つものを主体とし、7～10条のものがこれに次ぐ。また口縁部直下に沈線を持たない甕も増加し、後半には、主体を占めるようになる。甕の逆「L」字状口縁は薄くシャープなものが存在し、多条化が顕著である。SD083暗灰色粘土、暗灰色粘質土、暗褐色砂質土が該当する。段系壷が姿を消し、貼付突帯系の壷の口縁の伸びも著しくなる。またSD083暗灰色粘土（92－126）、暗灰色粘質土（94－150）のように口唇部に面を持ち、しっかりした刻み目や文様帯を形成するものが出現する。無頸壷（94－143）も存在する。

5期（Fig.164・165）

逆「L」字状の口縁部を持つ甕の比率や、甕口縁部直下沈線数の傾向は変わらないが、キザミ、沈線を持たない甕が増加、櫛描き沈線が採用される。また、壷に加飾性が増し、バリエーションが豊かになる。最終段階には口縁部直下に貼り付け突帯を有する、いわゆる突帯文系甕の比率が低下する傾向がある。SD083黒褐色粘土・暗褐色粘質土が該当する。壷のバリエーションは増加し、棒状浮文を持つもの（86－74）、口縁上面に山形文を施すもの（86－77）、口縁部内面に多重の刻み目突帯を有するもの（82－15）などがある。キザミ・沈線を持たない甕は体部の直線化が顕著で、内外面ともにヘラミガキを施す傾向がある。

これらの遺物群の変遷は、従来いくつかの編年案において編年基準資料として利用されていた中の池遺跡の既存資料の時期幅を確認することにつながろう。また、当該時期は瀬戸内型甕に代表される遠賀川式期以降の地域色が発現する重要な時期に当たっており[(2)]、土器研究のみならず地域社会復元の意味でも重要な位置づけができる。しかしながら、本稿の目的は編年ではなく、環濠掘削・埋没プロセスの検討であるため、ここでは今回設定した各時期がおおよそ既存編年のどの枠に該当するかについておおまかにふれるに留める。

先述のとおり、香川県内の弥生前期土器の編年は先学により一定の完成をみている。中でも森下英治氏による編年案は弥生前期を大きくI期とII期に大別し、さらにそれぞれをa～cに細分、逆「L」字状口縁を有する甕出現直前をIIa期とし、出現以降をIIb期、甕の沈線が著しく多条化する時期をIIc期と位置づけている。今回設定した時期区分のうち、1期がIIa期に、2・3期がIIb期に、4期がIIc期に、5期が弥生中期初頭に該当しよう。

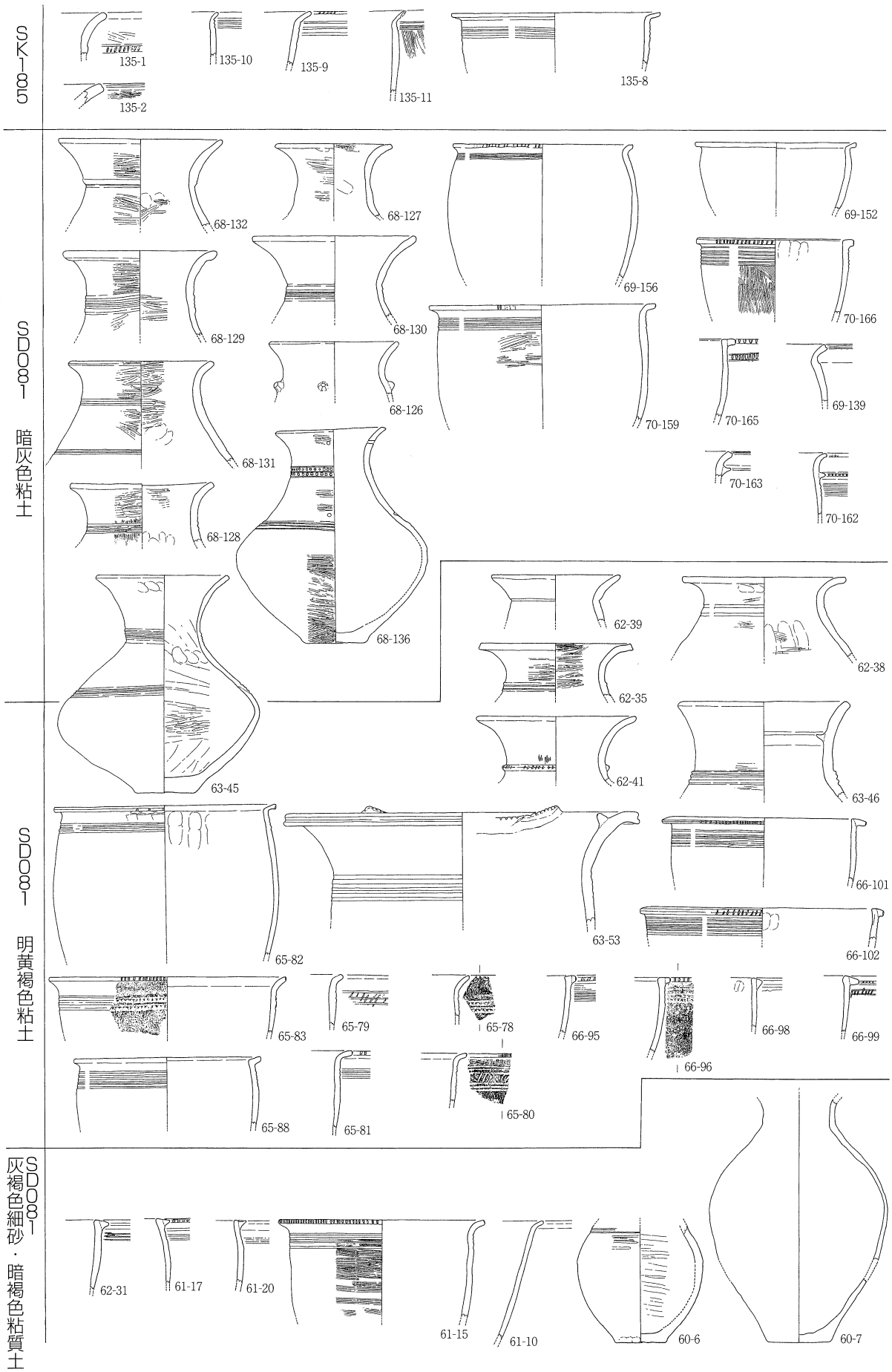


Fig.162　1～3期の遺物群（S=1/6）

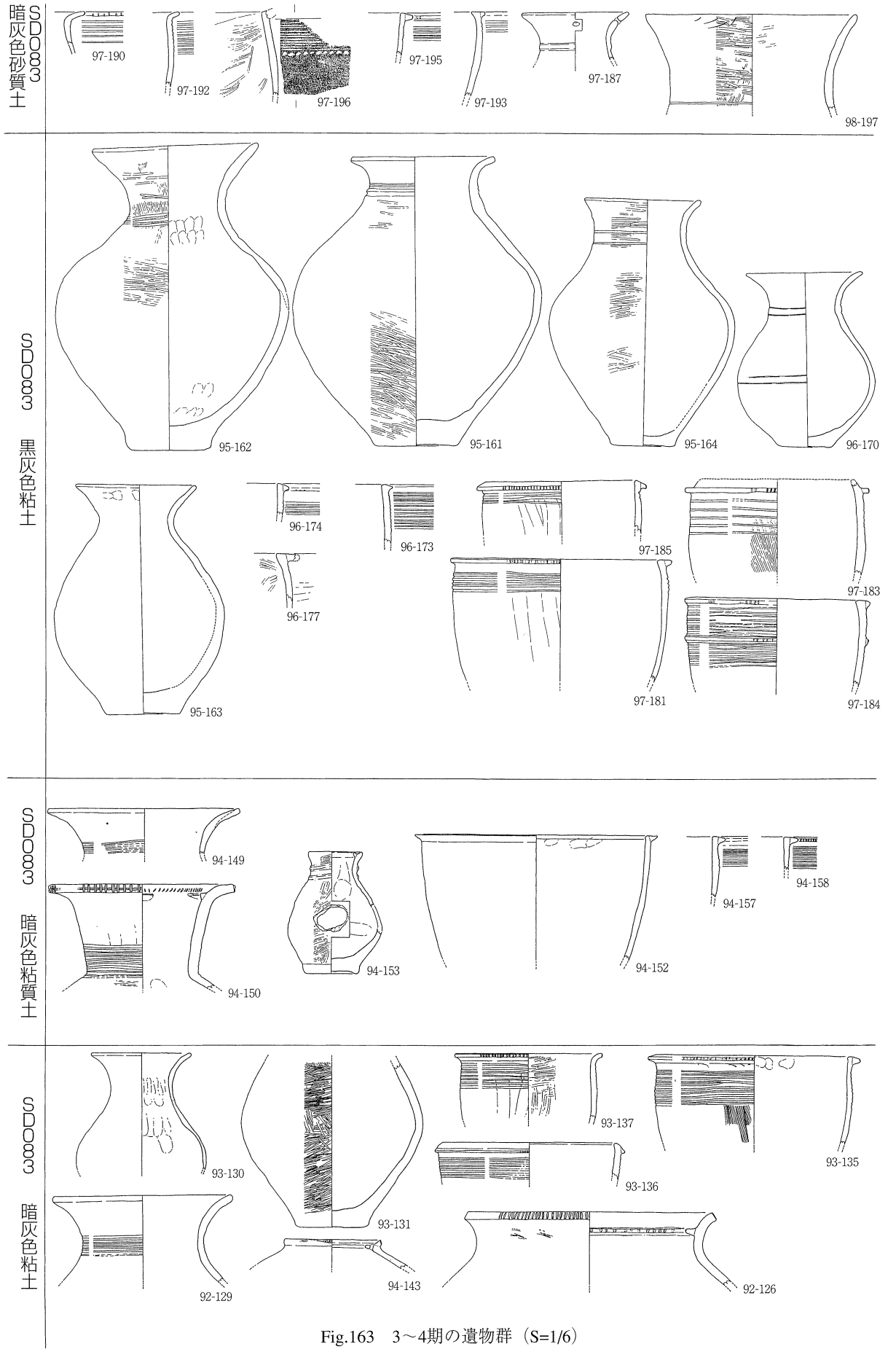


Fig.163　3～4期の遺物群（S=1/6）

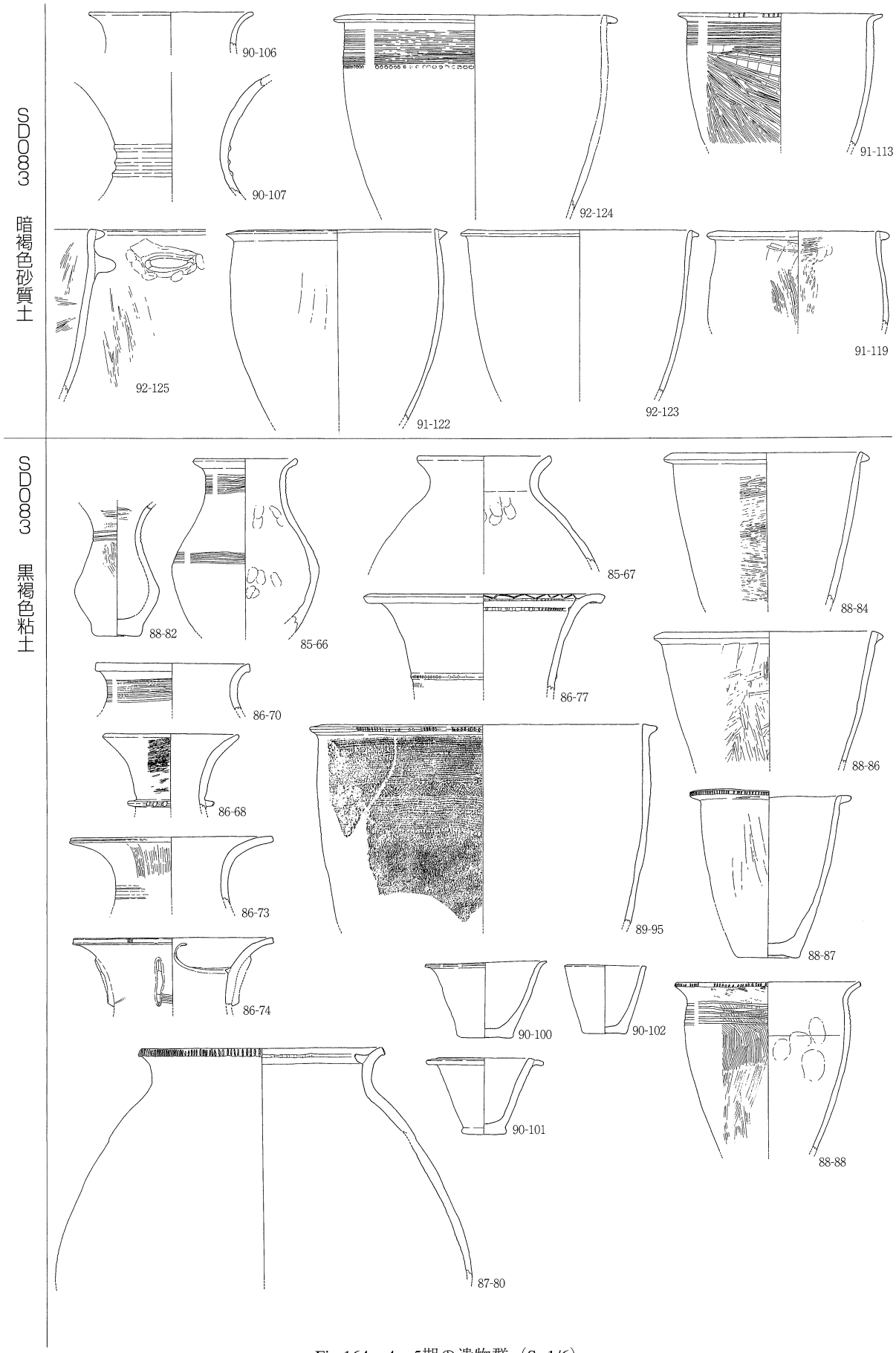


Fig.164　4・5期の遺物群（S=1/6）

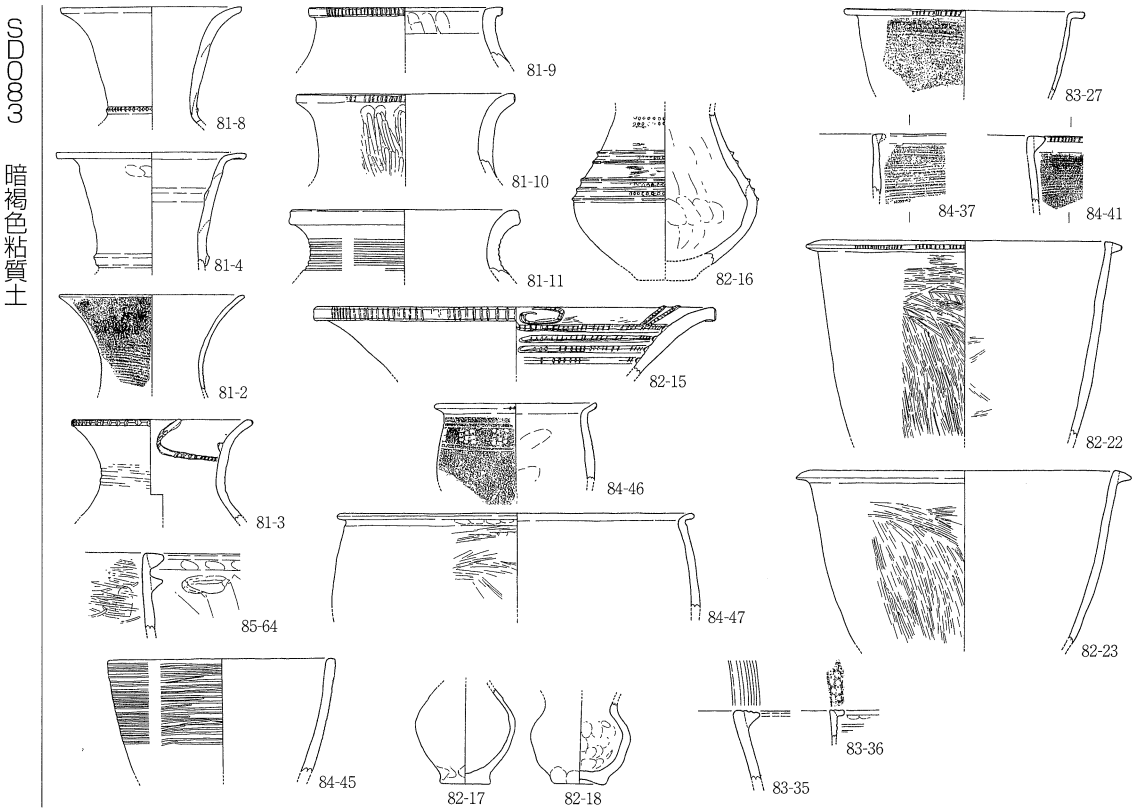


Fig.165　5期の遺物群（S=1/6）

第5項　各遺構・層位の時期

前項において設定した時期区分をもとに、その他の遺構について時期を推定する。（組成比はTab.7参照）

・SD002（SD134）

遺物の混じりが著しく、各層に渡って4期の遺物が混入している。下層に相当する黒灰色細砂において（40－48）のような広く開く口縁を持つ壷が存在しており、4期に浚渫（掘り直し）が行われていたと考える。また、遺物量が少なく層別に数量的比較を行なうことも困難であり、掘削時期を決定することは難しいが、いくつか口縁部・頸部の境界に明確な削り出し突帯系の壷が存在することなどから3期新段階～4期初頭に掘削された可能性がある。最上層の掘り直し内出土の遺物には櫛描き沈線が含まれず、キザミ・沈線の消失した甕が少量であること、口唇部に文様帯の発達した壷がほとんど見られないことなど4期でも古い段階の要素を有する。溝掘削後短期間の内に再掘削され、埋め戻されたと考えられる。

・SD059（SD167）

やはり各層の安定性は良好でない。土器群の構成要素を見ると、下層・最下層にあたる地山ブロック層・黒色粘土は逆「L」字状口縁を持つ甕の比率においては他と大きな違いはなく、口縁部直下の沈線の数は沈線を持たないものを主体にし、7～10条のものを主体とするという特徴を有する。しかしながら遺物量はいずれも口縁部破片数20個体以内で、数量的検討に耐えうるものではない。そこで壷類の型

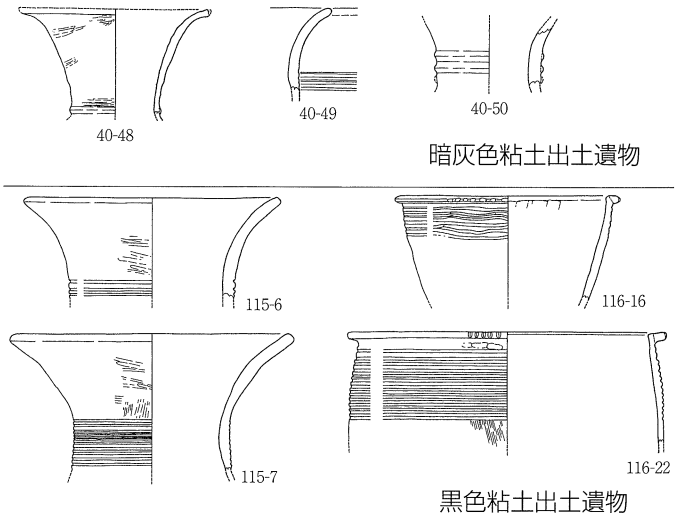


Fig.166　SD002・134下層の遺物と掘直し後の遺物（S=1/6）

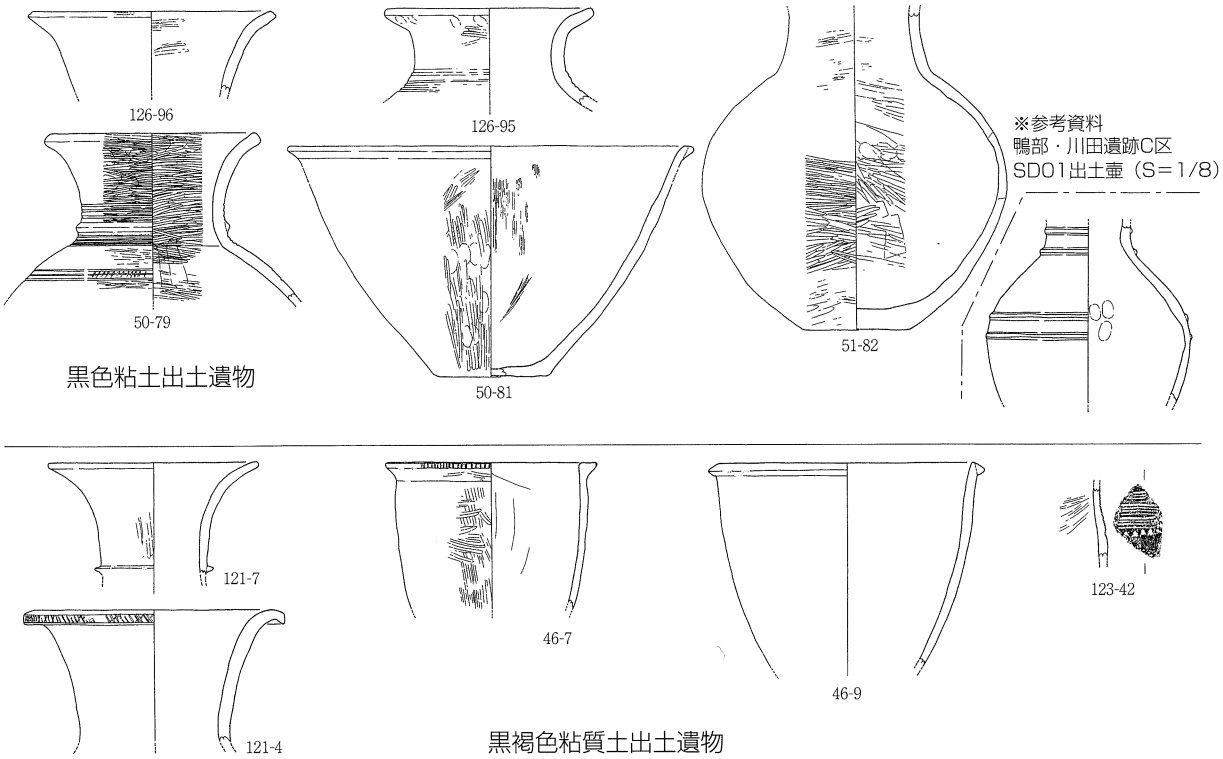


Fig.167　SD059・167下層の遺物と掘直し後の遺物（S=1/6）

式を検討してみると、黒色粘土出土の壷類はFig.126－95のように3期の要素を強く持つものが存在する。（51－82）はイレギュラーな器形のものであるが、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す点に古い要素を見出すことができる。一の谷遺跡群第8土坑出土の刻みを有する貼付け突帯のものや、鴨部・川田遺跡C区SD01出土の4～5期に並行するものなどに先行する器形のものとなる可能性がある[(3)(4)]。（50－79）は頸部と体部の境界が明確化し、境界部に貼付け突帯を持つ点などに新しい要素を見出すことができるが、口縁部の開きが小さい点や、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す点などに古式の要素を残しており、先に述べたSD081明黄褐色粘土出土の壷Fig.63－47の存在を考えると4期に先行するものと考えることができる。以上の点より、SD059・167の埋没開始時期は3期新段階～4期初頭に位置づけられる。その後の各層はいずれも4期のうちに位置づけられ、4期段階に連続した浚渫がなされているといえる。他の溝同様、最終的に比較的大規模な掘り直しが行われるが、この掘り直し部分が埋没を始めた時期に当たる黒褐色粘質土からは櫛描き沈線の甕が出土しており、掘り直し部分の埋没開始は5期に位置づけられる。

第6項　環濠の変遷

2期（Fig.166－1）

SD081最下層埋土の堆積が始まる時期である。SD081の開削時期については1期の土坑（SK185）を切っていることから、それ以前ではない。他の溝はまだ掘られていない。

3期（Fig.166－2）

古段階においてSD081が人為的に埋められる。その後ほとんど間を置かずSD083が掘られたものと考えられ、新段階には下層埋土の堆積が始まっている。また、SD059の埋没開始も3期新段階～4期初頭に位置づけられる。

4期（Fig.167－2）

SD059・083は継続して浚渫や小規模な掘り直しが行われ、機能している。新たにSD002が掘削されることが推定されるが、002は比較的短期間で埋没したと思われる。

5期（Fig.167－3）

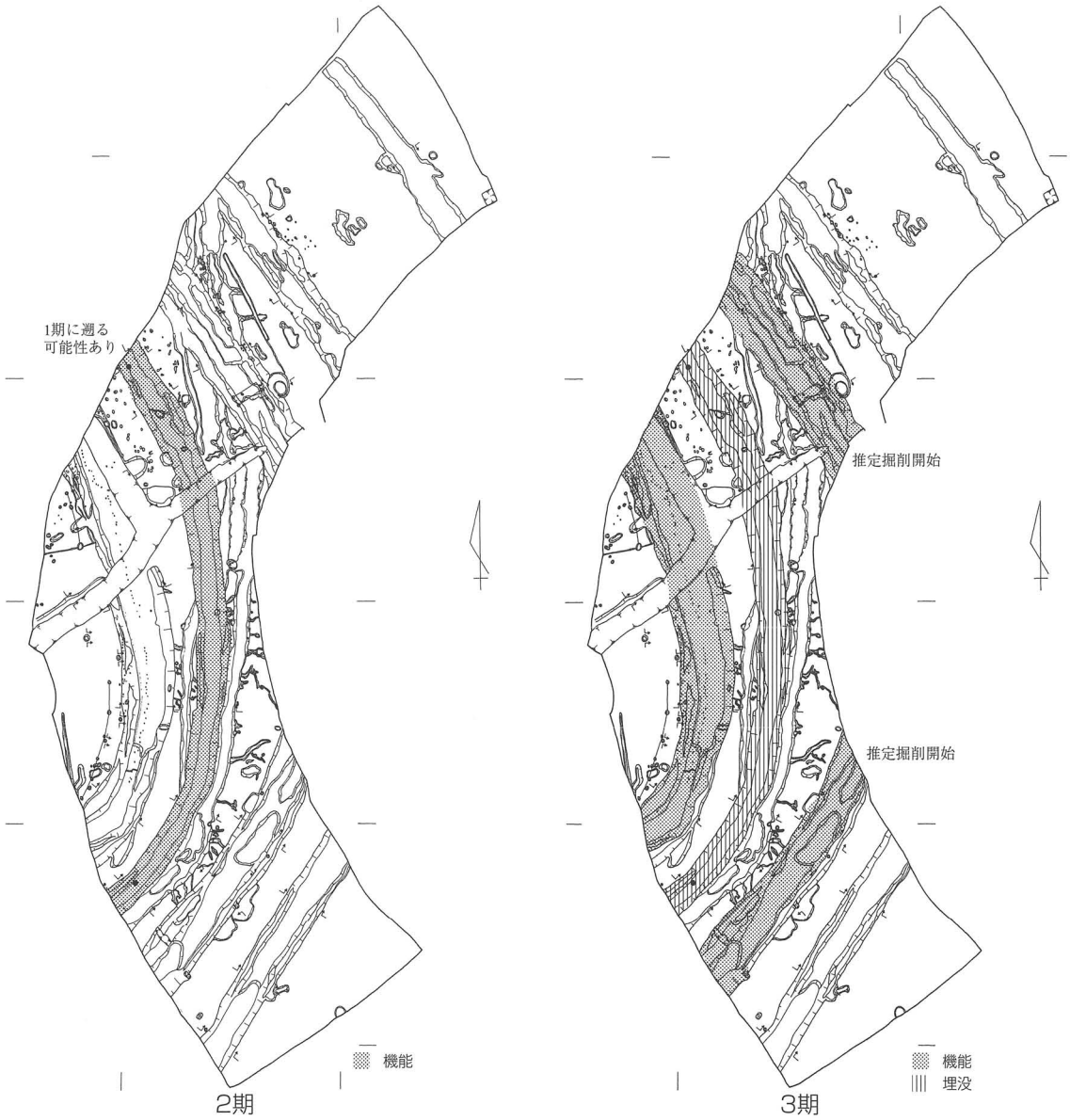


Fig.168　環濠変遷図（1）

SD059・083において掘り直しが行われ、溝幅が縮小しながら維持される。最終的には5期のうちに大量の遺物を伴って人為的に埋め戻される。

以上が中の池遺跡9次調査における環濠の変遷である。これに加え、既往の調査をふまえて遺構の変遷を概観すると、8次調査で検出した、最内に位置する断面「V」字状を呈する環濠（SD031）は1期以前に掘削され、1期～2期に埋没する[5]。9次調査SD081は8次調査SD031とある時期共存していた可能性がある。8次調査SD031は人為的に埋められるが、その後若干時間をおいて9次調査SD081も埋められ、その直後にSD059・083が掘られる。このプロセスを整理すると、基本的には8次調査SD031の内部空間が外側へと拡張し、3期には大規模な改変を伴ってSD083と059という内濠外濠のセットができあがるといえる。その後4期には新たに外側に溝SD002を設けるが、この段階でSD059・083は浚渫が行われているものの埋没が進み、水をたたえた状況ではなくなっていると考える。そしてSD002は短期間で埋没し、5期にはSD059・083において掘り直しが行われるものの、溝群の全てが埋め戻される。このように、中の池遺跡における環濠は、同時期に全ての溝が並存したのではなく、複数時期に渡る溝が、それぞれ異なった環境で掘削・機能（維持）・再掘削・廃絶したものであることが判明した。

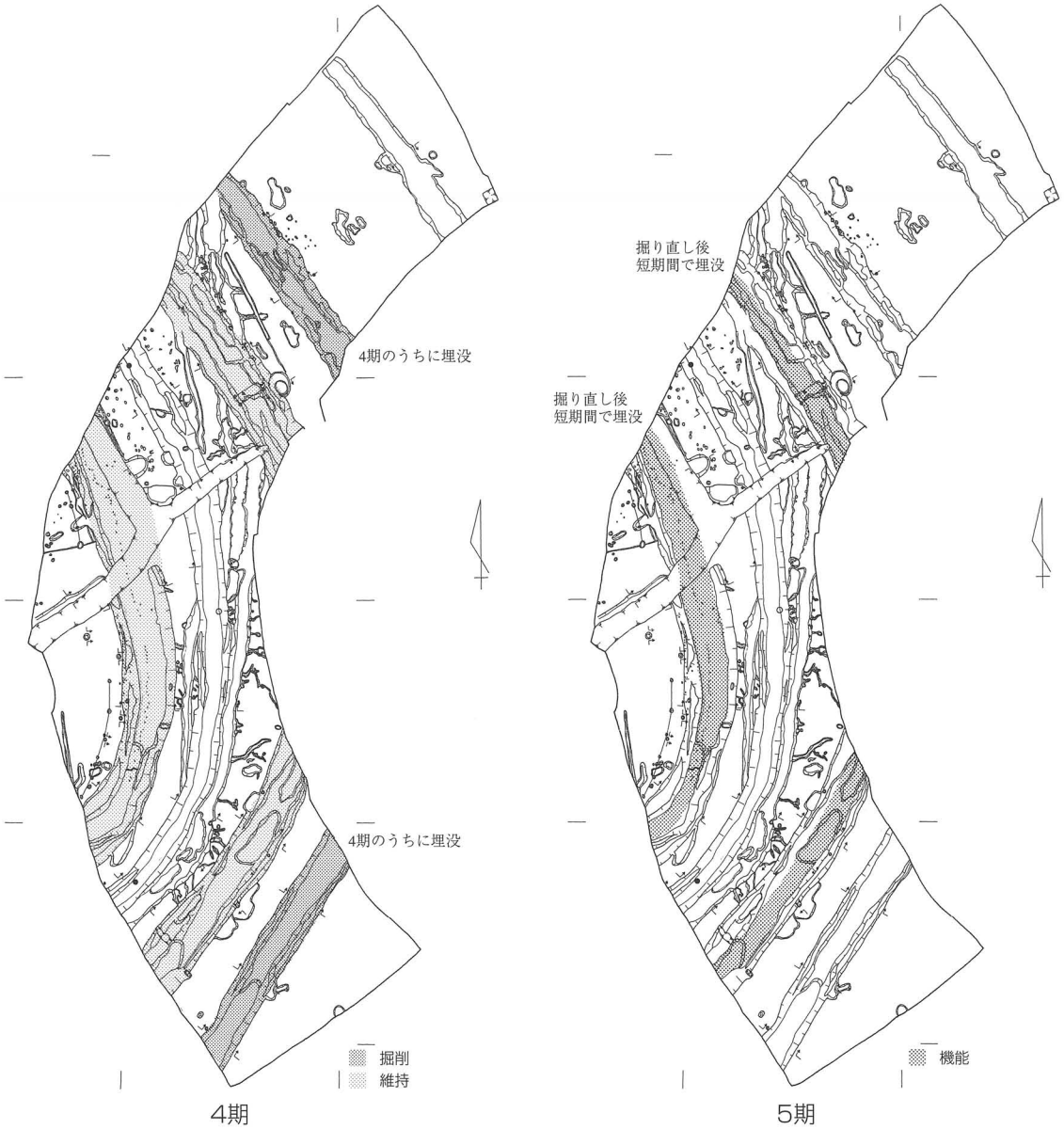


Fig.169　環濠変遷図（2）

註

(1) 編年研究は長い研究史を持つが、90年代以降の研究として以下のものがある。本稿では主に森下編年を採用した。

真鍋昌宏　2000「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年　四国編』菅原康夫・梅木謙一編　木耳社

宮崎哲治　1995「香川における弥生前期土器の様相」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』III　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

森下英治　1998「龍川五条遺跡出土前期弥生土器の編年」『龍川五条遺跡II　飯野東分山崎南遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊　香川県教育委員会ほか

乗松真也・森下英治・信里芳紀　2000「讃岐地方における弥生土器の基準資料III－前期後半～中期前葉の土器を中心として－」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』VIII　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

(2) 瀬戸内地域における地域性発現の問題については、吉田 広氏や秋山浩三氏の研究に詳しい。なかでも吉田氏はいわゆる瀬戸内型甕を構成する貼付口縁・多条沈線・外面ミガキについて、それぞれの属性が互いに独立して作用している可能性を指摘されているが（吉田2004）、沈線多条化と外面ミガキが連動しない状況や、如意状口縁甕と貼付口縁甕の比率がある数値で安定化するという本稿での分析はそれを裏付けるのではなかろうか。

秋山浩三　1992「弥生前期土器－遠賀川式土器の地域色と吉備」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社

吉田 広　2000「瀬戸内地域における遠賀川式土器の解体」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会

2002「無頸壷について」『犬飼徹夫先生古希記念論集　四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古希記念論文集刊行会

2004「四国における地域型甕の成立と展開－瀬戸内型甕を中心に－」『古代文化』第56巻第4号

(3) 森下・信里・乗松註1文献。これらの遺物は伊予方面の影響下で成立した可能性もあり、直接的系譜を考えることは難しい。しかし、遠賀川式の解体過程に讃岐においてこの形態の壷が独自に発生し、展開している可能性もまた否定できない。

(4) 森 格也1997『鴨部・川田遺跡』I　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

(5) なお、前回中の池遺跡8次調査報告書において肉厚の貼り付け口縁を有する甕を通常の逆「L」字状甕の先行形態とみなし、これをごく少量含む遺物群を前期IIaに含めて遺構の時期を提示した。逆「L」字状口縁の甕出現を指標として時期区分を行うとするならば、あるいは前期IIｂ期の中の時期差と考えるのが適当とも考えられる。いずれにせよ、逆「L」字状口縁を持つ甕の量比は8次調査SD031が圧倒的に少なく、他の器種の型式も古相を示していることは事実である。

第2節　環濠に関する所見

前節でも述べたとおり、今回の調査の大きな意義は環濠の形成・変遷について多くの資料を得たことである。本節では、さらに環濠集落研究における重要な注目点である環濠の機能と土塁の問題について、調査の所見を整理してみる。

第1項　環濠の機能について

まず環濠の機能についてであるが、これについてはすでに先学により様々な解釈が行われている。大きく分けると、戦闘行為などを伴った防御施設や除湿、動物などからの防御といった何らかの実質的機能を有したものとする意見[(1)(2)(3)]と、外界との精神的境界の明示や地域社会における階層関係明示のモニュメント、大陸から稲作に伴って伝来した農業集落の基本的装置といった抽象的・概念的なものであるという意見[(4)(5)(6)]の二つに分けられる。おそらく環濠の機能は単一の論理だけではなく、複数の目的・機能を有していたと考えられる。ここでは環濠埋土の観察から得られる環濠機能についての所見を整理する。

まず環濠の掘削当初の環境について、断面観察から得られた情報を整理する。環濠内底部の堆積物の特徴は以下の通りである。

・構成物質は粘土・シルトを中心とし、ラミナおよび級化構造がみられる。
・砂礫で構成される薄層は見られない。
・最下層の生物・人為・植物擾乱は顕著でない。

この堆積物の状況からは、環濠が当初は水を湛えたものであったことを示すが、激しい流水の痕跡などは見られず、基幹水路として機能していた可能性は低い。しかし完全な滞水状況ではなく、ラミナや級化構造の存在から緩やかな水の入れ替わりが存在したことが指摘でき、水が供給される部分が環濠のどこかに存在した可能性がある。

以上の想定を補強すべく、第11次調査においてSD083の延長にあたる溝の最下層から不撹乱土壌サンプルを採取、これを厚さ1cmに削り、軟X線で撮影した（Fig.170・171）。これを観察すると、ベース土直上より肉眼観察でグラデーションと見ていたものが、粒子の大きいものと細かいものの互層であることがわかる。この状況は、黒色粘土という土層が、複数のイベントで形成されたユニットの集合体であることを意味する。また、これらのユニットはいずれも級化もしくは逆級化を示しており、一定量の水が断続的に供給される状況にあったことを示す。そして黒色粘土と暗灰色粘土境界付近からは多くの植物根茎が貫入しており、黒色粘土堆積最終段階には植物が生成する環境になっていたといえる。また、土層観察・遺物の分析で浚渫の存在を強く指摘していたが、写真右上の部分は土層が細かく切断され、角礫塊状の状態で存在している。擾乱の規模などから、人間の行為に伴うものと考える。また、中央付近は土層が寸断されており、微小断層や角礫状に裁断されたブロックが存在する変形構造が見られる。おそらく地震による変形構造であると思われる。[(9)]

さらに、自然科学分析の成果をみると、いずれの溝のサンプルも最下層は一定量の流水性起源の珪藻が存在し、中層からは滞水性の珪藻が増加、上層からは珪藻そのものの出土が少なくなる傾向があり、結論としていずれの溝も最下層堆積時は流水の影響のあるやや不安定な滞水環境であったという、考古学的検討と一致する結果が得られている。

以上のことから、中の池遺跡の溝はいずれも掘削当初は流水の影響のある不安定な滞水状況を示していたことになる。以上の条件を作り出すための水の供給源として大きな要素となるのが本文中でも指摘した湧水である。弥生時代の湧水レベルが現代とどれほど違っていたかについては検討がないが、海水面の変動を考えるとそれほど大きな差はなかったものと考える。すでに指摘している通り、中の池遺跡の環濠は溝底に窪みを掘り込み、意図的に湧水を確保している。また、寄生虫分析の結果、寄生虫卵は見られず、環濠は比較的清潔に保たれていたようである。さらに、2002年に、第11次調査として今回の調査地から200mほど東で調査を行ったが、この調査区は微高地で湧水が一切無いにもかかわらず弥生時代の遺構が一切見られなかった。これらの状況から、集落建設の際の占地において、意図的に地下湧水の影響を受け易い場所を選んでいた可能性すらうかがえる。以上のことより、当遺跡において必要以上に多くの溝をめぐらせる理由として、居住域の乾燥化と湧水の利用があったものと考える。

その後の環濠の推移であるが、断面観察からは浚渫・掘り直しといった維持管理が行われていたことが確認でき、前期末から中期初頭には掘り直しが行われている。しかしこの段階では湧水利用の痕跡が見られず、溝が乾燥化していたものと思われ、珪藻分析の結果もこれを裏付ける。また、寄生虫卵は下層同様みられず、環濠が埋め戻される最終段階に至るまで清潔に保たれていたものと考えられる。掘り直し後の溝は幅も狭く、深さも浅いことから、防御としての機能は与えがたく、やはり環濠そのものが象徴的な意味を持っていたといえそうである。

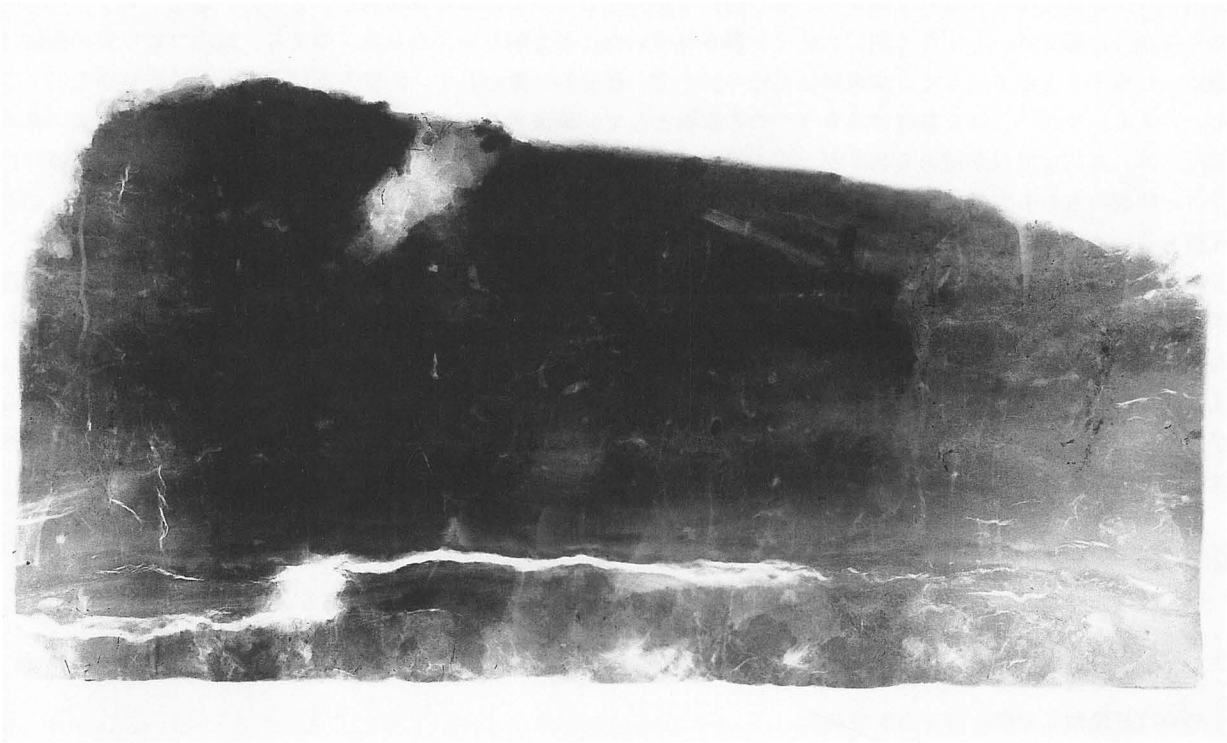


Fig.170　第11次調査SD083延長部分最下層不撹乱土壌軟Ｘ線写真（S=1/5）

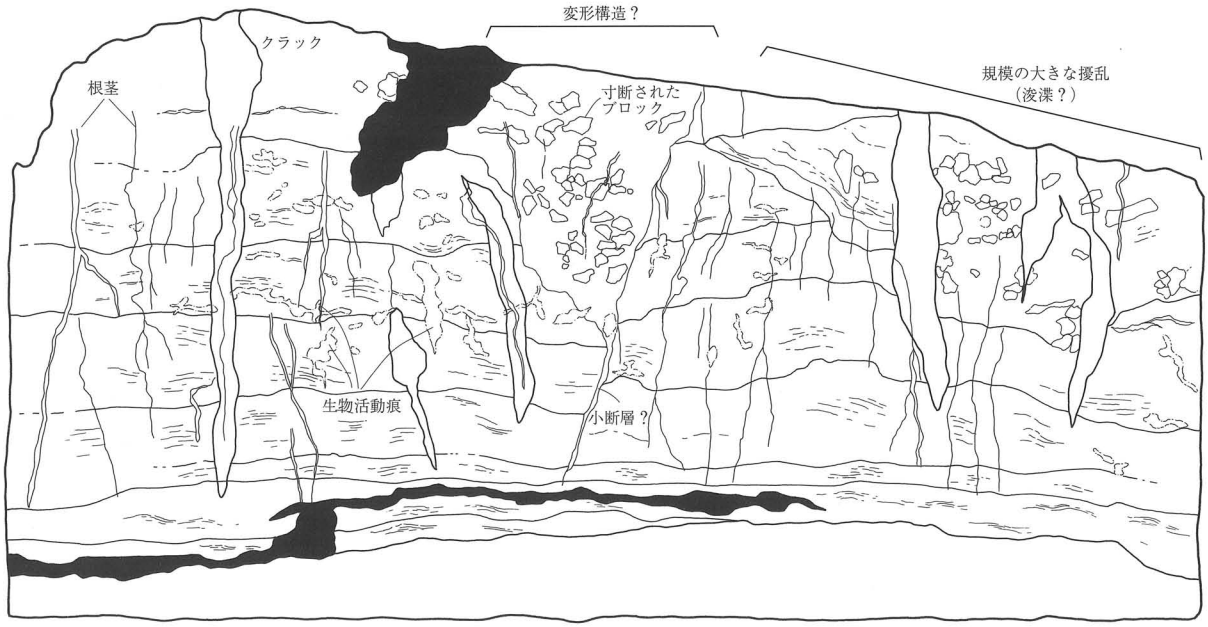


Fig.171　第11次調査SD083延長部分最下層不撹乱土壌資料軟Ｘ線写真構造模式図（S=1/5）

第2項　土塁の存在について

次に環濠に付随する施設についてであるが、これについては第8次調査の報告書において土塁と柵列について言及した。第8次調査ではSD031が地山ブロックで人為的に埋められていることから土塁の存在を指摘したが、今回の調査でSD081においても同様に地山ブロックで埋められていることが判明した。しかし、縦断面を観察したところ、地山ブロックは全周するものではなく、部分的にしか存在していないことが判明し、さらに、地山ブロックで埋められなかった部分は、しばらく開口状態で放置されていたことも明らかになった。つまり、地山ブロックの起源は環濠に付随する土塁ではなく、環濠掘削当時の排土で、部分的に置かれていた置き土に過ぎない可能性が生じてきたといえる。また、これを裏付けるもう一つの根拠として、環濠最終埋土に関する解釈をあげたい。各環濠の最終段階には人為的な埋没が認められるが、この埋土は土壌化の著しい、土器の砕片を多量に含む土である。土器片には古い時期のものも大量に含まれ、例えば先述のFig.97－186の土錘のように、下層遺物と接合関係を有するものが複数ある。この前提条件のもとこの土の起源として最も合理的に説明できるのは、これが溝浚渫時の泥を起源としているというものである。これが成り立つとすれば、埋め戻しに際して土塁に手をつけず、周囲に積んであった浚渫時の泥を利用しているということになる。溝を埋め戻すという行為は、集落の完全な終焉を明示する象徴的な行為（例えば中世城館における自焼のような）、もしくは集落域の耕地化のような新たな土地利用を見込んだ土地改変に伴う行為である。その場合、溝のみを埋め、土塁を残すことは考えにくい。仮説の上に仮説を積むことになるが、環濠を埋め立てるにあたり、浚渫土を使い土塁に一切手をつけないという状況は想定しがたく、むしろ土塁そのものがはじめから存在していなかった可能性が考えられよう。

第3項　まとめ

以上、今回の調査で判明した環濠に関する所見をまとめてみると、以下に集約される。

・環濠掘削当初は流水影響のある不安定な滞水状態であり、上層へ行くほど乾燥化する。
・環濠内は比較的清浄に保たれていた。
・環濠は乾燥化した後も掘りなおされる。
・以上の条件から帰結される環濠の機能としては、土地の乾燥化と湧水の利用という実利的機能、区画の明示といった象徴的機能の二側面が想定できる。
・環濠を埋める地山ブロックは土塁ではなく置き土である可能性が高い。
・環濠は溝浚渫土でも埋められると考えられる。
・以上の仮定から環濠に土塁が伴っていなかった可能性が高い。

いまだ完全な論証がなされたとは思わないが、環濠集落の多様な一面を提示できたと考える。今後の調査における検証を期待したい。

註

(1) 都出比呂志　1983「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』29巻4号
(2) 佐原 真　1987『大系日本の歴史』1　小学館
(3) 春成秀爾　1990『弥生時代の始まり』東京大学出版会
(4) 武末純一　1990「北部九州の環溝集落」『乙益重隆先生古希記念　九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会
(5) 伊藤 実　1991「瀬戸内の環濠集落と高地性集落」『古文化論叢　児嶋隆人先生喜寿記念論集』児嶋隆人先生喜寿記念事業会
(6) 吉留秀敏　1994「環濠集落の成立とその背景」『古文化談叢』第33集　九州古文化研究会
(7) 地震痕跡については松田順一郎氏の考察を手がかりとした。
松田順一郎　1995「新家遺跡発掘調査地（その6）における泥質堆積物の地震による変形構造」『新家遺跡　第6次発掘調査報告書』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第2集　大阪府文化財調査研究センター　ほか

第3節　中の池遺跡における石器組成とその特徴

第9次中の池遺跡の調査で総点数5033点出土している。石器組成については（Tab.8）にまとめた。弥生時代の石器の組成は近年の報告書で精力的に行われ、地域間での比較が可能なほどデータの蓄積がなされてきている。遺跡間の組成の違いは集団の個性を表すとともに、地域間の傾向を示しているといえる(1)。

本論では中の池遺跡における石器組成の特徴を取り上げ、中の池遺跡の集団の理解を試みたい。

第1項　各遺構の石器組成の特徴

＜SD002・134＞

石器の出土量は少なく両溝を合わせても6.5％で、石器組成の器種のバリエーションも少ない。これは溝が比較的短期間に埋没したためと考えられる。SD134の黒色粘土のA区にやや集中的な出土が認められるが、それ以外に集中して出土する層や地区はない。

＜SD059・167＞

石器組成全体に占める割合は両溝合わせて20.3％で器種も多様である。こうした傾向は、溝の存続時間が比較的長かったためと考えられる。SD167の出土量がSD059に比べ多いのは黒褐色粘質土のB区に集中的に石器が投棄されていたためである。

＜SD081＞

石器の出土が一定量みられ、石器組成全体に占める割合は13.2％で器種のバリエーションも豊富であるが、溝の

	遺構名	SD002	SD059	SD081	SD083	SD134	SD167	SD131	水田域	SK185	その他の遺構	合計	石器組成中に占める割合
狩猟・武器類	打製石鏃（未製品）	3(1)	2	12(5)	37(10)	4(2)	11(3)	2(2)	1		4(1)	76(24)	12.90%
	（平基式）			5	7	1	2				2		
	（凹基式）	2	2	1	12	1	5		1		1		
	（凸基式）				4		2						
	（有茎式）			1									
工具	石錐(未製品を含む)			3	18(3)		3				1	25	4.24%
	石匙(未製品を含む)	1	1	1(1)	2		5(1)					10	1.70%
	スクレイパー	20	32	66	111	10	29	2	1	2	2	275	46.69%
	石小刀		1									1	0.17%
	ノッチ				2		1					3	0.51%
石斧　（加工斧）	柱状片刃石斧		1		13		1					15	2.55%
	扁平片刃石斧	2		1	5		2					10	1.70%
	小型方柱状石斧				2							2	0.34%
	小型円柱状石斧			1	1							2	0.34%
（伐採斧）	磨製石斧(太型蛤刃石斧)	1		3	5(1)						1	10	1.70%
農具	磨製石包丁(未製品を含む)	4	1	2(1)	14	2	6		1		1	31	5.26%
	打製石包丁	2	2	3	16	3	8		4		1	38	6.45%
	磨製石鎌				1							1	0.17%
	打製石鎌				1							1	0.17%
漁撈具	石錘						1					1	0.17%
調理具	石皿・磨石	2	4	4	11	3	1					25	4.24%
	くぼみ石	3	7	6	37	2	4	1				60	10.19%
紡織具	紡錘車				1							1	0.17%
その他	環状石斧								1			1	0.17%
	不明石製品			1								1	0.17%
小計		38	51	103	275	24	72	5	9	2	10	589	
石器組成中に占める割合		6.45%	8.66%	17.49%	46.69%	4.07%	12.22%	0.85%	1.53%	0.34%	0.17%		100.00%

	遺構名	SD002	SD059	SD081	SD083	SD134	SD167	SD131	水田域	SK185	その他の遺構	合計	石器製作具中に占める割合
石器製作具	石核	15	12	50	128	8	20	1	2		1	237	5.33%
	楔形石器	10	18	47	216	6	60	1	3		3	364	8.19%
	剥片類	82	194	403	2116	116	527	11	21	33	21	3524	79.30%
	(板状剥片)	(8)	(17)	(38)	(80)	(4)	(8)	(1)	(1)			(157)	
	(サヌカイト以外の剥片)	(1)	(2)	(7)	(14)	(2)		(1)	(1)	(1)	(2)	(5)	
	二次加工ある剥片	8	23	48	116	12	29	1	3	2	7	249	5.60%
	敲き石		5	4	5	4	1	1				20	0.45%
	台石				1							1	0.02%
	砥石	2	7	10	22	3	1		1	1	2	49	1.10%
小計		117	259	562	488	149	638	15	30	36	34	4444	
石器製作具中に占める割合		2.63%	5.83%	12.65%	58.60%	3.35%	14.36%	0.34%	0.68%	0.81%	0.77%		100.00%

総合計		155	310	665	2879	173	710	20	39	38	44	5033	
石器組成全体に占める割合		3.08%	6.16%	13.21%	57.20%	3.44%	14.11%	0.40%	0.77%	0.76%	0.87%		100.00%

Tab.8　遺構別石器組成表

存続期間の割に石器の出土量が少ない傾向にある。これは石器を最も包含していると考えられる上層を、古墳時代の溝SD082・SD084・SD085が切っているためと考えられる。明黄褐色粘土のD区に集中して出土しているほかは、石器が集中して出土する層や地区はない。

＜SD083＞

石器および石器類の出土量が最も多く、また器種も多様で、大陸系磨製石器の器種が磨製石鏃を除きすべて揃う。特に暗褐色粘質土のG区と暗褐色砂質土のA区に集中的に石器類の投棄がみられる。SD083の暗褐色粘質土は人為的に埋め戻されたと想定されるが、その際に完形の遺物も含めて廃棄されたとものと考えられる。

＜SD131＞

石器の出土は少なく、石器組成に占める割合は0.4%で石器の器種も少ない。これは溝の堆積が浅く、また自然堆積であることに起因すると考えられる。

＜水田域＞

水田域出土の石器は石器組成全体の1%にも満たない。打製石包丁が他の遺構に比べて高率で出土しているほかは、石核や剥片類も出土しているものの、各グリットにまばらにみられる程度で、水田域での石器生産を示すほどのものではない。水田域出土の石器で特筆できるのは、磨製石包丁と砥石がセットで出土していることである。磨製石包丁の使用の際には研ぎ直しが頻繁に行われていたことを示しているといえる。また環状石斧も水田域から出土しており、形態から機能が推定しにくい器種であるが、その使用方法を考える上で出土地点が重要な要素となりうると考えられる。

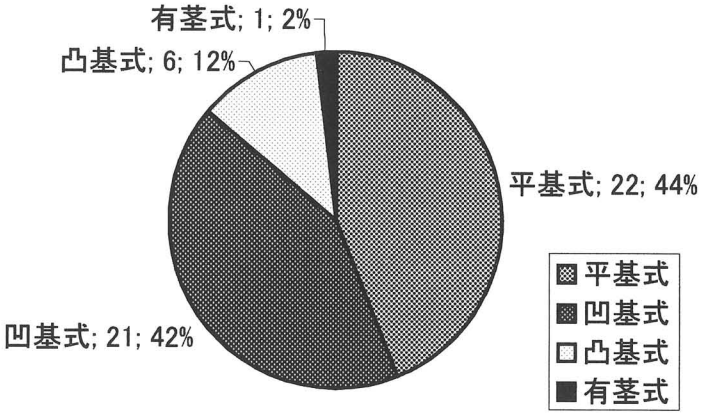


Fig.172　石鏃形態の比率

＜SK185＞

土器との共伴関係から一括性の高い資料であると考えられる。スクレイパーと剥片類、砥石が出土しているが、石核や敲き石の出土はない。土器を廃棄する際に石器や剥片類もまとめて廃棄したものと考えられる。

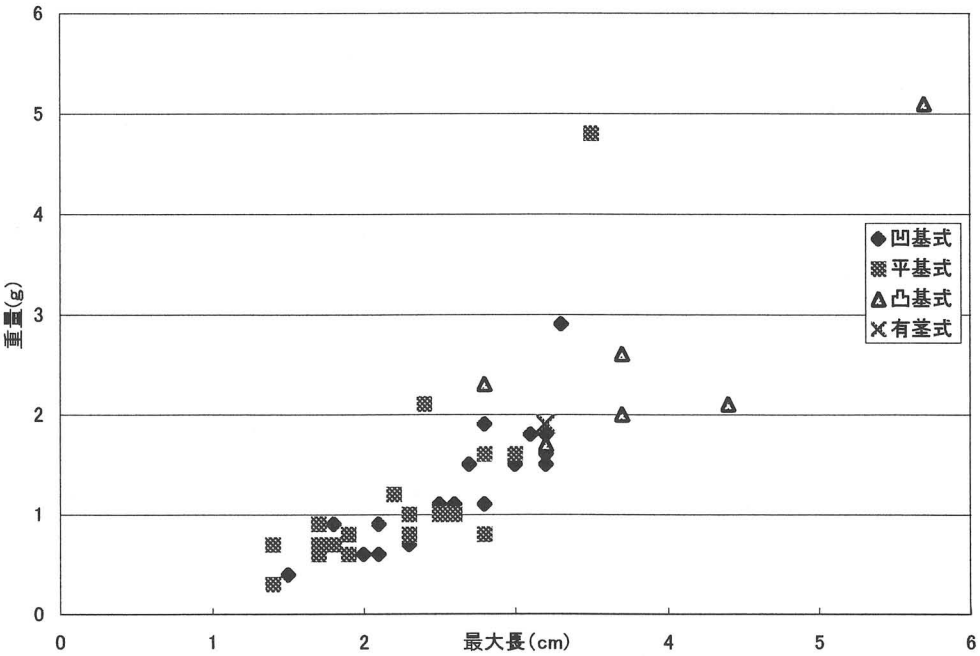


Fig.173　石鏃法量分布図

第2項　狩猟・武器類

第8次調査では層灰岩製の磨製石剣が出土しているが[2]、第9次調査では狩猟具武

器に相当する石器は石鏃のみのである。石鏃の石材はすべてサヌカイトで、他の石材は使用されていない。磨製石包丁に転用されたと考えられる磨製石剣あるいは石戈が出土しているが、完形あるいは形態がわかる状態で石剣や石戈、投弾等は出土していない。

＜石鏃＞

石鏃は52点出土している。形態が欠損で不明のものを除いた形態別の割合は（Fig.172）に示した。平基式と凹基式で43点、全体の86％を占め、平基式と凹基式の割合はほぼ同数である。凸基式が6点で全体の12％、有茎式が1点、全体の2％である。有茎式の石鏃（Fig78－219）は、茎部は鏃身の下半部の両側縁に深く大きい剥離を一回施した後、さらに方向を変化させて調整を加えることで刃縁と茎部の境界点を明瞭に作り出しており、松木武彦氏のA技法とC技法の折衷型のような技法である[3]。

石鏃の全長は2.0cm未満のものが全体の50％を占め、3.0cm以上の大型の石鏃も27％確認できる。重量は1.0g未満のものが24点・44％で主体を占め、2.0gを超える大型の石鏃も10点・23％を占める。一部を欠損しているものもこの分析内に含めているため、復元を行うと大型石鏃の割合はもう少し増えると考えられるため、中の池遺跡の石鏃は1.0ｇ前後の石鏃と2.0gを超える大型の石鏃とにほぼ二分される傾向にある。また刃部を鋸歯状に調整したものも全体の15％を占める。

第3項　工具

工具類は石錐、石匙、スクレイパー、石小刀、ノッチ、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、小型方柱状石斧、小型円柱状石斧、磨製石斧、太型蛤刃石斧が出土している。

＜スクレイパー＞

石器組成中に占めるスクレイパーの割合は高く47％を占めている。石器組成のほぼ半分を占めており、中の池遺跡の石器製作の中心はスクレイパーの製作であったといえる。石材はすべてサヌカイトで、素材となっている剥片類は多様な形態を示しており、特定の剥片を意識的に剥離・選択した様子はない。刃部は剥片の端部に両面調整あるいは片面調整によって作り出されており、体部に素材面を残すことが多い傾向にある。背部は自然面や折れ面のほかに、刃潰し加工が施されることが多い。

香川県の弥生時代前期の遺跡の石器組成中でスクレイパーの割合が高いことはすでに指摘されており、坂出市下川津遺跡の報告ではスクレイパーが万能の器具として多用されたためこのような多さを示すと理解されている[4]。中の池遺跡においてもスクレイパーが石器組成中に占める割合は非常に高率であることから、その傾向によく符合している。しかし万能器具としたスクレイパーの中に打製石包丁にみられるような光沢面のある例は確認できていない。これは打製石包丁のような大型の

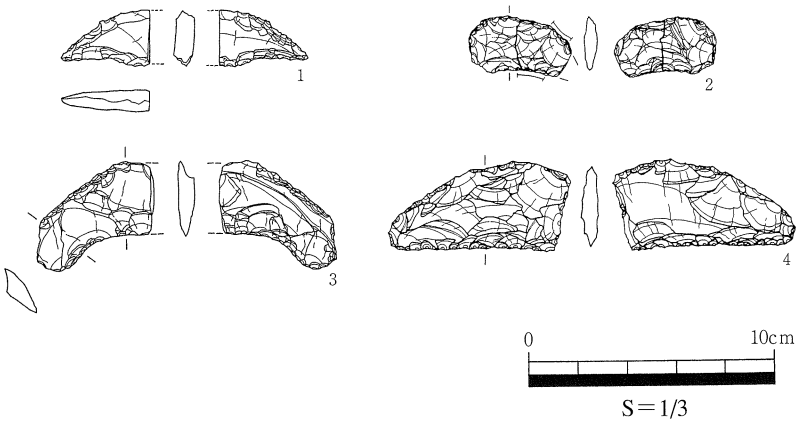


Fig.174　香川県下出土の石小刀

図版番号	遺跡名	報告書資料番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	帰属時期	出土地点	報告書名	副題
1	中の池遺跡	52－97	2.2	(3.7)	0.9	(7.0)	サヌカイト	中期初頭	SD059 黄褐色細砂	中の池遺跡 第9・10次調査	総合運動公園整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書
2	下川津遺跡	560-15	4.2	2.4	0.5	22.7	サヌカイト	前期前半	SDI02 K17区	下川津遺跡	瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告VII
3	鴨部・川田遺跡	225－858	(4.7)	4.4	0.9	(14.4)	サヌカイト	前期後半	C区 SD01出土	鴨部・川田遺跡I	高松東道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第7冊
4	大浦浜遺跡	148－19	3.6	7.4	0.7	23.1	サヌカイト	前期	K-36	大浦浜遺跡	瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告V

Tab.9　香川県下出土の石小刀

スクレイパー以外は収穫具として用いられていなかったか、あるいは用いられるとしても光沢面が付着するほどの使用がなされていなかったためと考えられる。

＜石小刀＞

石小刀は弥生時代前期から後期初頭にかけて畿内を中心に瀬戸内と東海地方に分布する「両面調整尖頭削器のうち外湾する外側の刃部と、内湾もしくは直線形の内側の刃部を対辺にもつ細長い石器である」と定義されている[5]。石材はサヌカイトを用いるが、例外的に愛知県清洲町朝日遺跡では下呂石製の石小刀が1点出土している。石小刀の形態は多様であるが、個体による差はあれども形態をもとに、全体に弧を描くI類、先端近くで折れ曲がるII類、内刃側はほぼ直線的であるが、外刃側が弧を描くIII類に分類できる[6]。さらに調整から、特別な調整を施さないa類、内刃側に突起を作り出すb類、刃部と基部の調整が異なるc類に分類できる。このうちI類については突起を作り出すb類は確認できない。

Ia 類…全体が弧を描くもの。

Ic 類…全体が弧を描くもので、刃部と基部の調整が異なるもの。

IIa 類…先端近くで折れ曲がるもの。

IIb 類…先端近くで折れ曲がるもので、内刃側に突起があるもの。

IIc 類…先端近くで折れ曲がるもので、刃部と基部の調整が異なるもの。

IIIa 類…内刃側はほぼ直線的であるが、外刃側が弧を描くもの。

IIIb 類…内陣側はほぼ直線的であるが、外刃側が弧を描くもので、突起があるもの。

IIIc 類…内陣側はほぼ直線的であるが、外刃側が弧を描くもので、刃部と基部の調整が異なるもの。

香川県下における石小刀の出土例は少なく（Fig.174、Tab.9）、時期は弥生時代前期から中期初頭に集中している。畿内で石小刀の出土数の多い中期中葉から後葉にかけては確認できない。香川県下出土の石小刀を個別にみていくと、中の池遺跡出土例は、内刃の形態は直線状で、刃部先端にかけて両面調整が施されている。素材面を残し、調製は刃部先端にかけて丁寧になっている。基部は折損するが形態分類のIIIc類に相当するものと考えられる。下川津遺跡出土例は両面調整が施され、素材面は確認できない。刃部と基部の境界はなく、IIIa類に属する。他の遺跡で出土している石小刀にくらべ小型で薄形である。鴨部・川田遺跡出土例は先端近くで折れ曲がる形態で、素材面を大きく残し、刃部は両面調整されている。基部付近の調整は欠損しているため不明であるが、残存している基部の調整は刃部とは異なる大きな剥離面である。IIc類に属する。大浦浜遺跡出土例は報告書ではスクレイパーと報告されているが、完全に両面調整が施されており、刃部と基部の調整の違いはなく、IIIa類に属する。畿内においても弥生時代中期に同様の形態の石小刀が多くみられる。

弥生時代中期において石小刀が他地域に比べて卓越する畿内においても弥生時代前期～中期初頭の例は稀である（Fig.175、Tab.10）。大阪府東大阪市友井東遺跡出土例はやや内湾する内刃に突起を有する。また刃部先端と端部を欠損する。両側側辺から刃部は鋸歯状を呈する。小突起と相対する刃部の一部は欠損するが、基部よりでは鋸歯縁は認められず、基部は損部までの約2cmの縁は鈍くなっている。刃部先端縁は両辺とも僅かに摩滅している。分類のIIIb・c類に属する。大阪府八尾市久宝寺南遺跡出土例は両面とも稜に至る押圧剥離により断面形は扁平な菱形を呈している。上平面の基部に素材面を残しており、縦

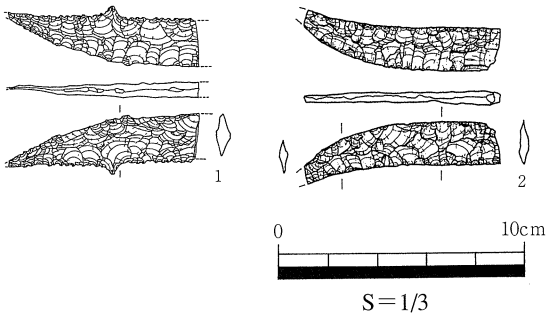


Fig.175　畿内出土の石小刀（前期資料）

図版番号	遺跡名	報告書資料番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	帰属時期	出土地点	報告書名	副題
1	友井東遺跡	8－S.2	(7.8)	2.5	0.7	(9.6)	サヌカイト	前期後半	前期溝	友井東(その2)	近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
2	久宝寺南遺跡	1－S5	(7.9)	1.77	0.56	(9.0)	サヌカイト	前期	弥生時代前期遺構面上層(VI層)	久宝寺南(その1)	近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

Tab.10　畿内出土の石小刀（前期資料）

長剥片を素材としていることが伺える。基部の両側縁には僅かながら磨り落としが認められる。分類のIIIc類に属する。

香川県下出土の石小刀の傾向として体部に素材面を残して調整されていることが多いが、畿内では完全に両面調整される傾向にある。こうした要因は金山産サヌカイトが石理に沿って扁平に割れ、断面が六角形になるという性質に起因し、二上山産サヌカイトを用いたときのように両面調整で断面を菱形に調整することが困難であるためと考えられる。そのため畿内で出土するような精巧な調整を施したものがない。こうした傾向は打製石剣の調整に認められる傾向と一致しており、金山産サヌカイトを用いた石小刀が二上山産サヌカイトを用いた石小刀とは別器種の石器であるということにはならないといえる。

石小刀は弥生時代になって突如として成立するが、縄文時代の石器にその系譜をたどることはできていない。弥生時代の石器組成中では形態的によく似た磨製石鎌や打製石鎌が考えられるが、法量の違いや背部を調整で作り出すなど、両刃で小形の石小刀とは異なる点が多いため胆略的に結びつけることは困難である。しかし香川県下で石小刀が出土する遺跡では磨製石鎌や打製石鎌が出土しており、組成の点で一定の傾向がみられる。今後、弥生時代前期に属する資料が蓄積されることでその成立を明らかにしていく必要がある。

＜石斧＞

石斧は伐採斧と加工斧の割合は、伐採斧1.7％、加工斧である扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、小型方柱状石斧、小形円柱状石斧を合わせて4.8％である。伐採斧のうち太型蛤刃石斧の割合は極めて低く、1点・0.17％で、他の伐採斧も小形のものが多い。石材は太型蛤刃石斧がヒン岩、その他の磨製石斧は結晶片岩、安山岩である。加工斧は結晶片岩を主体とし、流紋岩と凝灰岩、安山岩系の岩石が含まれている。石斧の未製品は出土していない。また破損品が多く、刃部には使用によると考えられる潰れがみられる。

石斧が石器組成全体に占める割合は伐採斧・加工斧両方を合わせても一割にも満たず、木材の伐採・加工の重要度は遺跡内では相対的に低かったと考えられる。

第4項　農具

農具は磨製石包丁、打製石包丁、磨製石鎌、打製石鎌が出土している。打製石斧は出土していない。

＜石包丁＞

磨製石包丁と打製石包丁は31点と38点であり、若干打製石包丁が多い傾向にある。香川県下においては弥生時代前期後半から打製石包丁が定型化し、中期からは打製石包丁が収穫具の主体を占め、磨製石包丁はほとんど姿を消すが、中の池遺跡の資料は磨製から両抉の打製石包丁への過渡期的な様相を示しているといえる。

磨製石包丁の石材は安山岩と流紋岩、結晶片岩、粘板岩、シルト岩である。地元で産出される安山岩と流紋岩製のものと、搬入石材である結晶片岩製のものとの割合はほぼ半々である。磨製石包丁の形態は外湾刃半月形、杏仁形、長方形があり、長方形が主体を占めるが、多形式が併存する傾向を示す。石材と形態に相関関係はみられない。

流紋岩製磨製石包丁については未製品が出土しており（Fig108－276）、後に石器製作の項でも述べるが、遺跡内で磨製石包丁の素材となる安山岩・流紋岩・結晶片岩等の剥片類の出土数は少ないため、半製品状態で遺跡内に搬入されたと考えられる。

また転用の可能性が考えられる磨製石包丁と磨製石包丁未製品も出土している（Fig128－115、72－180）。特に（Fig128－115）の石包丁は石剣あるいは石戈からの転用が考えられ、石材も青色の片岩製で他の磨製石器の石材の様相とは明らかに異なっている。

打製石包丁の形態には、両抉の打製石包丁（I類）と片抉の打製石包丁（II類）、抉りのない打製石包丁（III類）がある。I類には最大長が8cm前後の小型の石包丁（Fig74－191、104－256）と10cm以上の石包丁がみられる。石材はサヌカイトを用い、調整は素材面を大きく残し、背部は背潰し加工を行うことが多いが、（Fig103－255）のように背部に研磨痕を有する例もある。刃部の調整は両面調整で、浅形細部調整のものと極浅細部調整のものがある。また（Fig104－257）のように刃部を鋸歯状に仕上げている例もある。形態・調整ともに多様であるが、形態による時期差は存在しない。多形式の並存は両抉の石包丁への移行段階の過渡期的な様相であると考えられる。

また光沢面を有する例も確認できる。光沢面については使用痕分析を行っておらず、肉眼観察であるが、すべて

Fig.176　香川県下出土の磨製石鎌

図版番号	遺跡名	報告書資料番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	帰属時期	出土地点	報告書名	副題
1	中の池遺跡	106－266	19.2	4.2	1.1	(27.6)	緑泥片岩	中期初頭	SD083 黒褐色粘質土	中の池遺跡 第9・10次調査	総合運動公園整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書
2	龍川五条遺跡	27－2516	(12.0)	4.1	0.9	(73.6)	緑泥片岩	前期中葉	SD49 最下層	龍川五条遺跡II・ 飯野東分山崎南遺跡	四国横断自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第29冊
3	龍川五条遺跡	192－824	(9.9)	4.6	1.3	(72.1)	結晶片岩	前期中葉 ～後葉	SD50	龍川五条遺跡I	四国横断自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第23冊
4	鴨部・川田遺跡	57－4336	15.6	3.6	1.0	88.5	結晶片岩	前期後葉	SD01 3区中央南 最下層	鴨部・川田遺跡III	高松東道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第10冊
5	鴨部・川田遺跡	296－1264	(11.3)	5.9	1.2	(83.4)	流紋岩	前期	C区 包含層	鴨部・川田遺跡I	高松東道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第7冊

Tab.11　香川県下出土の磨製石鎌

の打製石包丁に光沢面が確認できるわけではない。

＜石鎌＞

中の池遺跡出土の磨製石鎌は緑泥片岩素材で、大型の刃部直線型である。全面に丁寧な研磨が施され、柄への装着部と考えられる浅い抉りがある。刃部は抉り部から先端に向かって約9.8cmの間に設けられているが、先端部約2.2cm間には刃部は作り出されておらず、先端は使用の際の機能部ではなかったと考えられる。また光沢面は確認できない。打製石鎌はサヌカイト製で、背面体部に自然面を大きく残し、背部にも一部自然面が残る。背部は刃潰し加工が、刃部には両面調整が施されている。背部から腹面全体にかけて強い光沢面がみられる。

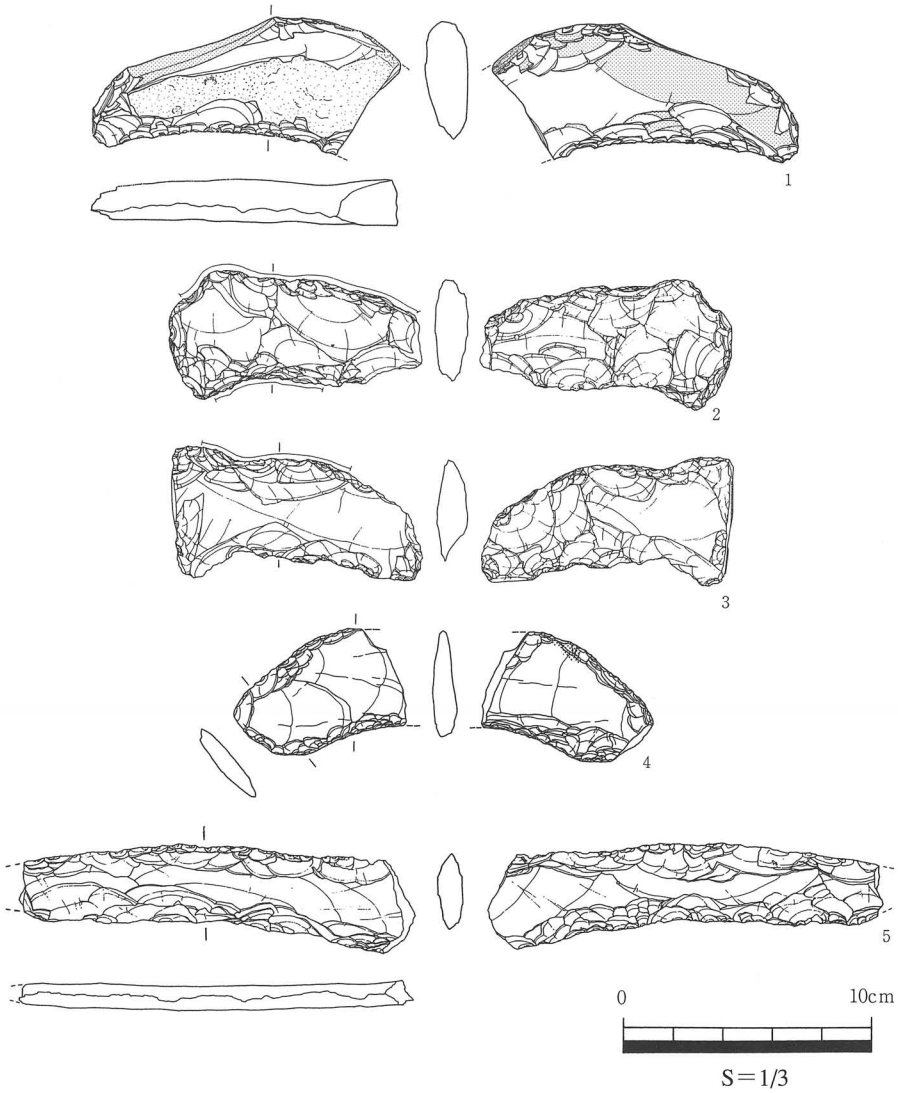


Fig.177　香川県下出土の打製石鎌

図版番号	遺跡名	報告書資料番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	帰属時期	出土地点	報告書名	副題
1	中の池遺跡	111－288	(12.3)	5.5	1.7	(130.5)	サヌカイト	弥生時代前期後半	SD083 黒灰色粘土	中の池遺跡 第9・10次調査	総合運動公園整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書
2	下川津遺跡	131－1	10.0	5.2	1.3	77.0	サヌカイト	弥生時代前期前半	キ6区、11層下	下川津遺跡	瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告
3	下川津遺跡	131－2	10.0	5.3	1.2	71.2	サヌカイト	弥生時代前期前半	オ12区、8H層	下川津遺跡	瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告
4	鴨部・川田遺跡	269－1094	(6.9)	5.1	0.9	(34.8)	サヌカイト	弥生時代前期後半	C区 SH05	鴨部・川田遺跡I	高松東道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第7冊
5	川津一ノ又遺跡	202－2238	(15.8)	3.7	1.1	(78.3)	サヌカイト	弥生時代中期中葉～後期初	中央部包含層 第1・2層	川津一ノ又遺跡	中小河川大東川改修事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

Tab.12　香川県下出土の打製石鎌

香川県下で出土している磨製石鎌と打製石鎌の集成を以下の表にまとめた（Fig.176・177、Tab.11・12）。磨製石鎌の出土は各遺跡1・2点ほどで、時期は前期中葉から中期初頭にかけてである。前期中葉が四国地域における磨製石鎌の出現期と考えられ、龍川五条遺跡出土例と田村遺跡群Loc.44で出土している磨製石鎌が相当する。前期の段階の磨製石鎌は全面研磨を行う例は稀で、部分研磨のものが多いという傾向にある。

打製石鎌も磨製石鎌と同様の傾向がみられ、各遺跡数点の出土である。時期は弥生時代前期前半から弥生後期初

頭である。打製石鎌は縄文時代後期からみられるが、縄文時代の打製石鎌は、15cm前後の中型と12～14cm前後の小型であり、これに対して弥生時代の磨製石鎌は20cm前後の大型のものが出現する。大型の磨製石鎌は縄文時代以来の打製石鎌の継承と大陸、特に朝鮮半島からの磨製石鎌の伝播の影響があると考えられている[7]。しかし弥生時代においても打製石鎌は小型と中型で占められている。こうした傾向は打製石器の素材であるサヌカイトを用いて20cm前後の製品を作ることが非常に困難であることと関連している。打製石剣では20cm前後の製品を確認できるが、打製石剣は武器としての機能のほか、いわゆる威信財的な要素をもっていたと考えられており、実用の農具である打製石鎌の大型品を製作する必要はなかったものと考えられる。

第５項　調理具

石皿と磨石、くぼみ石があり、ともに地元で産出する砂岩製である。石皿は硬質の砂岩製で、くぼみ石は軟質の砂岩を使用している。敲き石に分類したものの中にも軟質の砂岩製のものも含まれ、堅果類用の調理具であった可能性が考えられる。砂岩は遺跡の東側を流れる土器川と西側を流れる金倉川で採集が可能で、石器製作用の台石や砥石に用いられている大型の砂岩も同様に川原から採集されたと考えられる。

第6項　石器製作具

石器製作を示す資料として石核、楔形石器、剥片類、敲き石、台石、砥石が出土している。

＜打製石器＞

打製石器の石材はサヌカイトが組成のほぼ100％を占め、これにチャートがSD081とSD083で小型の石核が、包含層からチャートの剥片が各1点が出土しているのみである。組成の中で注目されるのは石核と楔形石器、剥片の出土点数である。石核と楔形石器、剥片の石器組成全体に占める割合は82.0％である。石器製作を示す敲き石や線状痕のある台石も出土しており、中の池遺跡で打製石器の製作が行われていたことは間違いない。石核と楔形石器の剥片の剥離状況を観察すると、ほとんどが両極打撃を多用することで不定形な小型の剥片を剥離している。洗谷型剥片剥離技術に相当し[8]、剥離された剥片類は小形の打製石器の素材となったと考えられる。また遺跡内で打製石包丁の素材となるような大型の剥片を剥離した痕跡は確認できない。大型の剥片については金山を中心とした遺跡で制作され、板状剥片とセット関係を持ちながら流通し、遺跡内に持ち込まれたと考えられる[9][10]。

石核と楔形石器の素材は板状剥片である。板状剥片の法量はほとんどが10cm前後で、善通寺市龍川五条遺跡や東かがわ市鴨部・川田遺跡で出土しているような20cmを超える大型の板状剥片は出土していない。しかし金山産サヌカイトが非常に折れやすい石材であり、また板状剥片の折れ面に打点をとどめる例が多いことから、大型の板状剥片で搬入された後、遺跡内で分割されたと考えられる。

また板状剥片の体部に広範囲の自然面をとどめる例は稀で、スクレイパーの素材となっている剥片類にも背面全面に自然面をとどめる剥片を素材としたものは確認できず、他の剥片類についても同様の傾向が指摘できる。サヌカイトの原石そのものも出土していない。遺跡内で原石から剥片を剥離すれば自然面を背面全面に残した剥片が相当量出土するはずであるが、そうした剥片の出土は小型の剥片に稀にみられるものの、大型の剥片については確認できなかった。

＜磨製石器＞

磨製石器の素材となる安山岩や流紋岩、結晶片岩等の剥片は出土しているが、磨製石器の製作を示すほどの数量はなく、磨製石器の破損品と考えられる。先に石包丁の項で述べたが、粗割り素材の磨製石包丁の未製品が出土していることから、中の池遺跡では荒割り段階の磨製石器類からの製作を行っておらず、半製品の研磨を行っていたと考えられる。研磨用の砥石は49点・1.1％で砂岩あるいは安山岩、流紋岩製である。石器組成全体に占める割合は少なく、弥生時代中期後半から後期にみられるような高率な組成比は示さない。

第7項　石器組成からみた中の池遺跡の集団理解

＜社会＞

石鏃の石器組成全体に占める割合は8.8％で、単純に100m²あたりの絶対量を計算すると1.4個である。森下英治氏

遺跡名	時期	調査面積（㎡）	対象	石鏃数	単位保有量（個/100㎡）	環濠	立地
永井	縄文後期～晩期	27,000	調査面積	134	0.5	×	低地
林・坊城	突帯文	約4,000	B地区	12	0.3	×	低地
下川津	前期前半	約24,000	第1・第2微高地	37	0.2	×	低地
龍川五条	前期中葉	約15,000	I～IV区・前池	214	1.4	○	低地
中の池	前期後半	4,500	調査面積	63	1.4	○	低地
五条	前期後半	500	調査面積	23	4.6	○	低地
鴨部・川田	前期後半	5,000	調査面積	146	2.9	○	低地
川津一ノ又	中期前半	12,220	調査面積	285	2.3	×	低地
浴長池	中期前半	14,920	調査面積	22	0.1	×	低地
平岡	中期前半	11,000	調査面積	77	0.7	×	丘陵上
矢ノ塚	中期後半	11,800	調査面積	230	1.9	×	傾斜地
紫雲出山	中期後半	約1,000	面調査は276㎡	284	28.4	×	山頂
烏帽子山	中期後半	200	調査面積	23	11.5	×	山頂
久米池南	中期後半	10,000	調査面積	66	0.7	×	丘陵上
北原	後期初頭	600	調査面積	3	0.5	×	丘陵上
太田下須川	後期初頭	25,000	調査面積	14	0.1	×	低地
上天神	後期初頭	24,800	調査面積	29	0.1	×	低地

Tab.13　石鏃出土量の比較（森下　1998を一部改変）

の統計を用いると[11]、高地性集落と呼ばれる遺跡の絶対量とは20倍以上の差があることがわかる（Tab.13）。同じ水系で平地に立地する善通寺市龍川五条遺跡と比較すると石鏃の絶対量はほぼ類似するが、大型の石鏃が一定量含まれる点で異なる傾向を示している。中の池遺跡の集団は大型石鏃の保有数の割合から他集団と一定の緊張関係は存在したと考えられるが、石鏃の保有数全体から考えると、長期的かつ大規模な戦闘状態を想定することはできない。こうした様相から中の池遺跡の多重環濠の意義を防御という観点のみはで考えにくく、遺跡内の土地の乾燥化と湧水の利用という実利的な機能と、区画の明示という象徴的機能を考える必要があるといえる。

地元で産出される石材以外の磨製石器については製品で搬入されたと考えられる。これらの中には第8次調査で出土した九州産の石材である層灰岩を用いた磨製石剣もあり、中の池遺跡の集団が広域な交流を持っていたことがうかがえる。また結晶片岩製の磨製石器類はこれまでは阿讃山脈を越えた徳島県の吉野川流域との関係がクローズアップされて考えられてきたが、結晶片岩は愛媛県の中央構造線以南でも産出する石材である。中の池遺跡においては石鎌のような西部瀬戸内地域から北部九州にかけて分布の中心がある石器も出土していることから、西部瀬戸内地域からの搬入ルートをより重要視する必要があるといえる。

＜生業＞

石斧類は伐採斧の割合が加工斧よりも低く、こうした組成比の差は遺跡周辺の環境によるものと考えられる。花粉分析の結果から遺跡周辺の環境は、周囲は樹木花粉よりも草木花粉の占める割合が高く、周辺は二次林のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属といった広葉樹が分布していたことが確認されている。このことは遺跡周辺にはすでに森林が残っておらず、また遺跡の背後に山地がないことから、広範囲の森林を中の池遺跡の集団は有していなかったと想定できる。伐採斧と加工斧の石器組成の一割合にも満たない保有率からみても木製品の集約的な伐採・加工を想定できず、中の池遺跡の集団は遺跡内で必要な木材の伐採、木製品の加工のみを行っていたと考えられる。

また他の弥生時代前期の遺跡の組成に一定量確認できる打製石斧の出土がない。これまで打製石斧と石鎌は畑作と関連付けて考えられてきたが[12][13]、中の池遺跡においては石鎌は出土しているが打製石斧が出土しておらず、両者が同じ目的で使用されたものではないことが指摘できる。さらに中の池遺跡は低湿地に位置し、畑作に適した乾燥した耕地はなく、背後に丘陵地や山地を持たない。また花粉分析の結果ではムギ・アワ・ヒエといった畑作の

可能性を示す花粉は確認されていない。以上のことから中の池遺では畑作を行っておらず、石鎌については稲作に利用されたと考えられる。

よって中の池遺跡の生業は組成の約12%を占める磨製・打製石包丁を用いた水田稲作が主体を占め、それに狩猟採集と打欠石錘や土錘、軽石を利用した漁業が組み合わさっていたと想定できる。

＜石器生産＞

中の池遺跡の石器組成の特徴は、大陸系磨製石器の器種が磨製石鏃を除きすべて揃うことである。香川県下の遺跡では大陸系磨製石器は前期前半においては一部を受容するだけで、すべての器種が揃うわけではなく、前期中葉から後半にかけて器種が揃う傾向にある。中の池遺跡の石器組成はこうした前期中葉から後半にかけての香川県下の様相とよく符合している。また香川県下では中期以降は磨製石包丁が姿を消し、打製石包丁が急速に普及することが指摘されているが[14]、中の池遺跡の打製石包丁の割合が磨製の割合よりもやや多く、弥生時代前期から中期への過渡期的な様相を帯びているといえる。また他の拠点集落では前期中葉から磨製石器の生産を遺跡内で行っているが、中の池遺跡では一定量の磨製石器類の出土がみられるにもかかわらず、磨製石器生産を遺跡内で行っていた痕跡はみられない。磨製石器類は他の遺跡から半製品あるいは製品で搬入されたと考えられる。

磨製石器とは反対に打製石器の生産を行っていたことは多量に出土しているサヌカイトの石核や剥片から確認できる。しかし石核や剥片に広範囲の自然面を確認することはできないことから、小礫にいたるまで遺跡内に原石の搬入はなく、板状剥片の状態で搬入されたと考えられる。金山まで日帰りで作業を行うことができる距離圏に位置する中の池遺跡に小礫を含めて原石がまったく持ち込まれないという現象は、中の池遺跡の集団が完全に板状剥片のみを金山から持ち帰ったか、あるいは板状剥片の搬入そのものが供給ラインに乗ってもたらされていたものと想定できる。金山産サヌカイトは縄文時代後期から弥生時代中期にかけて板状剥片の状態で瀬戸内を中心として山陰や畿内においても出土している。縄文時代後期では金山産サヌカイトは板状剥片のほか原石を伴って出土しており[15]、各遺跡から直接金山に石材獲得に赴いていたと考えられる。とかろが弥生時代前期中葉から中期初頭の中の池遺跡では、金山近郊に位置しているにもかかわらず原石の出土がなく、板状剥片のみの出土を確認することができた。こうした石材獲得の変化から、弥生時代では金山を取り巻く環境が縄文時代の入会地的な様相から変化した可能性が想定できる。この可能性については他の時期や遺跡を含めた剥片類のより詳細な検討が必要であり、今回は可能性のみを指摘し今後別の論文にまとめたい。

第8項　おわりに

今回の調査出土の石器を通じて、中の池遺跡の集団の様相が明らかになりつつあるが、今後の調査の石器資料を通じて、中の池遺跡の廃絶の問題も考えていく必要があるといえる。香川県下では弥生時代前期の集落遺跡が中期に廃絶することが知られているが、こうした前期から中期への社会構造の変化をたどるうえで、中の池遺跡の環濠に大量に廃棄された完形の石器類は、集団のその後の動きを考える上で重要な資料になりうると考えられる。

また石器生産と石材の流通については、板状剥片と磨製石器の生産、搬入、流通システムについて広範囲の遺跡を含めたより詳細な検討が必要といえる。今回はその可能性の提示のみに終わったが、今後の課題として改めて考察にまとめたい。

引用・参考文献

(1) 酒井龍一　1989　「初期農耕開拓活動の諸形態」『文化財学報』7　奈良大学文学部文化財学科

(2) 第8次調査の報告書では、シルト岩製と報告したが、その後の検討で九州で産出する層灰岩製の磨製石剣の可能性が考えられた。

(3) 松木武彦　1989　「弥生時代の石製武器の発達と地域性　－特に打製石鏃について－」『考古学研究』35－4

(4) 藤好史郎・西村尋人　編　1990　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII　下川津遺跡』　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財センター・本州四国連絡橋公団

(5) 森本　晋　1985　「石小刀」『弥生文化の研究』4　雄山閣

(6) 平井　勝　1991　「石小刀」『弥生時代の石器』　ニュー・サイエンス社

(7) 松尾泰子　1984　「弥生時代の磨製石鏃について」『西部瀬戸内における弥生文化の研究』　山口大学人文学部考古学研究室

(8) 竹広文明　1988　「中国地方縄文時代の剥片石器―その組成・剥片剥離技術」『考古学研究』35－1
(9) 森下英治　2002　「石器の生産と流通　－四国の弥生石器の概観と金山産サヌカイト」『弥生時代前期末・中期初頭の動態』　第16回古代学協会四国支部研究大会研究発表要旨集
(10) 井上勝之　1980　「サヌカイト製石器の製作址　－金山東麓のサヌカイト集積地とその遺物－」『香川県自然科学館研究報告』2　香川県自然科学館
(11)森下英治　1998　「石器の特徴と組成について」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊　龍川五条遺跡II・飯野東分山崎南遺跡』　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
(12)平井　勝　1991　「石鏃」『弥生時代の石器』　ニューサイエンス社
(13)甲元真之　1981　「磨製石鎌についての二三の問題」『綾羅木郷遺跡発掘調査報告書第1集』　下関市教育委員会
(14)森下英治　2002　「石器の生産と流通　－四国の弥生石器の概観と金山産サヌカイト」『弥生時代前期末・中期初頭の動態』　第16回古代学協会四国支部研究大会研究発表要旨集
(15)谷若倫朗　2003　「金山産サヌカイトの海上移動」『道具の生産流通と地域関係の形成』　古代学協会中国四国支部合同大会

下條信行　2002　「瀬戸内における石包丁の形式展開と文化交流」『四国とその周辺の考古学』　犬飼徹夫先生古希記念論文集刊行会
菅栄太郎　1992　「弥生時代の石器生産と流通　－讃岐平野における一様相と近畿地域との関連性－」『考古学と生活文化』　同志社大学考古学シリーズV
高田浩司　2001　「吉備における弥生時代中期の石器生産と流通」『古代吉備』23
竹広文明　2003　『サヌカイトと先史社会』　溪水社
信里芳紀　2000　「北四国における弥生文化の成立　－讃岐地方を中心として－」『弥生文化の成立　－各地域における弥生文化成立期の具体像－』埋蔵文化財研究会
　　2002　「讃岐地域における弥生時代前期末から中期前半の様相」『弥生時代前期末・中期初頭の動態』　第16回古代学協会四国支部研究大会研究発表要旨集
藤田　等　1964　「大陸系石器　－特に磨製石鎌について－」『日本考古学の諸問題』　河出書房新社
松木武彦　2002　「讃岐平野における打製石鏃の長期的変化」『四国とその周辺の考古学』　犬飼徹夫先生古希記念論文集刊行会
水島稔夫　1985　「石鎌」『弥生文化の研究』4
森下英治　1995　「瀬戸内の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル』391
森本　晋　1986　「石鏃」『弥生文化の研究』9
　　1991　「ごみの捨て方　－石器製作と廃棄　弥生時代河内の事例―」『考古学研究』38－3

Tab.14　石器報告遺物一覧表（1）

図版番号	遺物番号	遺構番号	出土層位	器種名	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
41	57	SD002	黒色粘土	石鏃	2.3	1.5	0.3	0.8	サヌカイト	凹基式
41	58	SD002	黒色粘土	石匙	4.3	7.2	1.0	27.1	サヌカイト	
41	59	SD002	黒色粘土	スクレイパー	3.0	5.3	0.6	8.8	サヌカイト	
41	60	SD002	黒色粘土	磨製石包丁	(6.2)	(4.3)	(0.5)	(16.9)	安山岩または流紋岩	
41	61	SD002	黒色粘土	扁平片刃石斧	5.8	3.3	1.1	40.0	凝灰岩	
41	62	SD002	黒色粘土	石核	8.4	6.7	4.2	214.0	サヌカイト	
42	63	SD002	黒褐色細砂	磨製石包丁	(6.9)	4.6	(0.7)	(32.6)	安山岩	長方形
42	64	SD002	黒褐色細砂	柱状片刃石斧	(3.6)	(3.3)	(1.4)	(38.8)	結晶片岩	
42	65	SD002	黒褐色細砂	打製石包丁	(4.6)	4.5	(1.0)	(25.9)	サヌカイト	光沢面あり
42	66	SD002	黒褐色細砂	スクレイパー	5.6	(4.8)	(1.8)	(39.7)	サヌカイト	
42	67	SD002	黒褐色細砂	スクレイパー	3.5	4.2	1.2	13.5	サヌカイト	
42	68	SD002	黒褐色細砂	楔形石器	3.6	7.7	1.2	25.2	サヌカイト	分割板材
42	69	SD002	黒褐色細砂	楔形石器	7.0	4.7	2.0	54.4	サヌカイト	
43	70	SD002	黒褐色細砂	磨製石斧	(8.5)	7.4	5.2	(473.0)	安山岩	
43	71	SD002	黒褐色細砂	砥石	34.8	(27.5)	10.1	(14000.0)	砂岩	
44	72	SD002	黒灰色細砂	磨製石包丁	(6.0)	5.4	0.7	(32.0)	安山岩	長方形
44	73	SD002	黒灰色細砂	スクレイパー	2.6	4.9	1.0	9.2	サヌカイト	
44	74	SD002	黒灰色細砂	スクレイパー	4.7	6.8	1.1	24.8	サヌカイト	
44	75	SD002	黒灰色細砂	スクレイパー	(3.5)	(4.6)	(1.3)	(18.6)	サヌカイト	
44	76	SD002	黒灰色細砂	スクレイパー	4.6	8.3	1.0	51.6	サヌカイト	
44	77	SD002	黒灰色細砂	石核	11.6	17.1	3.9	845.0	サヌカイト	
45	78	SD002	暗灰色粘土	スクレイパー	(4.3)	4.7	0.7	(14.7)	サヌカイト	
45	79	SD002	暗灰色粘土	スクレイパー	5.1	8.2	0.9	33.9	サヌカイト	
45	80	SD002	黒灰色粘土	石鏃	(3.5)	2.7	0.6	(4.8)	サヌカイト	平基式
45	81	SD002	黒灰色粘土	スクレイパー	3.5	7.2	0.8	20.5	サヌカイト	
45	82	SD002	黒灰色粘土	石核	5.7	5.6	1.1	40.9	サヌカイト	
52	97	SD059	黄褐色砂質土	石小刀	(3.7)	2.2	0.9	7.0	サヌカイト	IIIc類
52	98	SD059	黄褐色砂質土	打製石包丁	(4.8)	4.9	(1.2)	(31.8)	サヌカイト	
52	99	SD059	黄褐色砂質土	スクレイパー	(3.7)	(5.3)	0.7	(9.6)	サヌカイト	
52	100	SD059	黄褐色砂質土	スクレイパー	(3.2)	(5.4)	(0.7)	(11.7)	サヌカイト	
52	101	SD059	黄褐色砂質土	スクレイパー	3.8	3.7	1.1	27.6	サヌカイト	
52	102	SD059	黄褐色砂質土	スクレイパー	5.9	7.4	1.5	62.0	サヌカイト	
52	103	SD059	黄褐色砂質土	スクレイパー	4.6	(7.1)	1.5	(43.7)	サヌカイト	
53	104	SD059	黒褐色粘質土	石鏃	1.9	1.3	0.3	0.6	サヌカイト	凹基式
53	105	SD059	黒褐色粘質土	スクレイパー	4.9	7.2	1.3	45.4	サヌカイト	
53	106	SD059	黒褐色粘質土	石核	3.3	6.5	0.9	21.9	サヌカイト	
53	107	SD059	黒褐色粘質土	石核	6.1	3.6	1.3	32.2	サヌカイト	
53	108	SD059	黒褐色粘質土	石皿	20.0	12.3	4.7	1640.0	砂岩	
54	109	SD059	暗灰色砂質土	スクレイパー	(4.1)	(5.2)	(1.0)	(23.9)	サヌカイト	
54	110	SD059	暗灰色砂質土	スクレイパー	3.6	(7.7)	1.2	(29.5)	サヌカイト	
54	111	SD059	暗灰色砂質土	石核	4.1	6.7	1.2	29.2	サヌカイト	
54	112	SD059	暗灰色砂質土	石核	3.6	7.1	1.8	45.3	サヌカイト	
54	113	SD059	暗灰色砂質土	磨製石斧	10.3	4.9	(2.9)	(249.0)	凝灰岩	
54	114	SD059	暗灰色砂質土	砥石	(9.7)	(11.7)	6.0	(994.0)	砂岩	
54	115	SD059	暗灰色砂質土	石皿	22.3	13.3	4.1	1540.0	砂岩	
55	116	SD059	暗灰色粘土	スクレイパー	5.2	(5.5)	1.3	(35.8)	サヌカイト	
55	117	SD059	暗灰色粘土	スクレイパー	4.9	(7.5)	1.0	(39.0)	サヌカイト	
55	118	SD059	暗灰色粘土	打製石包丁	11.7	5.9	1.1	79.5	サヌカイト	III類
55	119	SD059	暗灰色粘土	楔形石器	6.6	9.4	1.7	90.0	サヌカイト	
56	120	SD059	暗灰色粘土	敲き石	8.0	4.7	4.3	181.6	砂岩	
56	121	SD059	暗灰色粘土	敲き石	(10.3)	5.8	4.4	(392.0)	砂岩	
57	122	SD059	暗灰褐色砂質土	石匙	5.8	7.8	1.3	49.0	サヌカイト	
57	123	SD059	暗灰褐色砂質土	スクレイパー	4.0	6.9	1.1	28.8	サヌカイト	
57	124	SD059	暗灰褐色砂質土	スクレイパー	4.7	6.9	1.2	43.9	サヌカイト	
57	125	SD059	暗灰褐色砂質土	スクレイパー	6.2	7.1	1.6	49.0	サヌカイト	
57	126	SD059	暗灰褐色砂質土	くぼみ石	(9.9)	9.1	4.4	(540.0)	砂岩	
58	127	SD059	黒色粘土	石鏃	2.8	2.5	0.3	1.9	サヌカイト	凹基式
58	128	SD059	黒色粘土	楔形石器	8.0	4.9	1.9	72.7	サヌカイト	
58	129	SD059	黒色粘土	楔形石器	11.5	7.3	2.3	193.6	サヌカイト	
59	130	SD059	暗灰色地山ブロック土	スクレイパー	(4.2)	(5.7)	0.9	(16.8)	サヌカイト	
59	131	SD059	暗灰色地山ブロック土	スクレイパー	4.9	(6.1)	1.4	(36.1)	サヌカイト	
59	132	SD059	暗灰色地山ブロック土	スクレイパー	5.2	6.5	1.1	36.9	サヌカイト	
72	175	SD081	暗褐色粘質土	石鏃	3.3	(2.1)	0.6	(2.9)	サヌカイト	凹基式
72	176	SD081	暗褐色粘質土	石鏃未製品	3.3	2.3	0.8	6.1	サヌカイト	
72	177	SD081	暗褐色粘質土	石錐	(2.9)	1.0	0.5	(1.5)	サヌカイト	
72	178	SD081	暗褐色粘質土	石錐	3.1	1.1	0.5	1.6	サヌカイト	
72	179	SD081	暗褐色粘質土	石匙未製品	3.6	6.6	8.5	20.9	サヌカイト	
72	180	SD081	暗褐色粘質土	磨製石包丁未製品	(7.7)	5.6	1.5	(91.0)	サヌカイト	転用の可能性あり
72	181	SD081	暗褐色粘質土	二次加工ある剥片	6.6	8.7	1.1	59.8	サヌカイト	
72	182	SD081	暗褐色粘質土	小形円柱状石斧	5.8	1.5	1.1	11.5	安山岩系	
73	183	SD081	灰褐色細砂	スクレイパー	5.0	(7.3)	0.8	(28.3)	サヌカイト	
73	184	SD081	灰褐色細砂	楔形石器	6.0	7.9	1.8	92.2	サヌカイト	
74	185	SD081	明黄褐色粘土	石鏃	1.7	1.9	0.4	(0.9)	サヌカイト	
74	186	SD081	明黄褐色粘土	石鏃	3.0	(1.8)	0.5	(1.6)	サヌカイト	
74	187	SD081	明黄褐色粘土	石鏃未製品	2.8	2.2	0.7	4.1	サヌカイト	
74	188	SD081	明黄褐色粘土	石鏃未製品	3.6	2.0	0.4	2.0	サヌカイト	
74	189	SD081	明黄褐色粘土	石鏃未製品	3.9	2.4	0.7	4.4	サヌカイト	
74	190	SD081	明黄褐色粘土	石錐	(4.7)	1.4	0.7	(3.4)	サヌカイト	
74	191	SD081	明黄褐色粘土	打製石包丁	7.8	4.7	1.0	44.8	サヌカイト	I類。光沢面あり
74	192	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	3.9	(3.8)	0.8	(9.3)	サヌカイト	
74	193	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	3.2	5.0	1.0	16.5	サヌカイト	
74	194	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	3.7	(4.4)	1.3	(22.6)	サヌカイト	
74	195	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	4.6	7.2	0.8	23.0	サヌカイト	
74	196	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	3.9	(4.9)	0.7	(14.8)	サヌカイト	
75	197	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	5.5	6.4	0.8	32.5	サヌカイト	
75	198	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	5.6	(7.6)	1.3	(49.4)	サヌカイト	
75	199	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	(4.4)	8.2	1.1	(38.1)	サヌカイト	

Tab.15　石器報告遺物一覧表（2）

図版番号	遺物番号	遺構番号	出土層位	器種名	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
75	200	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	(4.7)	(9.5)	1.3	(45.3)	サヌカイト	
75	201	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	6.0	9.3	1.7	81.6	サヌカイト	
76	202	SD081	明黄褐色粘土	ノッチ	4.7	3.9	1.2	16.1	サヌカイト	
76	203	SD081	明黄褐色粘土	楔形石器	4.4	(7.4)	1.2	(56.3)	サヌカイト	
76	204	SD081	明黄褐色粘土	楔形石器	6.3	3.9	1.1	26.3	サヌカイト	
76	205	SD081	明黄褐色粘土	石核	3.9	5.8	1.4	31.2	サヌカイト	
76	206	SD081	明黄褐色粘土	石核	6.3	6.4	2.8	129.7	サヌカイト	
76	207	SD081	明黄褐色粘土	石核	7.0	5.5	2.2	81.4	サヌカイト	
76	208	SD081	明黄褐色粘土	石核	7.1	10.9	1.7	175.5	サヌカイト	
77	209	SD081	明黄褐色粘土	磨製石包丁	(9.1)	4.6	0.8	(32.5)	粘板岩	長方形
77	210	SD081	明黄褐色粘土	扁平片刃石斧	7.7	(1.3)	(1.2)	(21.0)	結晶片岩	
77	211	SD081	明黄褐色粘土	不明石製品	(13.8)	3.5	1.5	(84.9)	点紋黒色片岩	
77	212	SD081	明黄褐色粘土	砥石	(8.4)	(5.7)	4.0	(322.0)	安山岩	
77	213	SD081	明黄褐色粘土	くぼみ石	10.7	6.0	2.4	241.0	砂岩	
77	214	SD081	明黄褐色粘土	敲き石	17.4	4.7	4.8	515.0	砂岩	
77	215	SD081	明黄褐色粘土	砥石	(17.3)	(10.1)	(7.2)	(1640.0)	安山岩	
78	216	SD081	暗灰色粘土	石鏃	(1.7)	1.6	0.4	(0.7)	サヌカイト	平基式。刃部鋸歯縁
78	217	SD081	暗灰色粘土	石鏃	(2.2)	(1.8)	0.5	(1.2)	サヌカイト	平基式
78	218	SD081	暗灰色粘土	石鏃	2.8	1.8	0.4	1.6	サヌカイト	平基式
78	219	SD081	暗灰色粘土	石鏃	(3.2)	(1.4)	0.6	(1.9)	サヌカイト	有茎式
78	220	SD081	暗灰色粘土	石鏃未製品	4.2	2.6	0.8	7.1	サヌカイト	
78	221	SD081	暗灰色粘土	石鏃未製品	5.9	3.8	6.5	11.3	サヌカイト	
78	222	SD081	暗灰色粘土	スクレイパー	3.4	6.5	1.2	21.7	サヌカイト	
78	223	SD081	暗灰色粘土	打製石包丁	(7.6)	5.7	1.1	(55.8)	サヌカイト	
78	224	SD081	暗灰色粘土	打製石包丁	10.8	4.8	1.2	65.1	サヌカイト	I類。光沢面あり
79	225	SD081	暗灰色粘土	楔形石器	6.5	10.8	4.2	153.6	サヌカイト	
79	226	SD081	暗灰色粘土	石核	4.0	4.6	2.6	62.7	サヌカイト	
79	227	SD081	暗灰色粘土	石皿	14.7	15.5	2.8	(1150.0)	砂岩	
99	201	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	1.4	1.4	0.3	0.3	サヌカイト	平基式
99	202	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(1.5)	(1.5)	0.3	(0.4)	サヌカイト	凹基式
99	203	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(1.5)	(1.3)	(0.3)	(0.6)	サヌカイト	
99	204	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(1.8)	1.7	0.3	(0.9)	サヌカイト	凹基式
99	205	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(1.9)	1.5	0.3	(0.8)	サヌカイト	平基式
99	206	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(1.8)	1.5	0.3	(0.7)	サヌカイト	平基式
99	207	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(1.8)	1.7	0.3	(0.7)	サヌカイト	平基式
99	208	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	1.9	1.5	0.4	0.6	サヌカイト	平基式
99	209	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	2.1	1.7	0.2	0.6	サヌカイト	凹基式
99	210	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	2.3	1.5	0.5	0.7	サヌカイト	凹基式。刃部鋸歯状
99	211	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(2.1)	(1.5)	0.3	(0.6)	サヌカイト	凹基式
99	212	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(2.7)	(1.8)	0.5	(1.5)	サヌカイト	凹基式
99	213	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(2.4)	(1.8)	0.7	(2.0)	サヌカイト	
99	214	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(3.0)	2.2	0.4	(1.5)	サヌカイト	凹基式
99	215	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(3.1)	2.3	0.4	(1.8)	サヌカイト	凹基式。刃部鋸歯状
99	216	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	3.2	1.9	0.5	1.8	サヌカイト	凹基式。五角形鏃
99	217	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	3.2	2.0	0.4	1.5	サヌカイト	凹基式。刃部鋸歯状
99	218	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	2.8	1.5	0.6	2.3	サヌカイト	凸基式
99	219	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	2.6	1.2	0.4	1.0	サヌカイト	平基式
99	220	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	3.2	1.3	0.5	1.7	サヌカイト	凸基式。刃部鋸歯状
99	221	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(3.7)	1.2	0.6	(2.0)	サヌカイト	凸基式
99	222	SD083	暗褐色粘質土	石鏃	(3.7)	1.2	0.7	(2.6)	サヌカイト	凸基式
100	223	SD083	暗褐色粘質土	石鏃未製品	2.5	2.1	0.4	1.3	サヌカイト	
100	224	SD083	暗褐色粘質土	石鏃未製品	2.5	1.9	0.4	1.4	サヌカイト	
100	225	SD083	暗褐色粘質土	石鏃未製品	2.0	2.1	0.4	2.7	サヌカイト	
100	226	SD083	暗褐色粘質土	石鏃未製品	2.3	2.0	0.5	1.5	サヌカイト	
100	227	SD083	暗褐色粘質土	石鏃未製品	2.8	2.6	0.6	3.0	サヌカイト	
100	228	SD083	暗褐色粘質土	石鏃未製品	2.6	1.7	0.5	1.9	サヌカイト	
100	229	SD083	暗褐色粘質土	石鏃未製品	3.2	2.5	0.7	4.9	サヌカイト	
100	230	SD083	暗褐色粘質土	石鏃未製品	3.5	2.5	0.5	3.7	サヌカイト	
100	231	SD083	暗褐色粘質土	石鏃未製品	3.2	1.1	0.4	1.3	サヌカイト	刃部鋸歯状
100	232	SD083	暗褐色粘質土	石鏃未製品	3.3	1.6	0.5	1.8	サヌカイト	石鏃か？
101	233	SD083	暗褐色粘質土	石錐	(2.4)	1.0	0.7	(1.4)	サヌカイト	
101	234	SD083	暗褐色粘質土	石錐	3.2	1.3	0.8	2.3	サヌカイト	
101	235	SD083	暗褐色粘質土	石錐	3.5	1.3	0.7	1.4	サヌカイト	
101	236	SD083	暗褐色粘質土	石錐	(3.6)	1.7	0.5	(2.4)	サヌカイト	
101	237	SD083	暗褐色粘質土	石錐	(4.1)	1.7	0.6	(3.0)	サヌカイト	
101	238	SD083	暗褐色粘質土	石錐	4.5	1.8	0.9	4.8	サヌカイト	
101	239	SD083	暗褐色粘質土	石錐	(5.2)	1.2	0.8	(4.5)	サヌカイト	石鏃か？
101	240	SD083	暗褐色粘質土	石錐	(3.0)	3.3	0.8	(4.3)	サヌカイト	
101	241	SD083	暗褐色粘質土	石錐未製品	3.5	2.1	0.9	6.0	サヌカイト	
101	242	SD083	暗褐色粘質土	石錐未製品	3.7	1.2	1.5	4.7	サヌカイト	
101	243	SD083	暗褐色粘質土	石錐未製品	4.0	1.5	0.8	5.0	サヌカイト	
101	244	SD083	暗褐色粘質土	石錐未製品	3.5	1.3	0.8	3.2	サヌカイト	
101	245	SD083	暗褐色粘質土	石錐未製品	5.3	2.5	0.9	8.7	サヌカイト	
102	246	SD083	暗褐色粘質土	石匙	4.4	5.4	0.5	9.0	サヌカイト	
102	247	SD083	暗褐色粘質土	スクレイパー	6.4	4.0	1.0	23.1	サヌカイト	
102	248	SD083	暗褐色粘質土	スクレイパー	2.9	8.8	0.9	20.9	サヌカイト	
102	249	SD083	暗褐色粘質土	スクレイパー	6.6	10.5	1.3	55.5	サヌカイト	
102	250	SD083	暗褐色粘質土	スクレイパー	5.7	9.4	2.3	102.7	サヌカイト	
103	251	SD083	暗褐色粘質土	打製石包丁	12.1	4.5	1.1	56.3	サヌカイト	III類。光沢面あり
103	252	SD083	暗褐色粘質土	打製石包丁	10.0	4.7	1.2	61.6	サヌカイト	III類。光沢面あり
103	253	SD083	暗褐色粘質土	打製石包丁	(9.7)	4.6	1.1	(54.2)	サヌカイト	光沢面あり
103	254	SD083	暗褐色粘質土	打製石包丁	(7.2)	4.5	11.5	(26.0)	サヌカイト	
103	255	SD083	暗褐色粘質土	打製石包丁	11.3	4.5	1.5	73.5	サヌカイト	I類。研磨痕あり・光沢面あり
104	256	SD083	暗褐色粘質土	打製石包丁	8.8	4.9	1.4	53.8	サヌカイト	I類。
104	257	SD083	暗褐色粘質土	打製石包丁	10.0	5.0	1.1	59.0	サヌカイト	I類。
104	258	SD083	暗褐色粘質土	打製石包丁	(8.5)	5.3	1.1	(67.6)	サヌカイト	光沢面あり
104	259	SD083	暗褐色粘質土	楔形石器	5.9	(17.1)	2.8	(356.0)	サヌカイト	

Tab.16　石器報告遺物一覧表（3）

図版番号	遺物番号	遺構番号	出土層位	器種名	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
105	260	SD083	暗褐色粘質土	板状剥片	14.8	10.4	1.7	319.5	サヌカイト	
105	261	SD083	暗褐色粘質土	楔形石器	10.3	13.1	2.0	348.2	サヌカイト	
106	262	SD083	暗褐色粘質土	磨製石包丁	(9.0)	(5.7)	0.7	(51.1)	流紋岩	外湾刃半月形
106	263	SD083	暗褐色粘質土	磨製石包丁	(9.1)	(5.5)	0.9	(44.7)	結晶片岩	
106	264	SD083	暗褐色粘質土	磨製石包丁未製品	11.3	4.7	1.2	64.6	流紋岩	打製石包丁か？
106	265	SD083	暗褐色粘質土	扁平片刃石斧	(5.1)	(4.0)	1.1	(27.6)	結晶片岩	
106	266	SD083	暗褐色粘質土	磨製石鎌	19.2	4.2	1.3	(148.9)	緑泥片岩	
106	267	SD083	暗褐色粘質土	太型蛤刃石斧	(12.3)	6.9	4.7	(666.0)	ヒン岩	
106	268	SD083	暗褐色粘質土	磨製石斧	(6.5)	6.6	(2.2)	(129.5)	結晶片岩	
107	269	SD083	暗褐色粘質土	敲き石	9.2	5.4	3.8	224.0	砂岩	
107	270	SD083	暗褐色粘質土	くぼみ石	6.5	6.4	4.7	255.5	砂岩	
107	271	SD083	暗褐色粘質土	砥石	(13.6)	(9.9)	(4.5)	(613.0)	砂岩	
107	272	SD083	暗褐色粘質土	砥石兼敲き石	9.6	9.5	5.3	590.0	砂岩	
107	273	SD083	暗褐色粘質土	軽石	11.9	(6.4)	3.6	(68.7)	軽石	
107	274	SD083	暗褐色粘質土	台石	31.5	19.0	9.5	7095.0	砂岩	
108	275	SD083	黒褐色粘土	スクレイパー	(5.0)	3.3	0.9	(14.2)	サヌカイト	
108	276	SD083	黒褐色粘土	磨製石包丁未製品	11.1	6.7	1.4	112.2	流紋岩	
108	277	SD083	黒褐色粘土	石核	10.5	11.7	3.4	444.0	サヌカイト	
108	278	SD083	黒褐色粘土	スクレイパー	9.3	(14.8)	2.0	(249.5)	サヌカイト	
109	279	SD083	暗褐色砂質土	磨製石包丁	(6.7)	4.7	9.5	(44.9)	結晶片岩	長方形
109	280	SD083	暗褐色砂質土	スクレイパー	4.4	6.9	1.2	24.6	サヌカイト	
109	281	SD083	暗褐色砂質土	スクレイパー	4.5	12.5	1.6	77.6	サヌカイト	
109	282	SD083	暗褐色砂質土	二次加工ある剥片	9.6	15.3	1.1	175.4	サヌカイト	
109	283	SD083	暗褐色砂質土	柱状片刃石斧	(13.2)	3.2	1.8	(141.0)	結晶片岩	
109	284	SD083	暗褐色砂質土	柱状片刃石斧	11.5	3.2	2.4	156.2	流紋岩	
110	285	SD083	暗褐色砂質土	扁平片刃石斧	11.0	5.2	1.7	(109.5)	結晶片岩	
111	286	SD083	暗灰色粘土	石鏃	2.4	1.9	0.6	2.1	サヌカイト	平基式
111	287	SD083	暗灰色粘土	スクレイパー	6.9	9.8	1.7	(96.8)	サヌカイト	
111	288	SD083	暗灰色粘土	打製石鎌	(12.3)	5.5	1.7	(130.5)	サヌカイト	光沢面あり
111	289	SD083	暗灰色粘土	磨製石斧	11.4	(6.2)	(3.0)	(287.5)	結晶片岩	
111	290	SD083	暗灰色粘土	紡錘車	5.7	5.5	0.7	44.4	結晶片岩	
112	201	SD083	暗灰色粘質土	扁平片刃石斧	(11.9)	3.5	1.4	(108.6)	結晶片岩	
112	292	SD083	暗灰色粘質土	磨製石包丁	6.4	4.8	0.6	(24.0)	安山岩	
112	293	SD083	黒灰色粘土	石鏃	3.4	2.4	0.5	2.4	サヌカイト	
112	294	SD083	黒灰色粘土	スクレイパー	6.3	5.5	1.1	34.8	サヌカイト	
112	295	SD083	黒灰色粘土	小型円柱状石斧	(8.7)	1.5	1.4	(21.6)	安山岩系	
112	296	SD083	黒灰色粘土	スクレイパー	4.2	7.6	1.2	26.5	サヌカイト	
113	297	SD083	出土層位不明	磨製石包丁	(5.0)	4.4	0.8	(24.4)	流紋岩	長方形
119	55	SD134	黒色粘土	石鏃	(1.4)	1.4	0.5	(0.7)	サヌカイト	平基式
119	56	SD134	黒色粘土	石鏃	(2.1)	1.5	0.4	(0.9)	サヌカイト	凹基式
119	57	SD134	黒色粘土	石鏃未製品	2.9	2.5	0.8	3.8	サヌカイト	
119	58	SD134	黒色粘土	磨製石包丁	(11.4)	5.5	0.6	(54.0)	流紋岩	杏仁形
119	59	SD134	黒色粘土	打製石包丁	(6.0)	5.4	(8.9)	(27.8)	サヌカイト	
119	60	SD134	暗褐色細砂	敲き石	6.7	6.9	5.2	315.0	砂岩	
119	61	SD134	暗褐色細砂	砥石	(9.4)	(8.1)	4.2	(430.0)	流紋岩または安山岩	
120	62	SD134	黒灰色細砂	磨製石包丁	(2.8)	4.3	(0.7)	(13.1)	結晶片岩	
120	63	SD134	黒灰色細砂	スクレイパー	5.2	6.5	1.2	36.7	サヌカイト	ローリングを受けている
120	64	SD134	暗褐色砂質土	磨製石包丁	(4.9)	4.5	0.6	(24.7)	安山岩	光沢面あり
127	102	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(1.9)	1.5	0.3	(0.8)	サヌカイト	凹基式
127	103	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(1.7)	1.4	0.3	(0.6)	サヌカイト	平基式
127	104	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	2.3	1.7	0.3	1.0	サヌカイト	平基式
127	105	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	2.5	(1.8)	0.5	(1.0)	サヌカイト	平基式
127	106	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(2.8)	1.8	3.5	(1.1)	サヌカイト	凹基式
127	107	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	2.8	1.2	0.3	0.8	サヌカイト	平基式
127	108	SD167	黒褐色粘質土	石鏃未製品	3.4	2.7	0.7	5.0	サヌカイト	
127	109	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(4.4)	1.4	0.6	(2.1)	サヌカイト	凸基式。刃部鋸歯状
127	110	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(5.7)	1.8	0.9	(5.1)	サヌカイト	凸基式。石錐か？
127	111	SD167	黒褐色粘質土	石錐	(3.4)	1.4	0.6	(1.8)	サヌカイト	
127	112	SD167	黒褐色粘質土	石錐	(3.9)	2.2	0.6	(3.1)	サヌカイト	
127	113	SD167	黒褐色粘質土	石匙	4.7	7.0	0.8	22.2	サヌカイト	
127	114	SD167	黒褐色粘質土	スクレイパー	(5.0)	7.2	1.2	(31.4)	サヌカイト	
128	115	SD167	黒褐色粘質土	磨製石包丁	(6.7)	3.5	(0.8)	(24.2)	結晶片岩	石剣・石戈の転用品の可能性あり
128	116	SD167	黒褐色粘質土	打製石包丁	9.0	4.7	1.1	44.4	サヌカイト	II類
128	117	SD167	黒褐色粘質土	打製石包丁	(8.7)	4.1	0.9	(38.1)	サヌカイト	光沢面あり
128	118	SD167	黒褐色粘質土	打製石包丁	(6.9)	4.8	1.2	(45.9)	サヌカイト	光沢面あり
128	119	SD167	黒褐色粘質土	打製石包丁	13.7	5.4	1.5	107.0	サヌカイト	III類。光沢面あり
129	120	SD167	黒褐色粘質土	楔形石器	10.9	7.7	2.4	241.0	サヌカイト	
129	121	SD167	黒褐色粘質土	柱状片刃石斧	(14.4)	(4.8)	(1.4)	(120.5)	結晶片岩	
129	122	SD167	黒褐色粘質土	敲き石	7.8	6.9	3.6	243.0	砂岩	
129	123	SD167	黒褐色粘質土	石皿	19.3	24.9	4.3	3010.0	砂岩	
130	124	SD167	暗灰褐色砂質土	打欠石錘	5.5	4.8	1.2	51.6	結晶片岩	
142	18	水田域	黒色粘土	石鏃	(1.9)	1.5	3.5	(0.8)	サヌカイト	平基式
142	19	水田域	黒色粘土	環状石斧	(9.2)	(5.8)	(3.0)	(170.6)	砂岩	
142	20	水田域	赤灰色粘土	打製石包丁	12.9	5.2	1.2	68.1	サヌカイト	III類。光沢面あり
142	21	水田域	暗赤灰粘	磨製石包丁	(9.5)	4.9	0.8	(58.3)	安山岩	長方形
142	22	水田域	暗赤灰粘	砥石	7.1	5.1	5.1	334.0	安山岩系	
143	23	水田域	暗黄褐色細砂	打製石包丁	11.7	4.7	1.0	54.8	サヌカイト	II類
148		ST203		石鏃	(2.6)	1.6	0.4	(1.1)	サヌカイト	凹基式

Tab.17　中の池遺跡第9次調査遺物一覧表（1）

北区

表土・造成土

弥生土器	鉢・甕（逆「L」あり）・壷
須恵器	壷
土師器	鍋
白磁	皿
国産陶器	タイル・電柱ガイシ
染付	椀（肥前・波佐見）
瓦質土器	鉢
石器	剥片・スクレイパー・石鏃・チャート製剥片・打製石包丁・くぼみ石・磨製石斧
石製品	不明品（板石）
瓦類	近世
その他	焼土

明褐色粘質土

弥生土器	壷
土師器	不明品（中世以降）
青磁	皿
国産陶器	皿
染付	椀
石器	剥片・スクレイパー

暗灰色砂質土

弥生土器	甕（逆「L」あり）・壷・鉢
須恵器	杯身
国産陶器	甕・ひょうそく
石器	打製石包丁・剥片・石鏃未製品・石鏃・スクレイパー・楔形石器・石錐・磨製石斧
その他	ガラス瓶（混入）・とりべ

ＳＤ002　黒色粘土

弥生土器	壷・甕・壷（内面突帯あり）
石器	磨製石斧・磨製石包丁・石匙・楔形石器・スクレイパー・扁平片刃石斧・石鏃・石核・板状剥片・二次加工ある剥片・剥片・微細剥離痕のある剥片・擦り石
瓦類	近現代瓦

ＳＤ002　黒褐色細砂

弥生土器	壷・甕・鉢・壷（内面突帯あり）・てづくね
石器	剥片・太型蛤刃石斧・楔形石器・スクレイパー・磨製石包丁・石核・打製石包丁・二次加工ある剥片・板状剥片・微細剥離痕のある剥片・扁平片刃石斧・擦り石・くぼみ石
土製品	円板

ＳＤ002　黒灰色細砂

弥生土器	甕・壷・鉢・小型壷
石器	楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石鏃・石核・剥片・板状剥片・微細剥離痕のある剥片・磨製石包丁
土製品	円板
その他	炭

ＳＤ002　暗灰色粘土

弥生土器	壷・甕
石器	スクレイパー・剥片・磨製石斧・石核

ＳＤ002　黒灰色粘土

弥生土器	甕・壷・鉢
石器	楔形石器・スクレイパー・石鏃・石核・二次加工ある剥片・剥片・板状剥片・微細剥離痕のある剥片
土製品	円板

ＳＤ002　出土層位不明

弥生土器	壷・甕

ＳＡ049

弥生土器	細片・壷

ＳＡ050

弥生土器	細片・甕

Ｓ058

弥生土器	細片
石器	剥片・石鏃・二次加工ある剥片

ＳＤ059　黄褐色砂質土

弥生土器	壷・甕・鉢
須恵器	坏蓋
石器	石小刀・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石核・打製石包丁・敲き石・二次加工ある剥片・剥片・微細剥離痕のある剥片・磨石

ＳＤ059　黒褐色粘質土

弥生土器	壷・甕・鉢・ミニチュア甕・高坏・壷（内面突帯あり）
石器	石皿・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石核・石鏃・二次加工ある剥片・剥片・磨石

ＳＤ059　暗灰色砂質土

弥生土器	壷・甕・鉢
石器	楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石核・柱状片刃石斧・二次加工ある剥片・剥片・微細剥離痕のある剥片・石皿・敲き石・砥石・石皿

ＳＤ059　暗灰色粘土

弥生土器	壷・甕・甕蓋
石器	楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石核・二次加工ある剥片・剥片・磨製石包丁・敲き石・砥石・くぼみ石

ＳＤ059　暗灰褐色砂質土

弥生土器	壷・甕・鉢・甕蓋
石器	くぼみ石・石匙・楔形石器付随物・スクレイパー・磨製石斧？・二次加工ある剥片・剥片
その他	焼土

ＳＤ059　黒色粘土

弥生土器	鉢・壷・甕
石器	楔形石器付随物・石鏃・剥片・板状剥片・微細剥離痕のある剥片・くぼみ石
土製品	紡錘車

ＳＤ059　暗灰色ブロック土

弥生土器	壷・甕
石器	楔形石器・スクレイパー・二次加工ある剥片・剥片・板状剥片・砥石

Tab.18　中の池遺跡第9次調査遺物一覧表（2）

ＳＤ059　出土層位不明

弥生土器	壷・甕
石器	剥片

Ｓ064

弥生土器	細片
石器	剥片

Ｓ071

石器	石鏃未製品

Ｓ074

弥生土器	細片
石器	剥片

ＳＫ075

弥生土器	細片
石器	剥片

ＳＤ081　暗褐色粘質土

弥生土器	壷・甕・鉢・高坏
石器	石錐・石匙未製品・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石鏃・石鏃未製品・石核・砥石・二次加工ある剥片・剥片・微細剥離痕のある剥片・磨製石斧・小型円柱状石斧・磨製石包丁未製品
土製品	紡錘車
その他	焼土

ＳＤ081　灰褐色細砂

弥生土器	壷・甕・鉢
石器	楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石核・砥石・二次加工ある剥片・剥片・磨製石斧・両面調整石器

ＳＤ081　明黄褐色粘土

弥生土器	壷・甕・鉢・小型壷・ミニチュア壷蓋・大型壷・甕蓋大型壷（内面突帯あり）・ミニチュア壷・壷蓋
石器	石錐・楔形石器・楔形石器付随物・くぼみ石・スクレイパー・石鏃・石鏃未製品・石核・打製石包丁・敲き石・砥石・二次加工ある剥片・ノッチ・剥片・微細剥離痕のある剥片・扁平片刃石斧・磨製石包丁・磨製石斧・磨石
土製品	円板
その他	焼土

ＳＤ081　暗灰色粘土

弥生土器	壷・甕・鉢・甕蓋・壷蓋・ミニチュア甕・高坏
石器	石皿・楔形石器・楔形石器付随物・くぼみ石・スクレイパー・石鏃・石鏃未製品・石核・打製石包丁・砥石・二次加工ある剥片・ノッチ・剥片・微細剥離痕のある剥片・両面調整石器
木製品	木片
その他	焼土

ＳＤ081　出土層位不明

弥生土器	壷・甕・鉢
須恵器	坏

ＳＤ082

弥生土器	壷・甕・鉢
須恵器	坏蓋・壷？
石器	石錐・剥片・磨製石包丁・砥石

ＳＤ083　暗褐色粘質土

弥生土器	壷・甕・鉢・甕蓋・壷蓋・小型壷・高坏
須恵器	甕
国産陶器	徳利（現代）
石器	石錐・石錐未製品・石匙・石皿・軽石・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・擦り石？・石鏃・石鏃未製品・石核・打製石包丁・敲き石・柱状片刃石斧・砥石・二次加工ある剥片・ノッチ・小型方柱状石斧・剥片・微細剥離痕のある剥片・扁平片刃石斧・くぼみ石・磨製石鎌・磨製石包丁・磨製石斧
土製品	円板・土錘・紡錘車
その他	焼土

ＳＤ083　黒褐色粘土

弥生土器	壷・甕・鉢・小型鉢・小型壷・甕蓋・高坏
石器	石皿・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石鏃・石核・打製石包丁・柱状片刃石斧・二次加工ある剥片・剥片・くぼみ石・磨製石包丁・磨製石包丁素材
土製品	円板

ＳＤ083　暗褐色砂質土

弥生土器	壷・甕・鉢・甕蓋・壷蓋
石器	石皿・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石鏃・石鏃未製品・石核・敲き石・柱状片刃石斧・二次加工ある剥片・剥片・微細剥離痕のある剥片・扁平片刃石斧・くぼみ石・磨製石包丁

ＳＤ083　暗灰色粘土

弥生土器	壷・甕・鉢・甕蓋・壷蓋
石器	石皿・楔形石器・楔形石器付属物・スクレイパー・石鏃・石核・打製石鎌・打製石包丁・砥石・二次加工ある剥片・剥片・紡錘車・磨製石包丁・磨製石斧
土製品	円板・不明品
木製品	柄頭（？）・不明品
その他	焼土

ＳＤ083　暗灰色粘質土

弥生土器	壷・甕・鉢・甕蓋
石器	楔形石器・楔形石器付随物・石核・二次加工ある剥片・小型方柱状石斧・剥片・磨製石包丁

ＳＤ083　黒灰色粘土

弥生土器	壷・甕・鉢
石器	楔形石器・楔形石器付随物・小型円柱状石斧・スクレイパー・石鏃・石核・二次加工ある剥片・剥片・微細剥離痕のある剥片
土製品	土錘
その他	焼土

ＳＤ083　暗灰色砂質土

弥生土器	壷・甕・鉢・甕蓋
石器	楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石核・二次加工ある剥片・剥片

ＳＤ083　出土層位不明

弥生土器	壷・甕・壷蓋・甕蓋
石器	楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石鏃・石核・柱状片刃石斧・二次加工ある剥片・剥片・磨製石包丁
その他	焼土

ＳＤ084

弥生土器	壷・甕・鉢
須恵器	甕
石器	剥片・磨製石包丁・流紋岩板材

Tab.19　中の池遺跡第9次調査遺物一覧表（3）

ＳＤ085

弥生土器	壷・甕・ミニチュア甕
須恵器	坏蓋
石器	石鏃・スクレイパー・剥片

Ｓ086

弥生土器	甕

ＳＸ098

弥生土器	細片・甕（逆「Ｌ」あり）・壷
石器	石鏃・剥片

Ｓ106

弥生土器	細片

ＳＰ110

弥生土器	細片

Ｓ114

弥生土器	細片
石器	剥片

ＳＰ117

弥生土器	壷・甕（逆「Ｌ」あり）

Ｓ121

弥生土器	壷

ＳＤ131　黒灰色細砂

弥生土器	壷・甕
石器	楔形石器・楔形石器付随物・石核・敲き石・二次加工ある剥片・剥片
土製品	円板

ＳＤ131　暗褐色細砂

弥生土器	壷・甕・鉢・甕蓋
石器	楔形石器付随物・くぼみ石・スクレイパー・石鏃未製品・剥片
土製品	円板

ＳＤ131　暗灰色細砂

弥生土器	壷・甕
国産陶器	摺鉢

Ｓ133　（撹乱）

弥生土器	細片
染付	近世

ＳＤ134　黒色粘土

弥生土器	壷・甕・壷蓋・鉢・甕蓋
須恵器	杯
石器	石皿・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石鏃・石鏃未製品・石核・打製石包丁・敲き石・砥石・二次加工ある剥片・剥片・微細剥離痕のある剥片・両面調整石器
その他	焼土

ＳＤ134　暗褐色細砂

弥生土器	壷・甕・鉢
石器	くぼみ石・敲き石・砥石・剥片

ＳＤ134　暗灰色粘質土

弥生土器	壷・甕

ＳＤ134　黒灰色細砂

弥生土器	壷・甕・鉢
石器	石皿・磨製石包丁・くぼみ石・スクレイパー・石核・二次加工ある剥片・剥片
その他	焼土

ＳＤ134　暗褐色砂質土（地山ブロック含む）

弥生土器	壷・甕
石器	磨製石包丁・剥片・石核

ＳＤ134　出土層位不明

弥生土器	壷・甕
国産陶器	備前摺鉢

Ｓ135　（撹乱）

弥生土器	甕・壷
須恵器	壷
石器	石核・剥片

Ｓ136　（撹乱）

弥生土器	甕・壷
国産陶器	鉢・備前摺鉢・柿釉皿（近世）
染付	国産
石器	石核・剥片・磨製石包丁
瓦類	平瓦

Ｓ137　（近世素掘溝）

弥生土器	細片・壷
染付	近世
石器	剥片

Ｓ138　（近世素掘溝）

弥生土器	細片
国産陶器	備前
石器	石鏃

Ｓ139　（近世以降素掘溝）

弥生土器	細片・甕
石器	剥片

ＳＤ141　（素掘溝）

弥生土器	細片
国産陶器	小型浅鉢
染付	椀（近代）
石器	剥片

Ｓ142

弥生土器	細片
染付	国産
瓦類	細片

Ｓ147

弥生土器	細片

Ｓ148

弥生土器	細片

Ｓ149

石器	剥片

Ｓ150

弥生土器	細片

Tab.20　中の池遺跡第9次調査遺物一覧表（4）

S151　（撹乱）

弥生土器	細片
石器	剥片

S153　（撹乱）

弥生土器	細片
石器	剥片

SK154

弥生土器	壷・甕
石器	剥片

SA155

弥生土器	細片

S157　（撹乱）

弥生土器	細片

S158　（撹乱）

弥生土器	細片

S159　（撹乱）

弥生土器	細片
国産陶器	不明

S160　（撹乱）

弥生土器	細片

S162　（撹乱）

弥生土器	細片
瓦類	平瓦

S163　（撹乱）

弥生土器	細片

S164　（撹乱）

弥生土器	細片

S166

弥生土器	細片
石器	石核

SD167　黒褐色粘質土

弥生土器	壷・甕・鉢（内面突帯あり）・高坏
染付	国産椀
石器	石錐・石匙・石匙未製品・石皿・楔形石器・楔形石器付随物・くぼみ石・スクレイパー・石鏃・石鏃未製品・石核・打製石包丁・敲き石・柱状片刃石斧・二次加工ある剥片・ノッチ・剥片・微細剥離痕のある剥片・扁平片刃石斧・磨製石包丁
土製品	円板・紡錘車
その他	焼土

SD167　暗灰色砂質土

弥生土器	壷・甕・鉢
石器	楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石鏃・石核・剥片・磨製石包丁

SD167　暗灰色粘土

弥生土器	壷・甕・鉢・甕蓋・壷（内面突帯）
石器	石匙・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石核・打製石包丁・砥石・二次加工ある剥片・剥片
土製品	円板
その他	焼土

SD167　暗灰色粘土（下層）

弥生土器	甕・壷・ミニチュア壷
石器	楔形石器・楔形石器付随物

SD167　暗灰褐色砂質土

弥生土器	壷・甕・鉢・高坏・甕蓋
石器	打欠石錘・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石鏃未製品・二次加工ある剥片・剥片

SD167　黒色粘土

弥生土器	壷・甕・甕蓋・鉢
石器	剥片

SD167　灰白色地山ブロック土

弥生土器	細片・甕
石器	スクレイパー・石鏃未製品・石核

SD167　出土層位不明

弥生土器	壷・甕・鉢・てづくね

SK168

弥生土器	細片・甕

SK169

弥生土器	細片

S170　（素掘溝）

弥生土器	細片
国産陶器	備前

S171

弥生土器	細片

S172

弥生土器	甕
石器	剥片

S174　（撹乱）

弥生土器	甕・細片

SK176

弥生土器	細片

S178　（撹乱）

弥生土器	壷・甕
国産陶器	唐津椀・瓦質土器（ホウラク）
染付	近世
石器	剥片・石核
瓦類	平瓦

SK179

弥生土器	壷・細片
石器	剥片

S180

弥生土器	細片

S181

弥生土器	細片

S182

弥生土器	細片
石器	剥片

Tab.21　中の池遺跡第9次調査遺物一覧表（5）

S183　（素掘溝）

弥生土器	細片
石器	剥片

S184

弥生土器	細片

SK-185

弥生土器	壷・甕・ミニチュア蓋
石器	楔形石器付随物・スクレイパー・砥石・二次加工ある剥片・剥片
その他	焼土

S187

須恵器	細片
石器	剥片

S188

石器	剥片

S189

弥生土器	細片

S194

弥生土器	壷・甕
国産陶器	不明品（近世）
石器	剥片

SX197

弥生土器	細片

南区

S198-a（小ピット群）

石器	剥片

S199-a（小ピット群）

弥生土器	細片

S201

弥生土器	細片
石器	石核

ST203

弥生土器	細片
石器	二次加工ある剥片・石鏃

SD204

弥生土器	壷・甕
石器	楔形石器・剥片・打製石包丁

SD205

弥生土器	壷
石器	剥片

S206

弥生土器	細片
石器	剥片

S207

弥生土器	細片
石器	剥片

S208

弥生土器	細片

SD209　黄灰色粘土

弥生土器	壷
石器	剥片

SD209　暗灰色細砂

弥生土器	壷・甕・細片
須恵器	坏
石器	磨製石斧・剥片

SD209　灰褐色細砂

弥生土器	壷
石器	スクレイパー

SD209　暗灰褐色砂

弥生土器	壷・甕
石器	スクレイパー

SD209　出土層位不明

弥生土器	壷・細片

SD210

弥生土器	細片
須恵器	坏・皿
石器	剥片

SD212

木製品	不明品

S214

弥生土器	細片

S215

石器	剥片

S216

弥生土器	細片

S217

弥生土器	細片

SD218

弥生土器	壷・細片

S219

弥生土器	細片

S220

弥生土器	細片
石器	剥片

S221

弥生土器	細片

S222

弥生土器	壷

S223

弥生土器	細片

S224

弥生土器	細片

Tab.22　中の池遺跡第9次調査遺物一覧表（6）

ＳＫ225

弥生土器	壷

Ｓ226

須恵器	壷

Ｓ227

弥生土器	細片
須恵器	細片

Ｓ228

古式土師器	細片

水田地区　出土層位不明（3区断ち割りＺ層）

弥生土器	細片
石器	剥片

水田地区　出土層位不明（AV-3グリッド断ち割りＺ層）

弥生土器	細片
石器	剥片

水田地区　出土層位不明（3区セクションCＺ層）

弥生土器	細片

水田地区　暗灰色砂質土

弥生土器	細片
石器	剥片・石核

水田地区　暗黄褐色細砂

弥生土器	壷・甕
石器	楔形石器付随物・剥片・スクレイパー・二次加工ある剥片
土製品	円板

水田地区　暗褐灰色粘質土

弥生土器	壷・細片
石器	剥片

水田地区　黒灰色粘土

弥生土器	壷・甕・細片
土師器	甕
石器	剥片・石鏃・打製石包丁・石核

水田地区　赤灰色粘土

弥生土器	細片・甕・壷・甕蓋
石器	楔形石器・剥片・打製石包丁・二次加工ある剥片

水田地区　Ｚ区Ｚ層（落込み埋土）

弥生土器	壷・甕
その他	焼土

水田地区　暗灰色粘質土

須恵器	坏

水田地区　暗灰褐色粘土

弥生土器	壷
石器	剥片

水田地区　暗赤灰色粘土

弥生土器	壷
石器	磨製石包丁・砥石

西区　深掘断面図中55層

木製品	不明

Ｚ区Ｚ層（出土地点・層位不明）

弥生土器	壷・甕・鉢・壷蓋
土製品	紡錘車
その他	焼土

Tab.23　中の池遺跡9次調査遺構一覧表（1）

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
001		土坑	弥生？	AjN4～AkN3	
002	SD002	溝	最内から4本目、2区S134と同一	AfN3～AjN10	
003		ピット	005→003	AiN4	
004		ピット	004→005	AiN4	
005		土坑	004→005→003	AiN4	
006	欠	欠			
007	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる	AgN3	
008	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→008	AgN3	
009	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→009	AgN4	
010	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→011→110	AgN4	
011	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→011→110	AgN4	
012	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→013→112	AgN4	
013	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→013→112	AgN4	
014	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→015→114	AgN4	
015	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→015→014	AgN4	
016	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→016	AgN4	
017	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→017	AkN4	
018	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→019→018	AhN5	
019	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→019→018	AhN5	
020	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→021→020	AhN5	
021	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→021→020	AhN5	
022	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→023→022	AhN5	
023	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→023→022	AhN5	
024	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→024→025	AhN5	
025	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→024→025	AhN5	
026	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→026→027	AhN6	
027	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→026→027	AhN6	
028	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→028→029	AhN6	
029	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→028→029	AhN6	
030	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→030→031	AiN6	
031	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→030→031	AiN6	
032	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→032→033	AiN6	
033	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→032→033	AiN6	
034	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→034→035	AiN6	
035	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→034→035	AiN6	
036		ピット	弥生の埋土に類似　002→036	AiN7	
037	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→038→037	AiN7	
038	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→038→037	AiN7	
039	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→040→039	AiN7	
040	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→040→039	AiN7	
041	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→042→041	AiN7	
042	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→042→041	AiN7	
043	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→044→043	AjN8	
044	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→044→043	AjN8	
045	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる　002→046→045	AjN8	
046		ピット	埋土色調弥生と異なる　002→046→045	AjN8	
047		ピット	埋土色調弥生と異なる　002→047	AjN8	
048		ピット	埋土色調弥生と異なる　002→048	AJN9	
049		柵列	埋土色調弥生と異なる　002→050→049	AgN3～AjN9	
050		柵列	埋土色調弥生と異なる　002→050→049	AgN4～AjN8	
051		自然地形	深さ2～3cm、自然地形のくぼみ	AfN3	
052	欠				
053	欠				
054	欠				
055		ピット		AgN4	
056		ピット		AgN4	
057	欠				
058		自然地形	深さ5cm程度。自然地形のくぼみと考えられる 62→58	AgN6	
059	SD059	溝	064→097→059 058→059・062→059	AeN4～AhN12	
060	欠				
061	欠				
062		自然地形	深さ2cmほど。自然地形　062→058→059	AgN6～AhN7	

Tab.24　中の池遺跡9次調査遺構一覧表（2）

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
063		ピット		AeN7,8	
064		樹根	起伏激しく、樹根と考えられる　064→97→59	AfN7,8	
065		欠			
066		欠			
067		欠			
068		欠			
069		樹根		AgN8	
070		樹根		AgN8	
071		樹根	059→071→082	AgN8,9	
072		ピット		AgN9	
073		樹根	073→082	AgN9	
074		樹根		AgN9	
075	SK075	土坑	S-059埋没途中に掘削か？128→075→059	AhN10	
076	欠				
077		自然地形	深さ2cm、自然地形	Ah10,11	
078	欠				
079		自然地形	深さ2cm、自然地形	AhN11	
080		土坑		AiN12	
081	SD081	溝	081→084→082,085　弥生環濠	AdN6～AeN24	
082	SD082	溝	195,186→081→084→082,085,→071 073→124→087　飛鳥時代	AdN6～AeN28	
083	SD083	溝	113,130,127→083→194,138,139,117　弥生環	AcN8～AoN21	
084	SD084	溝	081→084→082,085　飛鳥時代	AdN16～AeN10	
085	SD085	溝	081→084→082,085　飛鳥時代	AdN11～AeN25	
086		樹根	086→001　樹根　　飛鳥時代	AgN11	
087		樹根	087→082	AgN12	
088		87と同一	087→082	AgN12	
089		溝	089→082,084	AfN8	
090	欠				
091		ピット	S-059の肩に存在する小穴　S-059掘削後検出	AiN8	
092		ピット	S-059の肩に存在する小穴　S-059掘削後検出	AkN8	
093		ピット	S-059の肩に存在する小穴　S-059掘削後検出	AhN8	
094		ピット	S-059の肩に存在する小穴　S-059掘削後検出	AhN8	
095		ピット	S-059の肩に存在する小穴　S-059掘削後検出	AhN7	
096		ピット	S-059の肩に存在する小穴　S-059掘削後検出	AgN7	
097		ピット		AdN8	
098	SX098	ピット	大型のピット	AdN11	
099		ピット	S-156-a　　099→100	AcN10	
100		ピット		AcN10	
101		ピット	S-156b	AcN10,11	
102		自然地形	深さ2cmの自然地形	AcN11	
103		樹根	樹根	AcN11	
104		ピット		AcN11	
105		ピット	S-156c	AcN11	
106		溝	099 ・107→106　　灰色の埋土　中世？	AcN10,11	
107		ピット	100 ・107→106　　灰色の埋土　中世？	AbN12,AcN10	
108		ピット	S-156d	AdN12	
109		ピット		AdN12	
110	SP110	ピット		AdN12	
111		ピット	S-156e	AdN12	
112		ピット	S-156f	AdN13	
113		ピット	S-113→083	AeN12	
114		溝	083→114→085	AeN15,AfN14	
115		樹根	115→081・085	AfN14	
116		ピット	大型のピット	AdN14	
117	SP117	ピット	大型のピット	AcN15	
118		樹根	118→083・085	AfN14	
119		樹根	119→085	AfN15	
120		溝	120→083	AeN16,AfN16	
121		樹根	121→082	AgN16	
122		樹根	122→081・082	AgN15,16	
123		樹根	123→082	AgN15,	
124		樹根	124→082	AgN10	

Tab.25　中の池遺跡9次調査遺構一覧表（3）

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
125		ピット	125→059	AgN8	
126		ピット		AdN13	
127		ピット	127→083	AdN13	
128		ピット	128→075　黒色の埋土で異質	AhN10	
129		ピット	129→059	AhN10	
130		ピット	130→083	AeN13	
131	SD131	溝	169・168→131　弥生時代の溝	AjN32～AhN26	
132		土坑	近世	AjN27,AkN27	
133		土坑	近世	AkN27	
134	SD134	溝	134→82　SD002と同一	AgN28～AjN22	
135		カクラン		AcN21～AeN17	
136		カクラン	坪境	AbN14～AiN21	
137		溝	近世以降の素堀溝　083→137→135	AcN20～AdN19	
138		溝	近世以降の素堀溝	AdN18	
139		溝	近世以降の素堀溝　145,083→139→135	AbN18～AdN19	
140		溝	S139 の延長？	AbN18	
141	SD141	溝	坪境溝（近世以降）　141→136	AbN15～AdN17	
142		ピット	近・現代　147→142	AbN17	
143		ピット	S155d	AcN19	
144		ピット	S155c	AcN19	
145		ピット	S155a　145→139	AcN18	
146		ピット	S155a	AcN17	
147		ピット	147→142	AbN17	
148		ピット		AbN18	
149		ピット		AbN17	
150		ピット		AbN17	
151		溝	カクラン（埋土ガレキと粘土の混在土）	AfN25	
152		ピット	152→139	AcN18	
153		溝	カクラン（151と埋土類似）	AgN23,24	
154	SK154	土坑	埋土灰色で新しい　167→154	Ah,AiN22,23	
155	SA155	柵列		AcN17～19	
156		柵列		AbN10～AdN13	
157		ピット	現代の稲かけ穴（ビニール等入る）	AeN19	
158		ピット	現代の稲かけ穴（ビニール等入る）	AeN20	
159		ピット	現代の稲かけ穴（ビニール等入る）	AeN20	
160		土坑	現代の稲かけ穴（ビニール等入る）	AdN21	
161		ピット	現代の稲かけ穴（ビニール等入る）	AdN21	
162		ピット	現代の稲かけ穴（ビニール等入る）	AdN21	
163		ピット	現代の稲かけ穴（ビニール等入る）	AdN22	
164		ピット	時期不明	AdN22	
165		ピット	現代の稲かけ穴	AdN22	
166		自然地形	深さ2cm	AfN21-22	
167	SD167	溝	082,084,085,151～154←167　SD059と同一	AhN21～AfN26	
168	SK168	土坑	168→131	AmN29	
169	SK169	土坑	169→131	AlN29	
170		溝	185→081→170→178　S139の続き？	AfN19～AkN20	
171		樹根	171→082,084	AgAk18,19	
172		樹根	171→082,085	AkN20	
173		土坑	173→167→082→170	Ag,AkN20	
174		ピット	083→174　現代稲かけ穴	AdN21	
175		土坑		AmN30	
176	SK176	土坑	176→083	AdAeN20	
177		欠			
178		土坑	カクラン（現代揚水車設置場）	Ae,AfN19	
179	SK179	土坑	時期不明	AkN23	
180		ピット		AeN24	
181		ピット		AcN24	
182		溝	自然地形か？	AcN23	
183		溝	084→183　中世？埋土灰色	AgN20	
184		土坑	近世？　132と埋土同じ	AiN28	
185		土坑	185→081→170	AfN19	
186		土坑	186→081	AeN20	
187		樹根	187→082　須恵器出土	AhN24	

Tab.26　中の池遺跡9次調査遺構一覧表（4）

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
188		樹根	188→082、084	AgAhN17	
189		樹根	189→082、084	AfAgN26	
190		ピット	S-167暗褐色粘質土直下より貫入　橋と関連？	AhN22	
191	197d	ピット	167完掘後検出　切り合い不明	AhN22	
192	197c	ピット	168完掘後検出　切り合い不明	AhN22	
193		ピット	193→167	AgN22	
194		土坑	083→194	AdN17	
195	197d	ピット	167完掘後検出　切り合い不明	AhN22	
196	197b	ピット	168完掘後検出　切り合い不明	AhN22	
197	SX197	橋	167暗褐色粘質土直下より設置の可能性大	AhN22	
198		Az-9の小穴群		Az-9	
199		小穴群		Az-10	
200		小穴群		Ay-10	
201		小穴群		Ay-8	
202		自然地形		Am,An-2	
203	ST203	木棺墓	203→202	Am-2	
204	SD204	溝		Am-5～Ap-5	
205	SD205	溝		Ao-4～Ap-3	
206		小穴群		Ay-9	
207		小穴群		Aw-10	
208		小穴群		Aw-7	
209	SD209	溝	弥生前	Bi-5,-6～Bk-5,-6	
210	SD210	溝		Bk-4,-5	
211		溝		Ap-2～Aq-1	
212	SD212	溝		Aq-4～Aw-3	
213	ST213	木棺墓		Am-1	
214		小穴群		Bg-7	
215		小穴群		Bg-8	
216		小穴群		Bf-7	
217		小穴群		Bf-8	
218	SD218	溝		Av-3～Aq-3	
219		小穴群		Be-9	
220		小穴群		Be-8	
221		小穴群		Bd-9	
222		小穴群		Bd-8	
223		小穴群		Bd-7	
224		小穴群		Bc-6	
225	SK225	土坑	225→002,005	Ah-4	
226		小穴群		Bb-11	
227		小穴群		Bc-9	
228		小穴群		Bb-6	

Fig.178　中の池遺跡第9次調査北区遺構配置略図　（S=1/400）

Fig.179　中の池遺跡第9次調査南区遺構配置略図　（S=1/400）

写真図版

遺物写真に付した数字は
Fig.番号－遺物番号
の順である。

北区遠景（南東から）

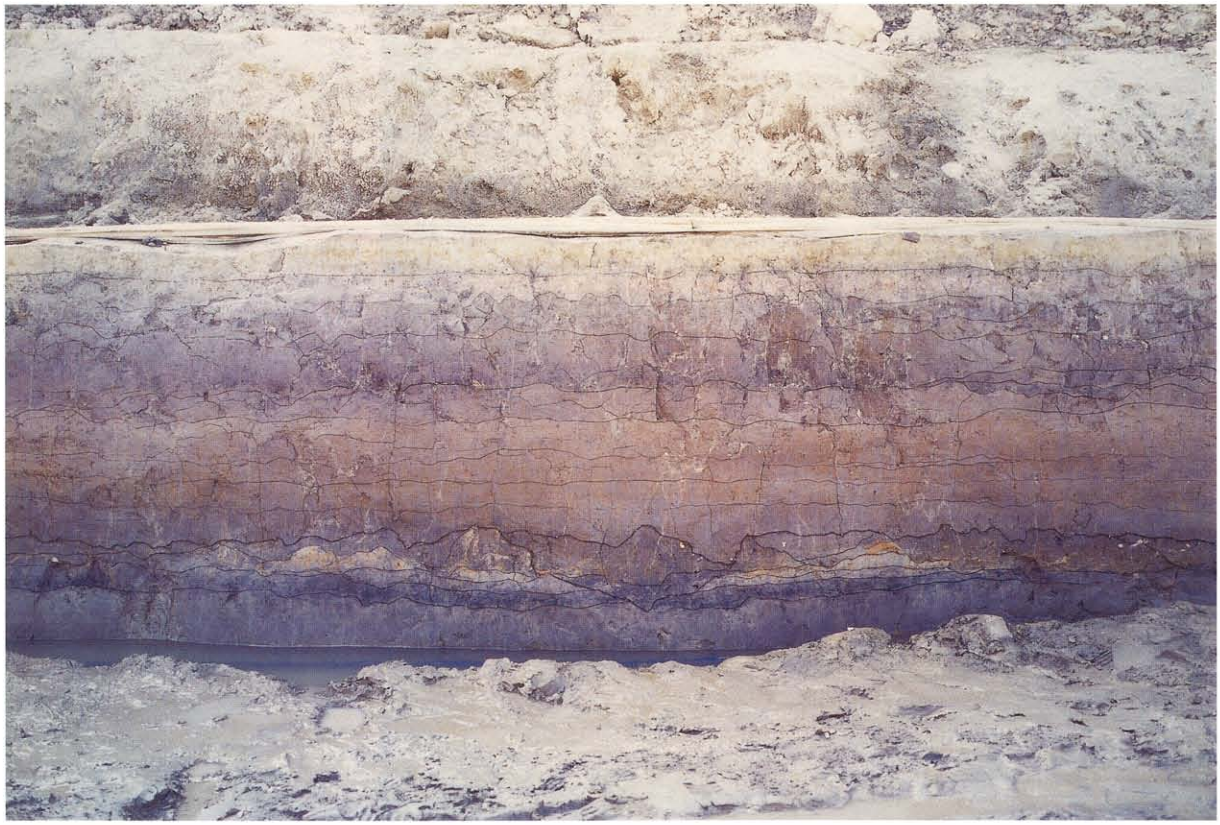
SD002　東壁（西から）

Pla.2

SD059　西壁（東から）

SD081　西壁（東から）

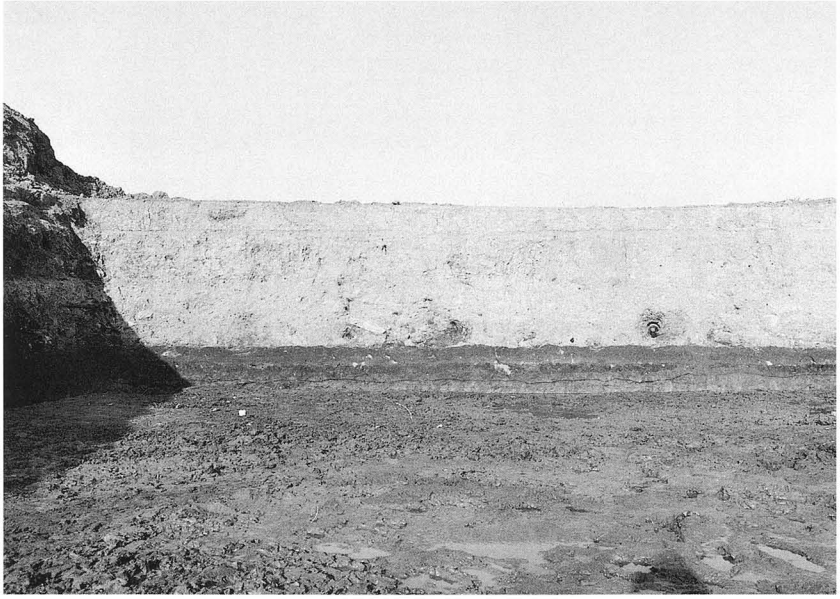
SD083　西壁（東から）



水田域西壁

Pla.4

調査前（南から）



北区東壁1（西から）

北区東壁2（西から）

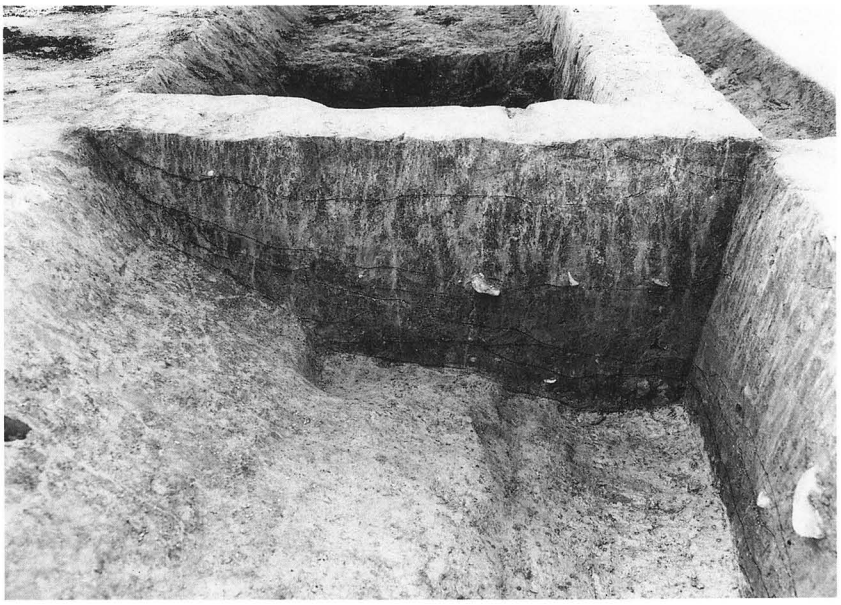
北区深掘状況（北から）

SD002　セクションA南半
（西から）

SD002　セクションA北半
（東から）

Pla.6

SD002　セクションB南半
（東から）

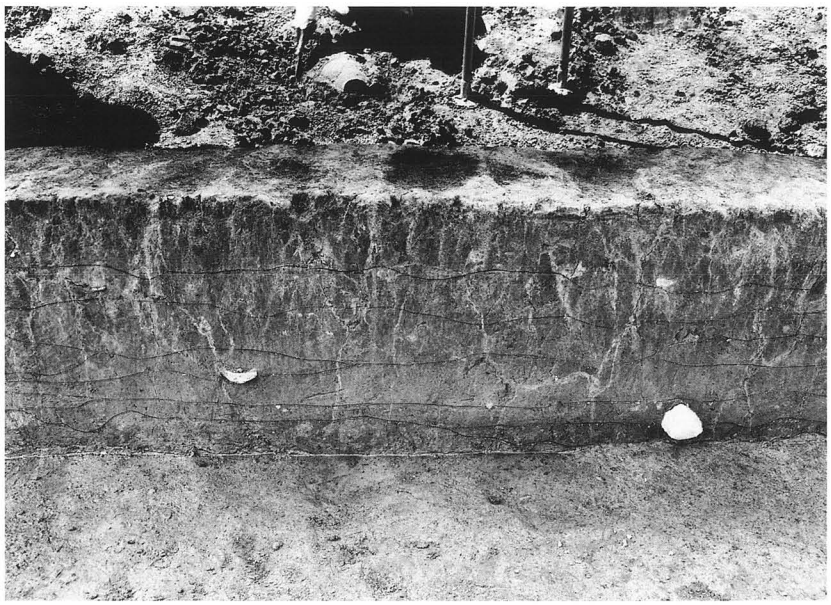


SD002　セクションB北半
（西から）

SD002　セクションC南半
（西から）

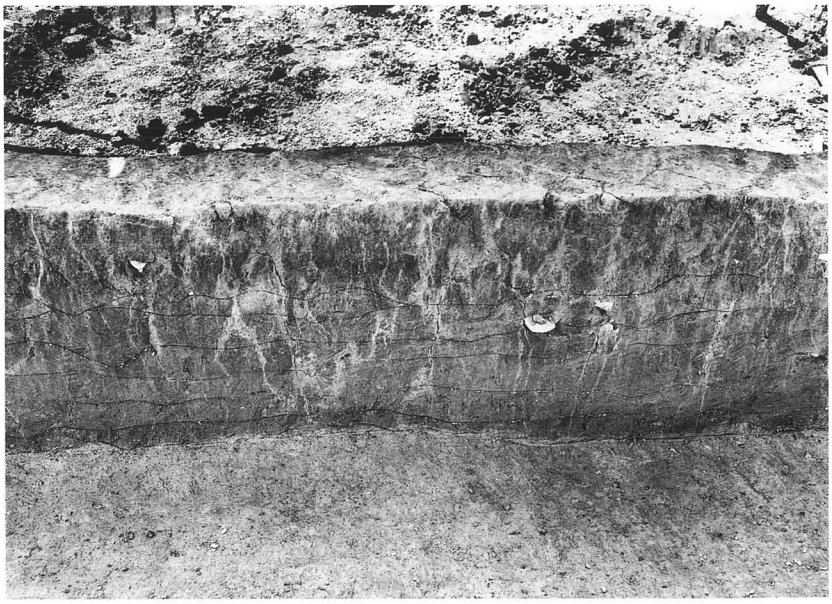
SD002　セクションC北半
（東から）

SD002　セクションB-C間
縦断面1（南から）

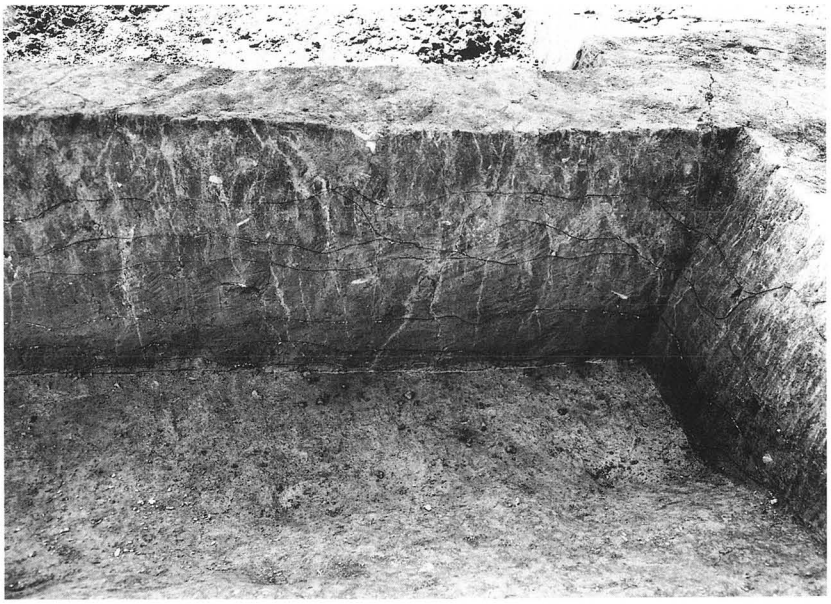


SD002　セクションB-C間
縦断面2（南から）

Pla.8

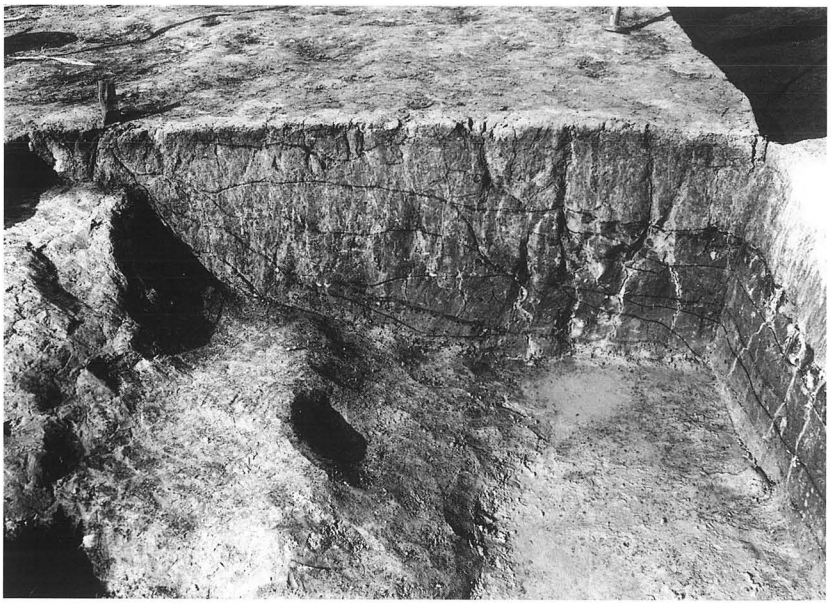


SD002　セクションB-C間
縦断面3（南から）

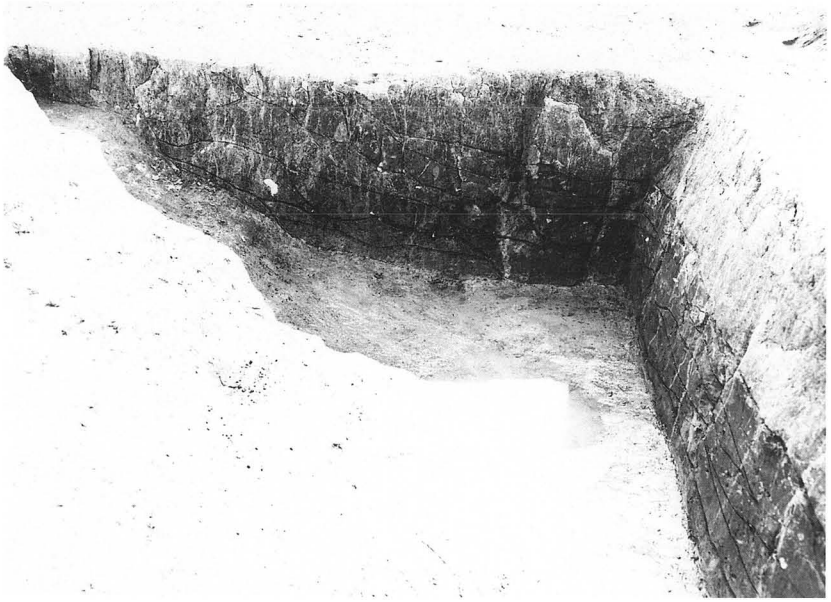


SD002　セクションB-C間
縦断面4（南から）

SD002　完掘（東から）



SD059　セクションB北半
（西から）



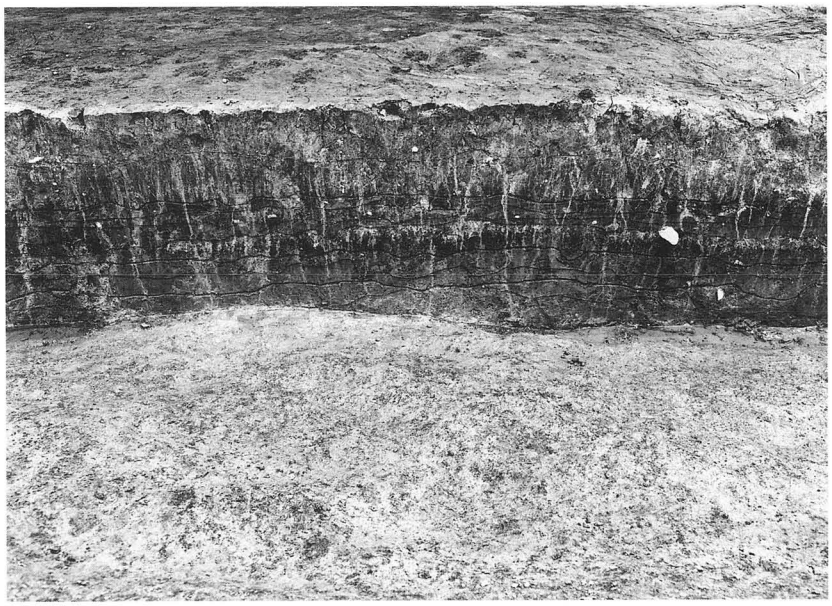
SD059　セクションB南半
（東から）

SD059　セクションC南半
（東から）

Pla.10

SD059　セクションC北半
（西から）

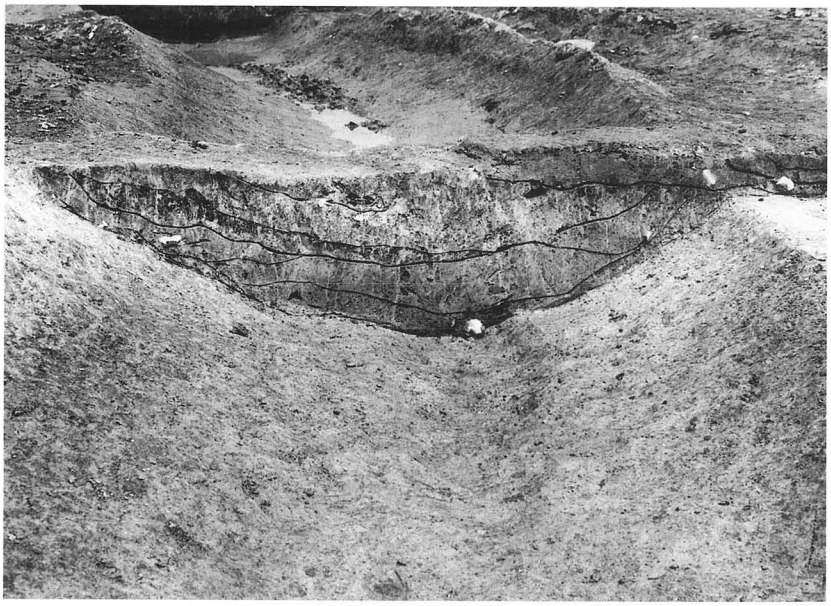
SD059　C-D間縦断面1
（北から）



SD059　C-D間縦断面2
（北から）

SD059　C-D間縦断面3
（北から）

SD059　完掘



SD081　セクションB
（南西から）

Pla.12

SD081　セクションC
（南西から）

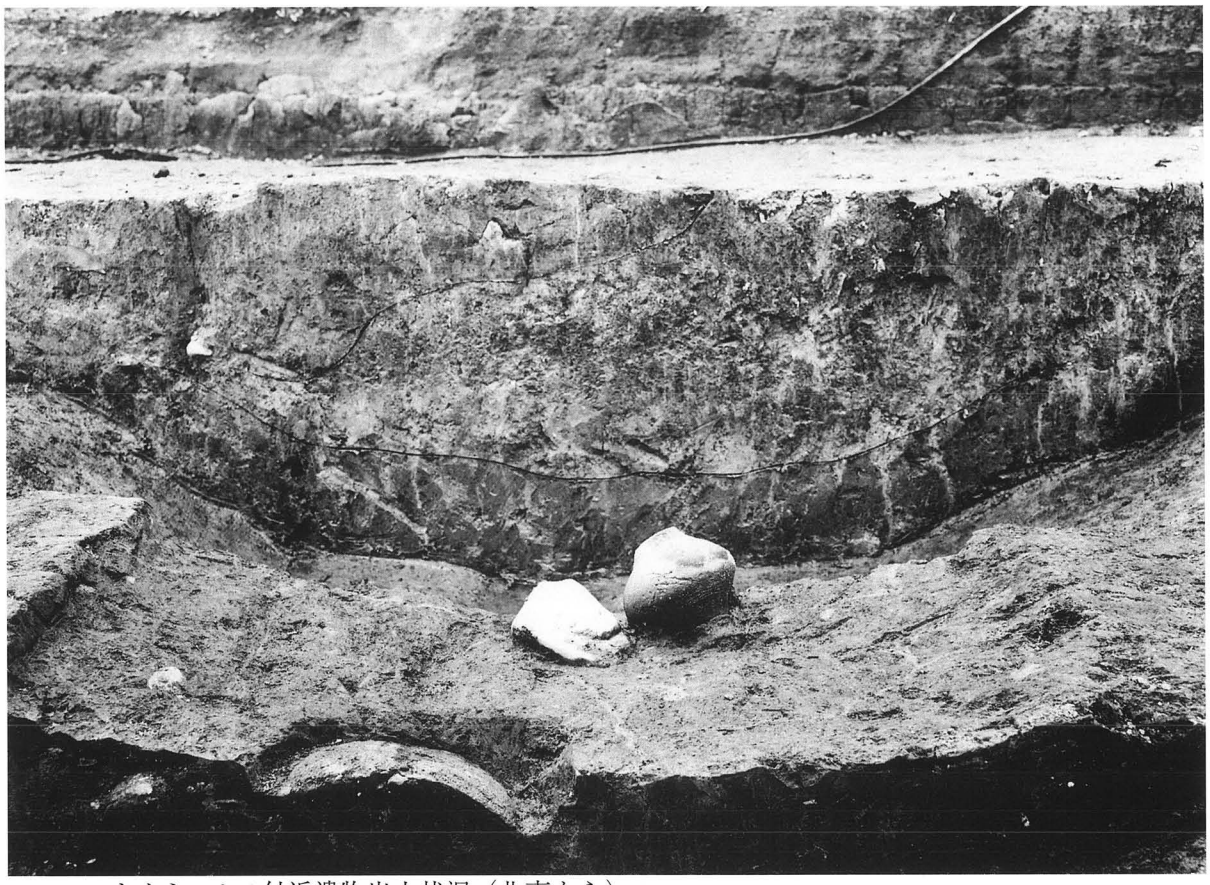
SD081　セクションE
（南から）

SD081　セクションD-E間
縦断面1（西から）

SD081　セクションD-E間
縦断面2（西から）

SD081　セクションD-E間
縦断面3（西から）

SD081　セクションD-E間
縦断面4（西から）



SD081　セクションA付近遺物出土状況（北東から）

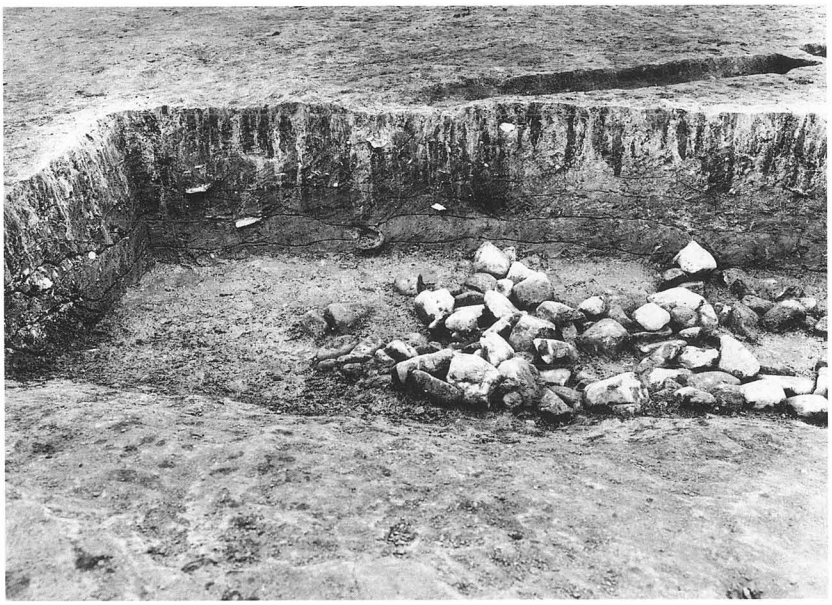
SD081　北端完掘（南東から）

SD083　セクションB西半
（北から）

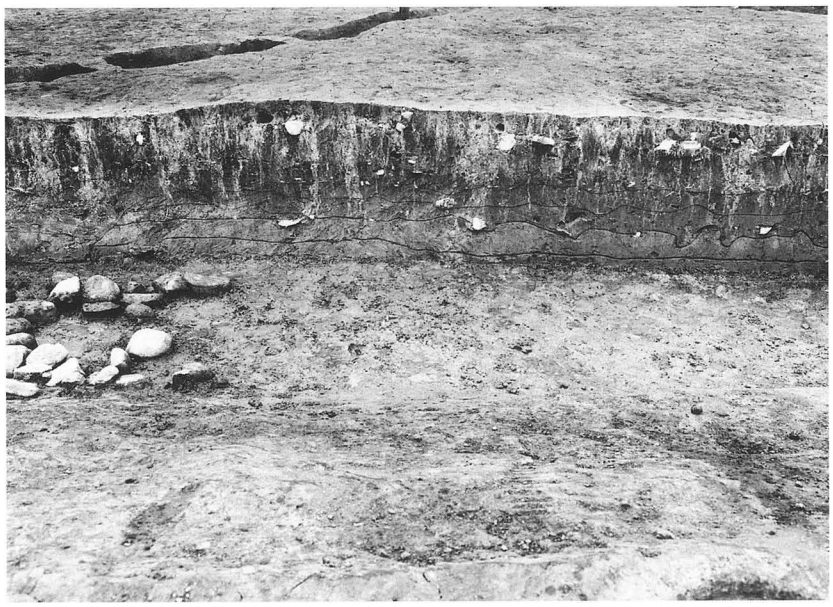
SD083　セクションB東半
（南から）

SD083　セクションC西半
（南から）

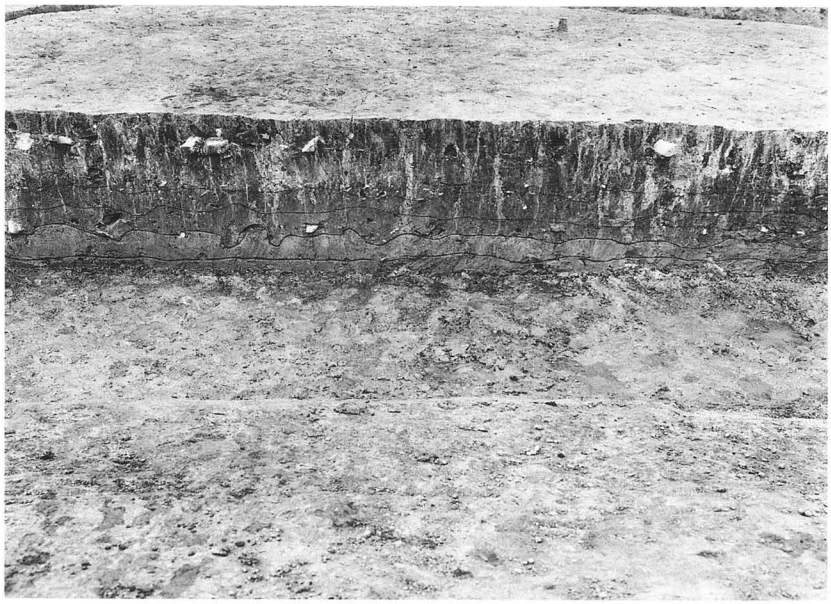
SD083　セクションA以西
縦断面（南から）



SD083　セクションB-C間
縦断面1（西から）

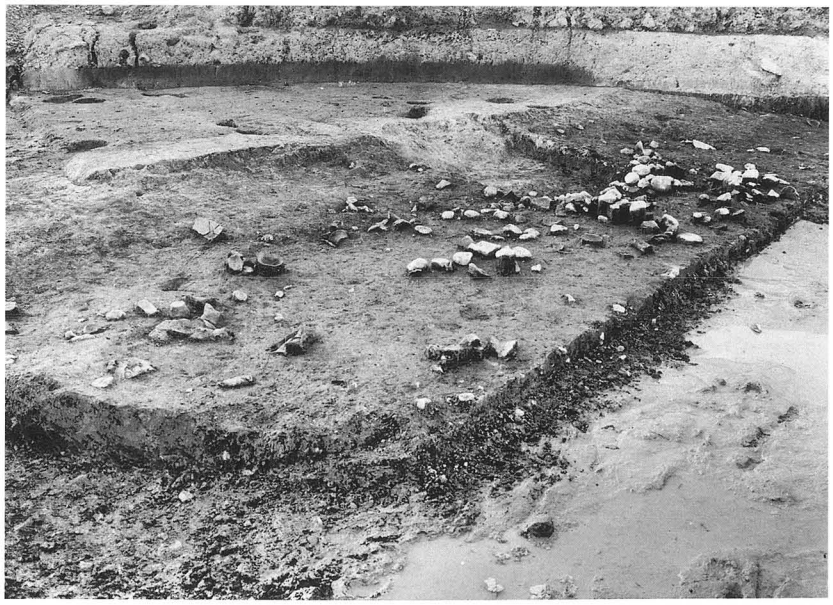


SD083　セクションB-C間
縦断面2（西から）



SD083　セクションB-C間
縦断面3（西から）

SD083　セクションB-C間
縦断面4（西から）



SD083黒褐色粘土遺物出土状況